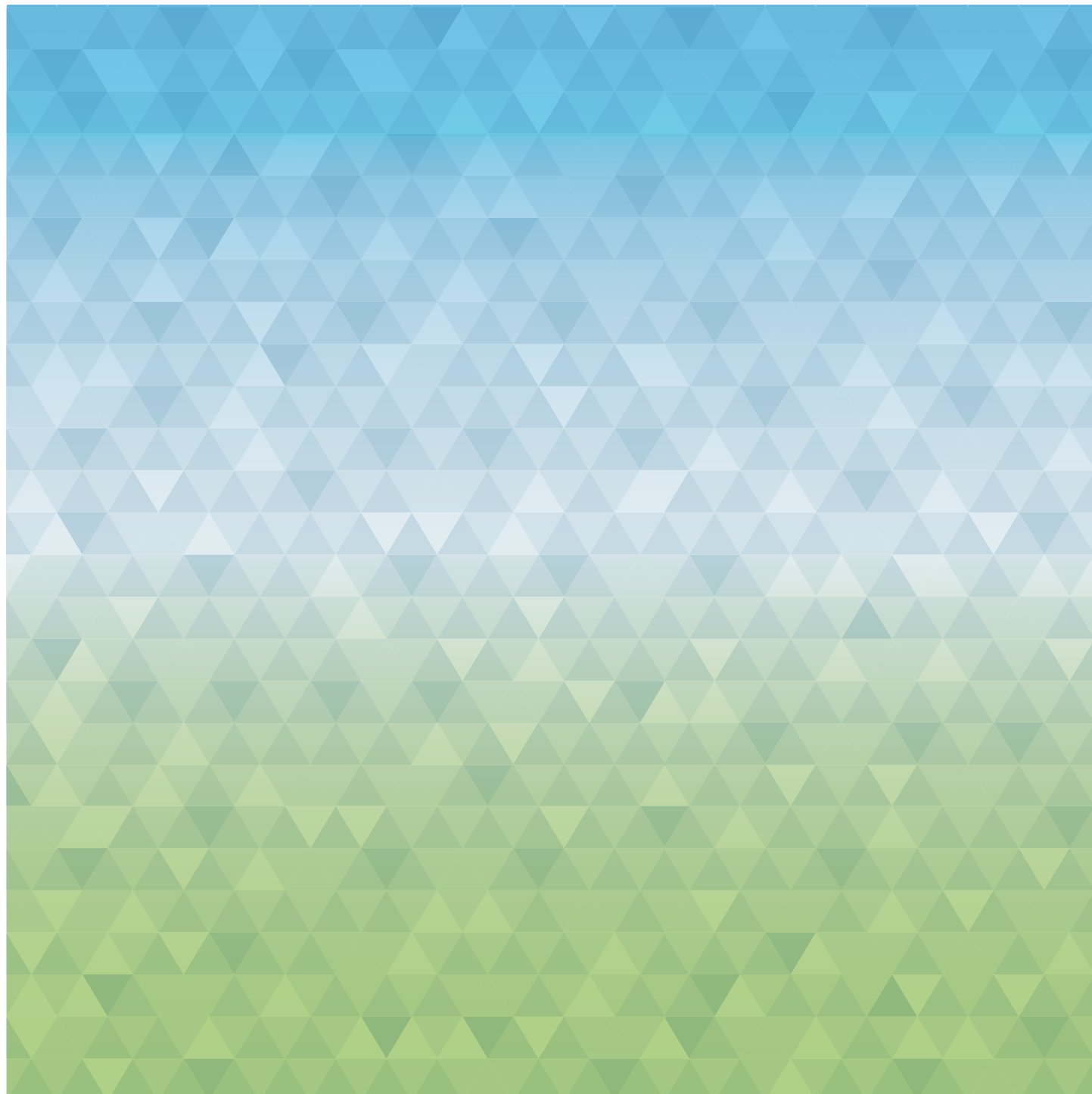


平成 26 年度 東北福祉大学 子ども支援プロジェクト

| 活 | 動 | 報 | 告 | 書 |



ガールズバンド「プリンセス プリンセス」からの
被災地復興支援寄付金に基づく活動



東北福祉大学
TOHOKU FUKUSHI UNIVERSITY

東北福祉大学

子ども支援プロジェクト

ごあいさつ



この報告書は、ガールズバンド「プリンセス プリンセス」様からの被災地復興支援の寄付金を基に立ち上げた「子ども支援プロジェクト」の 2014 年度の活動をまとめたものです。取り組みを始めた当初は、ご寄付をいただいたプリンセス プリンセス様のお気持ちをどう生かしていくか、試行錯誤を繰り返したというのが実情です。そしてみえてきたのが、学力低下や不登校気味になっている子どもたちがいるという現実を見据えた子どもたちへの支援とそうした支援を継続的に行うための人材育成という二本の柱で取り組みを進めていくという基本方針です。寄付金を基金として、被災した地域や配慮の必要な子どもたちを多面的に支援して地域の子どもたちに元気を取り戻してもらうとともに、東北の豊かな自然を利用して、地域を理解し地域を活かせる人材を育てる（学生のスキルアップ）ことを目指したプロジェクト活動を始めました。

初年度（2014 年度）は、教職や保育を学ぶ学生、子どもの支援活動に関心のある学生が、七ヶ浜（宮城県七ヶ浜町）、野々島（宮城県塩竈市）の各フィールドで教員の指導の下にさまざまな活動を実施しました。地元の教育委員会、NPO 団体等と連携・協力を図りながら小学校でサマースクールを開催し、学習の補助的指導やものづくり教室・表現活動などの体感型学習を実施しています。また自然を活かした活動や創作活動では、動植物の観察や活用方法、カヌーを利用したアクティビティなどの

自然環境教育プログラムによる体験型学習を提供し、さらに学生たちの企画（サークルやゼミでの参加）による子ども支援活動も実施しました。

しかしながら、なかなか思うようには実施できず、行きつ戻りつしたこともありました。プロジェクトが実際に動き出した時期が遅く、準備に時間を要して開催時期がずれ込んでしまったり広報が十分にできなかったりと、反省点も多くみえています。それでも、皆様のご理解とご協力の下で少しずつ前に進み、ここまでたどり着くことができました。私たちの励みは、地域の子どもたちの笑顔でした。少しでも地域の皆様や子どもたちの元気を取り戻すお手伝いが出来たならば、私たちの喜びとするところです。なお、これらの事業は次年度以降も、場所や規模を拡大して早い時期から実施していきたいと考えています。

最後になりましたが、このプロジェクト立ち上げの基になりましたプリンセス プリンセスの皆様、株式会社ディスクガレージ中西健夫様をはじめとする関係各位、七ヶ浜町教育委員会教育長様をはじめ教育委員会の皆様、塩竈市教育委員会教育長様および教育委員会の皆様、野々島自然塾の皆様、情報のあんこの皆様、他多くの皆様からご支援・ご協力をいただきました。ここに皆様への感謝の気持ちを表すとともに、今後ともご指導・ご支援を賜りますようお願いいたします。

東北福祉大学
子ども支援プロジェクト推進委員会
委員長 星山 幸男

もくじ

活動写真	5
------------	---

第1章 プロジェクト概要

Ⅰ 子ども支援プロジェクト実施計画概要	15
Ⅱ 全体構想	17
Ⅲ 子ども支援プロジェクト推進委員会	20

第2章 プロジェクト実施内容

全体スケジュール	27
Ⅰ セケ浜での活動	
セケ浜町での活動	31
サマースクール報告	32
2014 セケ浜芸術祭—音と絵と科学にふれよう—	38
Ⅱ 野々島プロジェクト	
野々島プロジェクト	53
野々島の活動・展開（全体ストーリー案）	54
「島であそべんちゃー IN 野々島」事前活動報告	55
発表資料	58
「島であそべんちゃー IN 野々島」活動報告	61
発表資料	71
「島であそべんちゃー IN 野々島」事後活動報告—「国見祭」（大学祭）での活動報告—	76
発表資料	82
Ⅲ 学生企画事業	
学生企画事業	89
活動報告	90

第3章 総括

セケ浜町の取り組みを通して	石原直		131
野々島の取り組みを通して	金政信		132
	菊地淳		133
学生企画の取り組みを通して	萩野寛雄		134
次年度以降について	星山幸男		135
協力団体・協力者一覧（敬称略、順不同）			136

資料

平成26年度 子ども支援プロジェクト予算（案）	139
平成26年度 子ども支援プロジェクト決算	140
東北福祉大学子ども支援プロジェクト基金規程	141

七ヶ浜での活動



みんなよろしくね



うまく飛ぶかな



飛んだ飛んだペットボトルロケット



空気砲大実験



ペットボトルで作る空気砲



みんなでフィルムロケット



こうするんだよ



あっ 見えたぞ



歌と合奏高らかに



シシャモを生き生きと



色で遊ぼう



ポディーペイント



うまく描けたかな



化石を掘だそう



貞山堀の歴史を学ぶ



親子で遊ぶ



浮沈子 (うまく沈むかな)



事前調査 (今も掘り起こして調べている)



七ヶ浜の化石の発表



ジュエルキャンドルを作ろう



変身ウィンド (鏡って不思議だ)



スノードーム制作 (きらきらきれいだね)



手のぬくもりで回そう！

野々島プロジェクト



マリゲートに集合



お話ししながらサポート中



定期船に乗船中



野々島に上陸



ようこそ野々島へ！ 金先生のご挨拶



おお～！ 古道探検中



ここにも！ あそこにも！



野々島クイズ「ボラだよ」



今、この辺りだね 探検中



野々島クイズ「白菜の苗だ」



探検隊 ベースキャンプに無事帰還



みんな楽しそうだね



手巻き寿司に熱中



仙台味噌の芋煮だよ



景色の良いところで「いただきます！」



ボクらはテントで「いただきます！」



仙台味噌の芋煮旨いよ！



きれいな風景ですね



素敵なフォトフレーム作ろう！



ドッジボールだ



これからやること よく聞いてね



妖怪たいそう第1！



港へ向かいます さようなら

学生企画事業



ラダートレーニング（動き作り）



ゲーム式でのじゃんけん もも上げ



うつぶせの状態から、学生の合図でダッシュ



「チャリーン！」の声に「いいね！」の掛け声で応答！



参加者それぞれが夢中になってことばを探してます



切り取ったものを思い思いに貼り付けると、どうなるかな



フォニックスの指導風景



アルファベットを確認します



認知機能向上が期待できるスクエーステップ



運動会といえば玉入れ！



室内運動会でも障害物競走は欠かせません



楽しかった運動会も終わって、アンケートに協力中



みんなで輪になって、ワークショップの説明。わくわく♪



どんな作品になったのか、協力して書き上げてくれました



完成した作品を前に、興味津々

第1章

プロジェクト概要

I 子ども支援プロジェクト実施計画概要

1. 趣旨

ガールズバンドである「プリンセス プリンセス」のプリプリ被災地復興支援寄付金(学内に基金を設置)を基に、東北福祉大学では、「子ども支援プロジェクト」を立ち上げ、東北の豊かな自然を利用し、地域を理解し活かせる人材を育てると共に、被災した地域の子どもたちや配慮を必要とする子どもたちの支援を行います。

具体的に初年度(平成 26 年度)は、教職や保育を学ぶ学生、子どもの支援活動に関心のある学生が、七ヶ浜(宮城県七ヶ浜町)、野々島(宮城県塩竈市)の各フィールドで教員の指導の下に実施することいたしました。1) 地域の教育委員会、NPO 団体等と連携・協力して、サマースクール、ものづくり教室や表現活動などの体感型学習を実施します。2) 自然を活かした活動や創作活動、動植物の観察や活用方法、カヌーを利用したアクティビティな体験型学習を子ども達に提供します。3) 学生企画による子ども支援活動を実施します。これらのプログラムは次年度以降、子ども支援の場所・規模を拡大して実施します。

なお、実施計画の詳細については、震災復興基金の活用による「子どもたちへの支援」と「社会的に有用な人材の育成」についての提案書を参照してください。

2. 委員会設立の経緯と 3 つのプロジェクトの実施

東北福祉大学では、プリプリ被災地復興支援寄付金を円滑に活用する為に、まずは「子ども支援プロジェクト」を学内に立ち上げました。本プロジェクトは、少数の教員と外部の実務経験者の協力者を得て、全体構想についての思案を重ね、全体構想図(Ⅱ-1)を作成しました。そして全体構想図をたたき台に、本プロジェクトで行う事業についての提案書(震災復興基金の活用による「子ども支援」と「社会的に有用な人材の育成」)(Ⅱ-2)を幾度の試行錯誤のうえ作成し、寄付者ならびに大学学内への周知と同意を得ました。その後、提案書に基づき、子ども支援事業を円滑に行うための委員会組織を、新たに設けるに至りました。本委員会名称を「子ども支援プ

ロジェクト推進委員会」とし、委員会規定(平成 26 年 5 月 1 日から施工)(Ⅲ-2)を定めたうえで、学内から委員 8 名、学外から委員 2 名、計 10 名による委員会組織(Ⅲ-1)を設立いたしました。

本委員会での審議、指導、運営管理のもとに、平成 26 年度は以下に述べる「七ヶ浜での活動」「野々島プロジェクト」「学生企画事業」の 3 つのプロジェクトを実施する事になりました(26 年度のそれぞれの実施概要「目的、実施計画、事業一覧、活動報告」については、第 2 章プロジェクト実施内容を参照ください)。

3. 七ヶ浜での活動(宮城県七ヶ浜町内の児童を対象とした、「サマースクール」、「オータムフェスティバル」の実施)

津波で被災した宮城県七ヶ浜町内の児童を対象に、教育委員会、町内各小学校の協力を得て、町内の複数の小学校を会場に夏休み期間中にサマースクール(学習支援、ものづくり教室、絵画や音楽などの表現活動、体験型科学実験)を学生主導で複数回開催します。また、町内のイベント会場において、地域の方を対象にオータムフェスティバル(七ヶ浜芸術祭)を開催します。これらの事業では、地域の歴史や文化をテーマとして取り上げ、「学びのきっかけ」をつくり、感性や情操も含めた学習の場を提供します。この事業に参加する子ども教育学科のゼミの学生は、卒業後の学校現場や社会生活の場面で、課題解決のために自ら考え、学び、行動する力を身に付け、人間として大きく成長することが期待されます。

平成 26 年度は、学生と一緒に七ヶ浜町内の資料館や史跡などを訪問し、地域が持っている様々な資源を調査し、この事業で取り上げるテーマをピックアップします。また、それを基に 8 月上旬と中旬に複数の小学校で 3 日程度のサマースクールを実施いたします。また秋季には、対象者を拡大し、音楽、絵画、ものづくり、科学実験などに参加できるイベントとしてオータムフェスティバル(七ヶ浜芸術祭)を開催いたします。

経費については、サマースクール、オータムフェスティバルで使用する教育機材や、実験用の資材や教育用の資材などの消耗品の購入、旅費交通費、食費、施設利用料

などに使用します。

平成 27 ～ 28 年度においては、平成 26 年度の実績を基に改善を加えて、引き続き事業を実施する予定です。

4. 野々島プロジェクト（津波で被災した松島湾内にある浦戸諸島野々島を活動の拠点に、塩竈市内の児童や配慮を必要とする児童を対象とした、「島であそべんちゃー IN 野々島」の実施）

津波で被災した松島湾内にある浦戸諸島野々島を活動の拠点とし、津波で被災した地域の子どもたちや配慮を必要とする子どもたちを対象とした事業を実施します。子どもたちは、野々島の豊かな自然環境や専門知識を有する本学教職員と学生のサポートを受けて、自信や勇気を取り戻すことが期待されます。また、この事業に参加する学生にとっては、活動する為に起こりうる様々な課題解決を通して、自ら考え、学び、行動する力を身に付け、人間として大きく成長することが期待されます。

平成 26 年度は、日帰りで実施できる自然体験活動プログラムを立案して実施いたします。そのために、参加学生と一緒に、このプロジェクトに活用できる野々島の資源を調査すると同時に、自然体験活動の心得・不登校児童支援等に関するワークショップを行います。それらを踏まえて自然体験活動プログラムの立案、リハーサルの実施、プログラムの改善を行い、安全で支援効果の高い自然体験活動プログラムを実施いたします。

経費については、自然体験活動プログラムを実施する

際に必要となる備品類（テント、椅子、テーブルなどのキャンプ用品等）の購入、旅費交通費、食費、施設利用料、外部講師謝金などに使用します。

平成 27 ～ 28 年度においては、平成 26 年度の実績を基に改善を加えて、引き続き事業を実施する予定です。

5. 学生企画事業（子ども支援プロジェクトの主旨に沿った、公募型の学生企画事業の実施）

子ども支援プロジェクトの主旨に沿った、「子ども支援事業」を学生が企画書を作成して応募する公募型の学生企画事業の実施します。参加は、本学の学生で構成される団体であれば、ゼミ、サークル、運動部、文化部を問いません。

平成 26 年度は、ゼミ、サークル、運動部から 5 件を採択し、活動場所を七ヶ浜町内に限定して実施いたします。

経費については、旅費交通費、食費、消耗品、レンタル料などに使用します。

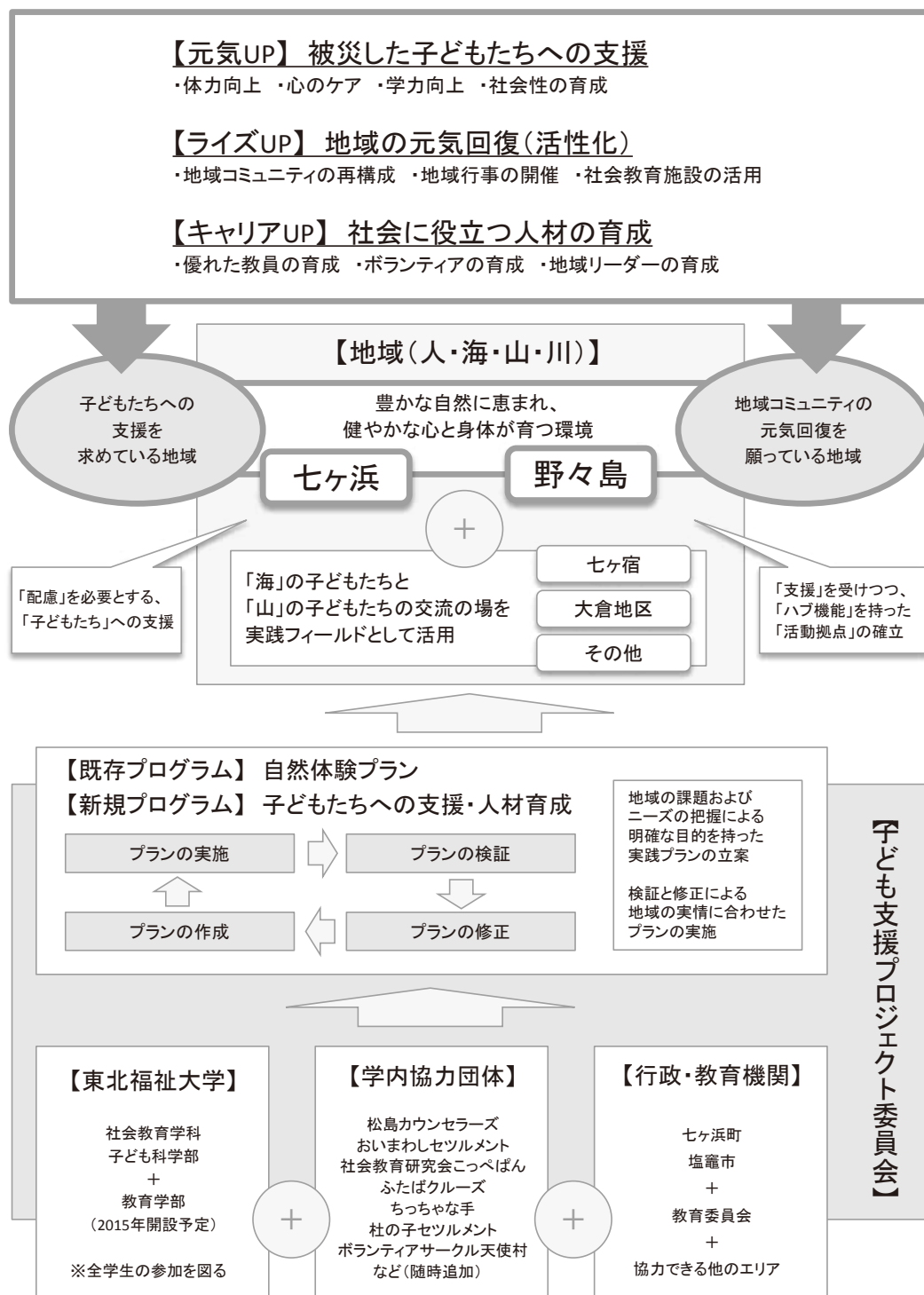
平成 27 ～ 28 年度においては、平成 26 年度の実績を基に改善を加えて新しく公募を行い、対象地域を拡大して引き続き実施する予定です。

文責：東北福祉大学子ども支援プロジェクト推進委員会

副委員長 金 政信

Ⅱ 全体構想

1. 全体構想図



2. 提案書

タイトル：震災復興基金の活用による「子ども支援」と「社会的に有用な人材の育成」

震災復興基金の活用による
「子どもたちへの支援」と「社会的に有用な人材の育成」
【提案書】

2014.04.30

メディア報道（資料）

プリンセスプリンセスから第二次支援のご報告

（東都新聞オンライン版 2014年1月22日（水）10時）

2014年新しい年がスタートしましたが、皆さんいかがお過ごしですか？さて、私たちプリンセスプリンセスは、東日本大震災復興・震災支援の第二次支援先として、以下の通り寄付させて頂くことを決定しましたのでご報告させていただきます。

【第二次支援の内容】

- 支援先 東北福祉大学
- 寄付金額 30,000,000円
- 目的 東北地方の豊かな自然環境を活用した自然環境教育プログラム創成

東北福祉大学では、東北の未来創りを担う子どもたちが、地域の資産である豊かな自然を体験し、学び、郷土を愛する心をもて元気に育って欲しいとの思いをもとめて、「自然環境教育の指導者育成」と「施設整備」のプログラムを考案から始めるとしています。私達は、そのプログラムの充実に活用していただきたいという上記の通り寄付させて頂くことに致しました。

東北の豊かな森や山や川や海が、子どもたちの豊かな心を育てますように、

フナと野鳥には改めて私たちの活動に賛同していただきましたこと、深く御礼申し上げます。

私たちの思いも支えてくださる皆様によって、新しい年が、希望と夢の年になりますよう、プリンセスプリンセスメンバー一同、心から、お祈り申し上げます。

なお、第三次支援先につきましては決まり次第、また改めてご報告させていただきます。

2014年1月22日 プリンセス プリンセス

プリプリ被災地復興支援、

「第二次」は東北福祉大に3000万円を寄付

（デイリースポーツ 2014年1月22日（水）10時30分配信）

2012年に東日本大震災復興支援を目的に16年ぶりに1年間で再結成した、女性バンド「プリンセス プリンセス」が22日、公式サイトで東北福祉大学（仙台市）に3000万円を寄付することを発表している。

「第二次支援先決定のご報告」と題し、同大学が、東北の未来を担う子どもたちが豊かな自然を体験し、学び、郷土を愛する心を持つようという思い、今春から「自然環境教育の指導者育成」と「施設整備」のプログラムをスタートさせると紹介。「私達は、そのプログラムの充実に活用していただきたい」と思いを寄付させて頂くことに致しました」と説明している。

同グループは12年に再結成し、同年に行ったコンサートや、グッズ、CDの収益金を復興支援のために寄付することを表明。集まった寄付金は昨年8月時点で9億6000万円に達しているが、これまでに「第一次寄付先」として、仙台、宮城、福島などの3県などに計1億7000万円を寄付していた。



「プリンセス プリンセス」の
東都新聞（左）と東都新聞

3

企画立案の背景

東日本大震災から3年。
「被災地復興支援」は新たな局面を迎え、様々な対応が求められています。

その中であって、「子どもたちへの支援」は、
より具体的かつ迅速な実践が必要とされています。

本学では、学生を中心とした活動を通し、
被災地のニーズに応えられる動きが可能です。



被災した子どもたちに対する「支援活動」を基本として、
地域の課題に即した人材育成プラン
を組み立て、実行します。

1

実践にあたって

対象となる「地域」が持つ「課題」への対応策を講じる際、事前に「テーマ」を設定し、学生とともに「実践プログラム」を組み立てます。
その際、関係する教員ほかスタッフは、地域ごとの「目標」とアドバイスを明示します。

様々な地域での「実践プログラム」を企画・実践することによって、参加する学生に「知識」「技能」「対応力」など、多様な「コミュニケーションスキル」を習得してもらいます。

参加する学生の募集は、ゼミやサークルを通じて行い、全学的な動きとして展開できる方向で進めています。

参加する学生のスキルアップに伴い、連携する各団体に「東北福祉大学の有用性」が認知・理解されることによって、本学全体の「さらなる対外評価向上」が期待できます。

また、各団体との連携活動によって、派生的に様々な「つながり」の発生が見込まれます。

そこから、学生（個人および所属するグループ）・サークル・ゼミなどで、各々が必要とする「多面的なメリット」の取得も期待できます。

学生は、地域が持つ課題解決を含んだ「実践プログラム」を立案・実施することで、自らとは異なる年代（＝子どもたちや、その周辺の大人たち）との交流を体験する機会に迫られます。

さらに、事前の立案段階と運営の間には「ギャップ」が生じる場合があります。
それらを学生自身が体感することで、より深い学習展開が可能となります。

「実践プログラム」の運営にあたっては、「ノウハウ」と「情報」が必要となります。
その部分を担担するのが「既存のサークル」が持つ「経験」です。

継続的な活動を展開するためにも、「既存サークル」の参加が不可欠となります。

参加する学生の募集も含め、全学的な展開としての実践は、本学が持つポテンシャルを十分に活かし、さらに発展させることにつながります。

結果、本学にしか成し得ない「社会的に有用な人材の育成」が可能となります。

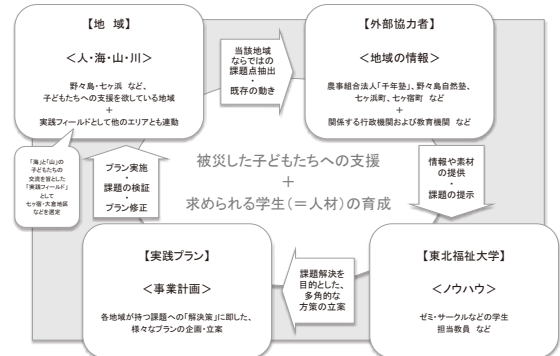
4

企画概要

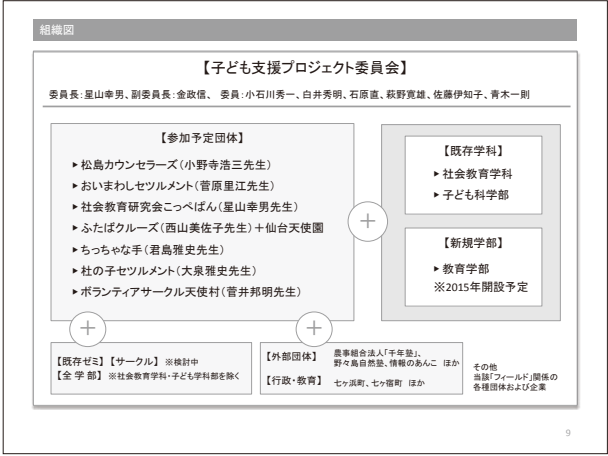
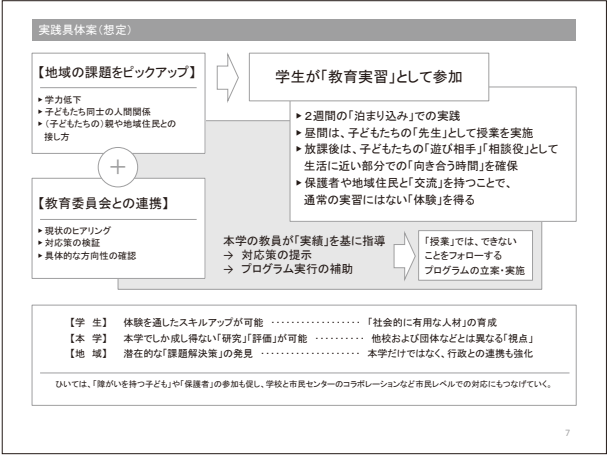
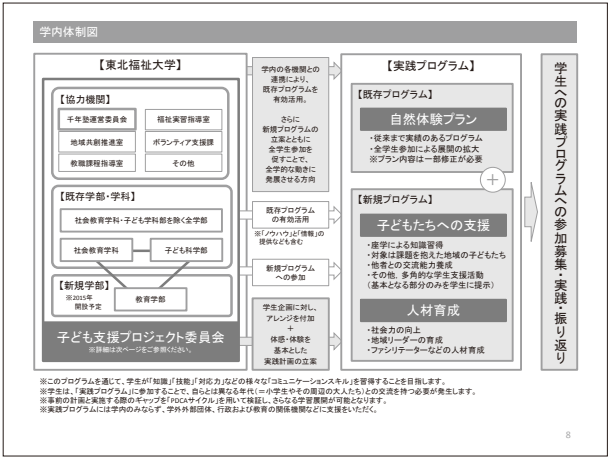
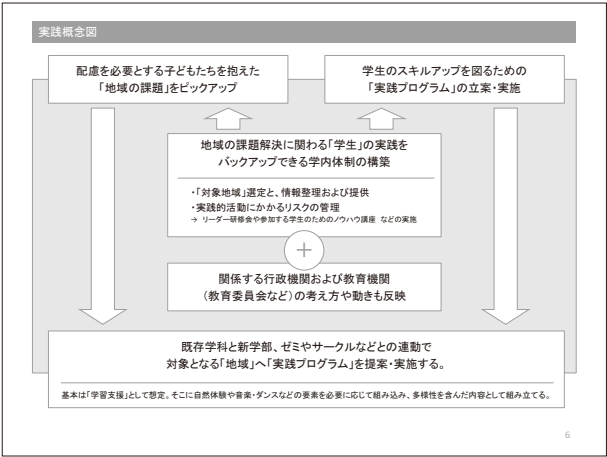
- 【目的】
 - ▶ 学生の資質向上
 - ▶ 課題を抱えた地域に対する支援
- 【方向性】
 - ▶ 本学にしか成し得ない「復興支援」企画の立案・実施
 - ▶ プリンセスプリンセスの被災地復興「第二次支援」の有効活用 ※次ページをご参照ください。
- 【対象地域】
 - ▶ 配慮（×支援）を必要としている子どもたちがいる地域を選定
→ 1: セキ浜 2: 野々島（浦戸諸島）
 - ▶ さらに、「海の子どもたち」と「山の子どもたち」の交流を旨とし、「人・海・山・川」をキーワードに「実践フィールド」を選定
→ 1: セキ浜 2: 太倉地区 など
- 【手法】
 - ▶ 課題を抱えている「地域」で、以下の2点を「体感的」に学習
→ 1: 子どもたちへの接し方 2: 地域住民との関わり方
 - ▶ 実質的な「コミュニケーションスキル向上」につながる活動
→ 総合経験値を上げ、「社会的に有用な人材」を育成

2

企画概念図



5



Ⅲ 子ども支援プロジェクト推進委員会

1. 名簿（敬称略、順不同）

◎星 山 幸 男	委嘱
小石川 秀 一	委嘱
○金 政 信	委嘱
白 井 秀 明	委嘱
石 原 直	委嘱
佐 藤 伊知子	委嘱
萩 野 寛 雄	委嘱
青 木 一 則	委嘱

◎：委員長、○：副委員長

外部委員：

赤 間 長 一	七ヶ浜町 教育委員会	教育総務課長	委嘱
菊 地 淳	情報のあんこ	代表	委嘱

2. 子ども支援プロジェクト推進委員会規定

（設置及び目的）

第 1 条 東北福祉大学（以下「本学」という。）では、被災した子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」を本学学生に提供するにあたり、その実行性・効率性を高めるため、本学に子ども支援プロジェクト推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（理念）

第 2 条 委員会は「学生自身が地域の目線軸子どもの目線で考えることの重要性を理解し、さらに連携する地域がその実践方法を学ぶ場であること」を前提に運営されなければならない。

（体制）

第 3 条 本学内の様々な部署や教職員との連携・協力のもとより、目的達成のために必要とみられる、当該市町村や教育機関、企業、NPO 団体等との連携・協力体制を築く。

（構成員）

第 4 条 委員会は、次に掲げる教職員ならびに学外の委員をもって構成する。

- （1）学長が委嘱する本学及び関連法人の教職員
- （2）学長が委嘱する当該市町村や教育機関、企業、NPO 団体等

2 その他必要あるときは、別に関係者を出席させることができる。

（任期）

第 5 条 前条第 1 項第 1 号に掲げる委員の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

（委員長及び副委員長）

第 6 条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員長及び副委員長は、委員の互選により選出する。

- 2 委員長は、委員会を統括し、委員会の議長となる。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故等があるときは、その職務を代行する。

（委嘱）

第 7 条 第 6 条第 1 項により選出された委員長及び副委員長は、学長が委嘱する。

2 第 4 条第 1 項第 2 号に掲げる委員は、学長が委嘱する。

（所掌事項）

第 8 条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- （1）被災した子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」に関する事項
- （2）被災した子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」に関する事業計画、予算等に関する事項
- （3）被災した子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」に対しての学外からの寄付等による教育活動支援金の運用に関する事項
- （4）その他、子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」に関し、必要と認められる事項

（開催等）

第 9 条 委員会は、委員長が必要に応じ招集する。

2 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

（事務）

第 10 条 委員会の事務は、社会貢献・地域連携センター内に置く。

（補則）

第 11 条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附則

この規程は、平成 26 年 5 月 1 日から施行する。

3. 子ども支援プロジェクト推進委員会開催記録

第1回推進委員会

2014年4月30日（水） 14:20～15:40 開催

●報告事項

設立の趣旨及び経緯について

委員会の構成、提案書、全体構成図について配布資料を基に説明

●協議事項

1. 委員の追加について

七ヶ浜町教育委員会と情報のあんこから1名ずつ外部委員として委嘱したい。

2. 活動計画と予算について

七ヶ浜町については、小石川・石原・白井・青木の各委員を中心に、子ども科学部および七ヶ浜教育委員会と連携しながら作成する。塩釜市野々島については、金・菊池の各委員を中心に塩釜市教育委員会及び野々島自然塾と連携しながら作成する。

3. その他

学生が主体となって活動するために公募によるコンペを行い良い企画を出した団体に活動の支援をしてはどうかという意見が出され、萩野・佐藤両委員を中心に検討することとした。

第2回推進委員会

6月4日（水） 16:00～18:30 開催

●報告事項

前回の会議の振り返り

●協議事項

1. 七ヶ浜の実施計画案と予算概算案

8月にサマースクール、11月にイベントを開催

2. 野々島の実施計画案と予算概算案

9月に子どもが参加するイベントを開催

3. コンペ実施案

9月末までに審査を完了、1団体30万円を上限に助成する。

4. 委員の追加

外部委員2名の移植を決定

5. その他

次回開催日を決定

第 3 回委員会

7 月 16 日（水） 14：20 ～ 16：00 開催

●報告事項

前回議事録確認

●協議事項

1. 寄付者側への経過報告について
2. 出張旅費の内規について
大学の基準を準用して行う。
3. 今年度の取組状況について
①七ヶ浜、②野々島、③学生コンペ
4. 助成金支出方法について
仮払いで対応することを検討する。

第 4 回委員会

2015 年 1 月 28 日（水） 16：00 ～ 17：30 開催

●報告事項

前回議事録確認

●協議事項

1. 今年度のまとめ及び報告書作成について
七ヶ浜の報告・野々島の報告・学生企画事業の報告
全体としてサマースクールへの参加支援学生が足り
なかった・地元との連携をもっと深めたい・準備の
時間が十分ではなかったなどの反省点が出されたが、
地元からよい評価を得た・参加した学生の主体的な
取り組みが良かったなどの評価も示され、来年度い
ずれの事業も継続したいという報告がなされた。
2. 今後のスケジュールについて
3 月末までに報告書をまとめる。
事業ごとに分担執筆し、3 月の委員会で確認のうえ、
印刷に回す。
3. 来年度の予定について
基本的に今年度の事業を継続し、対象地の拡大や学
生企画への参加団体を増やすなど、活動の拡大を図っ
ていく。
4. その他
次回開催日を決定

第5回委員会

3月17日（火） 13：30～15：00 開催

●報告事項

前回議事録確認

●協議事項

1. 平成26年度報告書について
章構成、台割などを確認、一部修正。
掲載写真の選定基準について検討。プライバシーの保護に十分注意することを申し合わせたうえで、事業ごとに枚数を割り振る。
2. 平成27年度事業計画について
早めに動きだせるように、各事業ごとの計画案を3月末までに金副委員長に提出し、4月に開催予定の次回委員会で検討・決定する。
3. その他
次回の委員会は4月下旬に開催

第2章

プロジェクト実施内容

全体スケジュール

6月21日	七ヶ浜の地域調査・事前学習①（七ヶ浜町）
6月28日	自然体験活動に向けた現地調査（野々島）
7月3日	サマースクール事前打合わせ（1）（七ヶ浜町小学校）
7月4日	自然体験活動を行う際の心得（事前授業／大学）
7月11日、18日	配慮の必要な子ども達を支援するために①②（事前授業、ロールプレーを含む／大学）
7月22日	学生企画のための事前説明会（大学）
8月4日	サマースクール事前打合わせ（2）（七ヶ浜町小学校）
8月6日	学生企画のための実地見学ツアー（七ヶ浜町）
8月6日	カヌー体験セミナー／講義と体験（塩竈市／くろしお・北浜マリンベース）
8月7日	自然体験活動に向けた事前準備（野々島）
8月6日～8日	汐見小学校（七ヶ浜町）：サマースクール、ものづくり教室や表現活動などの体感型学習
8月18日～20日	松が丘小学校、汐見小学校、楽小学校（七ヶ浜町）：サマースクール、ものづくり教室や表現活動などの体感型学習
8月29日	自然体験活動リハーサルに向けた全体打ち合わせ（大学）
9月7日	自然体験活動実施を想定したリハーサル（野々島）
9月19日	学生企画のプレゼン（大学）5 団体採用決定
9月27日	自然体験活動実施に向けた事前準備（野々島）
9月28日	自然体験活動実施「島であそべんちゃー IN 野々島」（野々島）
10月1日	学生企画活動開始（七ヶ浜町）
10月4日	七ヶ浜の地域調査・事前学習②（七ヶ浜町）
10月25日、26日	自然体験活動「島であそべんちゃー IN 野々島」の成果報告・展示（大学祭）
11月8日	オータムフェスティバル「七ヶ浜芸術祭」（七ヶ浜町・国際村）：音楽参加型発表会、地域調査プレゼンなど
11月～1月	学生企画採用 5 団体が、それぞれ七ヶ浜町内の小中学生を対象に学生企画事業を実施（七ヶ浜町）
12月24日	七ヶ浜関係行事打ち合わせ（七ヶ浜町教育委員会）
1月7日	次年度サマースクール打合わせ（七ヶ浜町小学校）
2月18日	野々島プロジェクト活動報告会（大学）

Ⅰ．七ヶ浜での活動

七ヶ浜町での活動

目 的

東北福祉大学の特性を生かしたサマースクール（学習会やものの作り教室など）やイベント（表現活動）などの取り組みを、教職員と学生が一体となって行うことを通して、地域の子どもたちに元気とやる気を取り戻す場を提供する。

また、支援を必要とする子どもたちを対象とした体験型学習を学生主体で展開することによって、その経験を卒業後の学校現場や社会生活の場面で生かすことができる力量を身に付けた学生を育てることを目指す。

併せて、課題として取り上げたテーマを地域の歴史や文化に対する「学びのきっかけ」として、子どもたちも学生も生かせる総合的な学習につなげていく。



実施計画

期間	項目			
6月上旬	事前準備＜1＞	サマースクール	夏休み学習支援と、ものづくり教室のテーマとなるアイテムの設計。 必要となる素材やスタッフなどのピックアップ。 実施計画と最終形態（着地点）の設計。	2回開催を想定。
		リエゾンゼミ	地域の歴史など、テーマとなる項目の抽出および事前調査。 必要となる資料やデータなどの収集。 研究にかかる仮設と最終形態（着地点）の設計。 「化石」「貝塚」「地名・植生」「貞山掘」「こども」の5グループを想定。	5グループは学生に提示する「課題」。 この課題から「学びのきっかけ」をつかめる展開を考察。
		渡会ゼミ	演奏会の演目および実演形態の計画立案。 ワークショップ運営にかかるアイテムやスタッフのピックアップ。 演奏会およびワークショップの運営計画と最終形態（着地点）の設計。	使用備品（楽器）は、以降の継続展開を考慮し、購入の是非を再考。
6月下旬	事前準備＜2＞	学内にて実施（座学を想定）	支援を必要とする子どもたちへの対応や、「実践の環境づくり」にかかる基礎知識を習得。 「5つの課題」ごとに、事前講習会を開催。 七ヶ浜での実践に際し、必要な情報や運営および展開の仕方を座学として学習。	現地に精通した地域の方の協力もいただく。
6月21日（土）	現地学習＜1＞	外部講師同行	七ヶ浜にて、サマースクール関係の運営展開にかかる事前調査。	
8月6日（水）～ 8日（金）	サマースクール＜1＞	白井・石原・小石川ゼミ関係	夏休み学習支援と各種イベントの開催 ※1日目（午前・午後）：学習支援、2日目（午前）学習支援＋（午後）ものづくり教室等、3日目（午前・午後）学習支援などのプログラムを実践。	七ヶ浜町内の3つの小学校を会場として開催。
8月18日（月）～ 20日（水）	サマースクール＜2＞			
10月4日（土）	現地学習＜2＞	外部講師同行	七ヶ浜にて、イベント関係の運営展開にかかる事前調査。	
11月8日（土）	イベント	リエゾンゼミ	11：00～11：30 音楽参加型発表会（渡会ゼミ） 11：30～12：30 リエゾンゼミの成果発表 ※「化石」「貝塚」「地名・植生」「貞山掘」「こども」の5グループ。 これらの「課題」に沿って歴史やくらし、物流、今後の（町や人の）発展をプレゼンテーション。	七ヶ浜国際村を、会場として開催。
		ものづくり教室 絵画教室	物理や化学など、理科学的な原理を応用したものづくり教室をブース形式で展開。（小石川ゼミ・白井ゼミ・石原ゼミ） 併せて、絵画教室も開催。（青木ゼミ）	

<補足説明>

- ・上記計画の実施タイミングに合わせて、各メディアへのニュースリリースを発信します。
- ・初年度の動きとして、「広報（＝ニュースの創出）」の意味合いを持たせた展開を想定します。
- ・当該事業に対する大学内および対外的な「認知・理解」を進めるための実践とします。
- ※その他、詳細についてはご協議の上にての決定とさせていただきます。

サマースクール報告

はじめに

東北福祉大学（以下本学）は、東日本大震災直後から石巻市や南三陸町など、多くの被災地で様々な支援活動を行ってきました。被災地以外では年月が経過して行くに従って震災の記憶が少しずつ薄れていく中、本学が子どもたちに対してまだまだできることがあると考え、平成26年4月に、被災地である宮城県宮城郡七ヶ浜町教育委員会と教育に関わる連携協定を締結し、子どもたちの教育を中心としたさまざまな場面で連携した取り組みを進めてきました。

取り組みの一環として、8月6日から8日と8月18日から20日の6日間、夏休み中の学習支援を中心とした取り組みである「サマースクール」を七ヶ浜町立汐見小学校、亦楽小学校、松ヶ浜小学校の3校で企画・実施しました。

午前中は、各小学校の学習プログラムに応じた個別指導を行い、午後は子どもたちが楽しめるような実験や物作りを行いました。



汐見小学校での取り組み

汐見小学校では、8月6日、7日、8日と18日、19日、20日の6日間にわたり実施しました。午前中は子どもたちが持参した夏休みの課題の指導を中心に、低学年、中学年、高学年、特別支援学級に分かれて、参加した429名の子どもたちを98名の学生が一人一人の子どもたちに応じた細やかな指導を行いました。

午後は、物作りや実験など、学生たちが工夫を凝らし



た取り組みを行いました。8月6日は、スノードーム作り。7日は、手品。8日は、ダイラタンシーと水鉄砲。ダイラタンシーは、うどん粉の上に乗っても沈まないという実験で、ぜひ子どもたちにやって見せたいと考えたものでした。18日は、ペットボトルロケットとフィルムロケット作り。19日は、空気砲作り。20日は、入れたお金が見えなくなる貯金箱作りを行いました。568名の子どもたちが参加し、98名の学生が対応しました。

亦楽小学校での取り組み

亦楽小学校では、8月18日、19日、20日の3日間にわたり午前中実施しました。3日間で408名の子どもたちが参加し、1年生から6年生までの学年ごとに分かれ、予め学校が用意した学習プリントに取り組み、それを54名の学生が、子どもたち一人一人の進み具合



やスピードに合わせて細やかな指導を行いました。

松ヶ浜小学校での取り組み

松ヶ浜小学校では、8月18日、19日、20日の3日間にわたり実施しました。午前中は子どもたちが持参した夏休みの課題の指導を中心に、54名の学生が、参加した131名の子どもたち一人一人に応じた細やかな指導を行いました。

午後は、物作りや実験など、学生たちが工夫を凝らした取り組みを行いました。8月18日は、空気砲作り。19日は、ペットボトルロケットとフィルムロケット作り。20日は、液体窒素を使った実験を行いました。122名の子どもたちが参加し、49名の学生が対応しました。

学生の思いと取り組み

学生たちは、子どもたちに喜んでもらいたいという思いで事前の計画から一生懸命に考え、取り組んできました。学生たちは内容ごとにグループを作り、どんなことをしたら子どもたちが喜ぶか、楽しめるかを考えながら何度も話し合いを重ね、アイデアを出し合いました。

物作りに決めたグループは、必要な材料を集め、何度も実際に作成をしました。一番気をつかったのは、小学生の子どもたちがけがなどせずうまく作れるためにはどのような準備をすればよいかということでした。

1年生の子どもたちができることと6年生ができることには差があります。また、同じ説明では分からないことも出てきます。作る手順はどうしたらわかりやすいか、材料はどれだけ用意したらよいのかなど、何度も何度もシミュレーションを重ねていきました。

また、材料の準備も大変でした。決められた時間内に作るためには、ある程度まで作っておくことが必要な物もあり、授業の合間に準備する姿もよく見られました。必要な材料を集めるために、竹を探して遠くから運んできたグループもありました。

実験を扱ったグループは、何度も何度も事前実験を繰り返しました。空気砲のグループは、子どもたちが驚く

くらいの大きな物を見せたいと、組み合わせた段ボールの強度を保つために何度も作り直しをしました。多くの時間と苦労を重ねてきた学生たちでしたが、子どもたちの驚く姿や作品ができたときの満足そうな笑顔を見たときに、きっと今まで大変さも吹き飛び、満足感や充実感に包まれたものと思います。



学生による活動報告から

【汐見小学校】

私たちのグループが七ヶ浜サマースクールで行った内容、そして「子どもたちの様子」と「反省点」をまとめました。

●行った内容

私たちの班は、マジックの披露と算数を使ったマジックの作成を行いました。

設定の理由は、算数を使った簡単なマジックを作成することを通して、子どもたちの算数への興味を少しでも持ってもらいたい、また、その作成の中で私たち学生と子どもたちとの交流を図りたいと考えたからです。

作成したマジックは、「魔法の電卓」。

「相手に想像してもらった数字を電卓の絵カードを使ってあてる」というものです。



サマースクールに参加する子どもたちの年齢が他学年にわたるということもあり、作成は、「①あらかじめ印刷した用紙をのりで画用紙に貼り付け、②はさみで切り抜き、③練習する」という内容で行いました。

また、学生を各班に配置して安全面にも配慮するようにしました。

●子どもたちの様子

- ・学生の指示に素直に応じ、行動していました。
- ・友達や学生と笑顔で話しながら取り組む様子が見られました。
- ・自分たちで道具を貸し合ったり、順番を待ったりする様子が見られました。
- ・はじめはぎこちなかったものの、友達や学生と一緒に取り組む中でスムーズにできるようになっていく様子が見られました。
- ・友達や学生に披露し嬉しそうに「やった！」という子、得意気な表情の子たちが見られました。
- ・「どうなっているの？」と数の仕組みに興味をもち、学生に尋ねる子どもたちが多く見られました。

●反省点と改善策

- ・はさみで手を挟んでしまった子がいました。
→学生の意識が行き届いていませんでした。はさみは、怪我につながる恐れのあるということ、そのためはさみを持っている子には特に注意を向けることをしっかりと共有した上で活動に取り組むべきでした。
- ・作業の進度に差があり、時間を持て余す子どもたちがいました。
→子どもたちの活動の想定が甘かった。進度に差が出るであろうことは、活動前に予想することができたはずでした。早く終わった子のための活動を用意するなど、進度に応じた活動が必要でした。

【七ヶ浜町立亦楽小学校】

8月18日（月）から20日（水）までの3日間、七ヶ浜町立亦楽小学校で1年生から6年生までの児童を対象とした学習支援を行いました。1日目と2日目は18人、



3日目は16人の学生が参加させていただきました。児童の参加人数は学年によってばらつきがありましたが、どの学年も20人前後の児童が参加し、一学年につき学生2～3人という体制で実施しました。

学習内容は、国語と算数の2教科でした。2教科とも時間が30分と決められていて、学年ごと、先生方が用意してくださったプリントを使って演習を行いました。プリントは、1学期の復習プリントが大半でした。そのため、忘れている部分や苦手な部分が一人一人異なるため、一斉にプリントを解かせ、その児童に合わせてヒントを与えるという机間指導を中心に行いました。

3日間の学習支援の中で感じたことは、2つあります。1つ目は、限られた時間の中で指導する難しさです。今回のクラスにいた人数はおおよそ20人。実際の現場の学級の児童数は最大40人なので、その半分の児童数でした。しかし、一人にかかりっきりになっていると他の児童の指導まで及ばず、苦戦しました。児童に1から10まで解き方を教えてしまったら次に繋がらないうえに時間もかかるので、一つの対処法として「少ない時間で思考のきっかけになる声がけ」を心掛けました。又、問題を解くスピードに差があったため、教材研究をした上での時間の使い方のイメージの大切さも実感しました。

2つ目は、子どもとのコミュニケーションの大切さです。最初は児童も様子をうかがいながら質問も少ない様子でしたが、段々と積極的になり児童から声をかけられることも多くなりました。短い時間の中で、一人一人の苦手意識を察知しどうアプローチするかということを考えるためにも、児童の心をひらくような会話が、子ども



の実態を把握するヒントに繋がるのではないかと感じました。

夏季休業中の時間にも関わらず学校に登校し学習をともに頑張ってくれた児童達。学生に任せることに対する不安が大きかったであろうに、手を出すことなく見守りながら、相談にものってくださった亦楽小学校の先生方。その他にも色んな人の支えがあって、たくさんの経験をすることができました。これからは参加した学生全員が、この学びと経験を生かして頑張っていきたいと思います。参加させていただき、ありがとうございました。

今回は 16 人の学生が参加させていただきました。児童の参加人数は学年によってばらつきがありましたが、どの学年も 20 人前後の児童が参加し、一学年につき学生 2～3 人という体制で実施しました。

学習内容は、国語と算数の 2 教科でした。2 教科とも時間が 30 分と決められていて、学年ごと、先生方が用意してくださったプリントを使って演習を行いました。プリントは、1 学期の復習プリントが大半でした。そのため、忘れている部分や苦手な部分が一人一人異なるため、一斉にプリントを解かせ、その児童に合わせてヒントを与えるという机間指導を中心に行いました。

3 日間の学習支援の中で感じたことは、2 つあります。

1 つ目は、限られた時間の中で指導する難しさです。今回のクラスにいた人数はおよそ 20 人。実際の現場の学級の児童数は最大 40 人なので、その半分の児童数でした。しかし、一人にかかりっきりになっていると他の児童の指導まで及ばず、苦戦しました。児童に 1 から 10 まで解き方を教えてしまったら次に繋がらないうえに、

時間もかかるので、一つの対処法として「少ない時間で思考のきっかけになる声がけ」を心掛けました。又、問題を解くスピードに差があったため、教材研究をした上での時間の使い方のイメージの大切さも実感しました。

2 つ目は、子どもとのコミュニケーションの大切さです。最初は児童も様子をうかがいながら質問も少ない様子でしたが、段々と積極的になり児童から声をかけられることも多くなりました。短い時間の中で、一人一人の苦手意識を察知しどうアプローチするかということを考えるためにも、児童の心をひらくような会話が、子どもの実態を把握するヒントに繋がるのではないかと感じました。

夏季休業中の時間にも関わらず学校に登校し学習をともに頑張ってくれた児童達。学生に任せることに対する不安が大きかったであろうに、手を出すことなく見守りながら、相談にものってくださった亦楽小学校の先生方。その他にも色んな人の支えがあって、たくさんの経験をすることができました。これからは参加した学生全員が、この学びと経験を生かして頑張っていきたいと思います。参加させていただき、ありがとうございました。



【松ヶ浜小学校】

松が浜小学校で 8 月 18 日から 20 までの 3 日間、学習支援を行いました。基本的に 3 日間を通して、午前中は学習している児童を机間指導の形態をとり、支援した 1 日目は、2 年生。2 日目は、3、4 年生で最終日が 5、6 年生を担当しました。午後の活動は 3 日間、それぞれがう内容の「お楽しみ会」を担当の学生が企画しました。



1日目の「お楽しみ会」内容は、空気砲を用意しました。子ども一人一個ペットボトルで空気砲を作成し、的当てをしました。この日メイン活動として、段ボールで制作した大きな空気砲に煙玉を使用し、煙を溜めて発射することでどんな形で煙が出てくるのか、空気砲の体験を通して、楽しんでもらうことでした。

2日目は、ペットボトルロケットを用意しました。備品に不備が生じるなどの当日トラブルがあったものの、子どもたちがペットボトルロケットを飛ばして、楽しそうに駆けながら取りに行く姿が印象に残っています。その他もフィルムケースを利用した道具も準備しました。

3日目には1年生から3年生に液体窒素を用意し、4年生から6生にはドライアスを準備しました。それぞれの部屋に分かれ、担当学生がいくつかの実験を行いました。子どもたちが目を輝かせて実験の様子を見ている姿が印象的に残っています。自然の不思議に興味を持ったと言ってくれる児童もいました。

サマースクールを終えて

サマースクール実施後の教育委員会と各小学校からの聞き取りでは、全ての学校から、今回の取り組みは夏休み明けのスムーズな学習につながり、良い成果が上がっているという意見が寄せられました。また、子どもたちに対する学生の対応もとても良く、安心して任せられたという意見も頂きました。

【学生のアンケートから】

子どもたちがわくわくするような企画を考えることができ、とても充実した活動をする事ができました。しかし1年目ということもあり、子どもたちの反応を予想することができず、予定の時間を少々過ぎてしまったり、まだ習っていない範囲を教えてしまったりといったハプニングが生じてしまいました。次回は、小学校と連絡を取りつつ進めていきたいと思います。

子どもたちが一生懸命勉強する姿、楽しんでくれている姿を見て、運営して本当に良かったと思うと同時に、教師という仕事の魅力をたくさん感じる事ができました元気な児童の皆さんと接することができ、とても良い経験となりました。次回はもっと説明力を高めた上で、よりスムーズな活動を心がけたいと思います。

今回このような事業を一から創り上げることは、初めての体験だったので、一つ一つの物事が新鮮だったのと同時にとても大変で労力の必要なことであることが体験を通して実感できた。運営する側になることで、分かったことは今後の活動で活かすことができると、私だけでなく参加した学生全員が実感できた。

今回このような機会を与えていただき、本当にありがとうございました。今回の経験を今後の活動に活かしていきます。

本学にとっても、将来教職を目指す学生が実際に子どもたちに指導する機会であり、今後の学習課題を明確にする良い機会であったと感じました。何より、子どもたちの喜ぶ顔を目ざし、自分たちで企画し、実施した経験は、何にもまして得難い物であり、教職のすばらしさも感じられたのではないかと思います。今回の経験を活かし、さらによりものにしていきたいと考えます。

各小学校毎の実施内容と参加者の詳細は以下の通りです。

【汐見小学校】

	午前	参加児童数	午後	参加児童数	参加学生数
8 月 6 日	学習支援	76 名	スノードーム作り	107 名	17 名
7 日	学習支援	70 名	手品	76 名	18 名
8 日	学習支援	74 名	ダイラタンシー 水鉄砲	104 名	16 名
8 月 18 日	学習支援	66 名	ペットボトルロケット フィルムロケット	92 名	15 名
19 日	学習支援	67 名	空気砲	84 名	17 名
20 日	学習支援	76 名	貯金箱づくり	105 名	15 名
	合計	計 429 名		計 568 名	計 98 名

【亦楽小学校】

	午前	参加児童数	参加学生数
8 月 18 日	学習支援	136 名	18 名
19 日	学習支援	136 名	17 名
20 日	学習支援	136 名	19 名
	合計	計 408 名	計 54 名

【松ヶ浜小学校】

	午前	参加児童数	午後	参加児童数	参加学生数
8 月 18 日	学習支援	40 名	空気砲	44 名	17 名
19 日	学習支援	54 名	ペットボトルロケット フィルムロケット	42 名	15 名
20 日	学習支援	37 名	液体窒素	36 名	17 名
	合計	計 131 名		計 122 名	計 49 名

2014 七ヶ浜芸術祭

—音と絵と科学にふれよう—

日時：平成 16 年 11 月 8 日 (土) 11:00 ～ 15:00

会場：七ヶ浜国際村

主催：東北福祉大学

後援：七ヶ浜教育委員会

目的:被災地 t 或の子ども達支援、地域の住民の方長が元気になるための行事の実施。科学のおもしろさ、音楽の楽しさ、絵画の楽しさを体験して共に学び合う場として、共に成長する場となることを目的とする。

イベント開始 11:00

11:00 音楽参加型発表会 (30 分間渡会ゼミ)
合唱と合奏

11:30 ～ 12:30…セミナー室
七ヶ浜を知ろう
「化石グループ」(七ヶ浜町の音)
「貝塚グループ」(縄文のくらし等)
「地名・植生グループ」(地域の歴史を。どんな草花が)
「貞山堀グループ」(近代の七ヶ浜、物流を調べる)
「子どもグループ 1」(小学校の現状)
「子どもグループ 2」(保育園・児童館などの現状)

13:00 ～ 15:00 絵画教室…・手の工房 学生による絵画教室の実施
ものづくり。科学実験お楽しみ広場… 学生による科学ものづくり教室

白井ゼミ…	4 年「変身ウィンドウ (鏡を利用したおもちゃ)」	3 年「浮沈子」
	2 年「スノードーム (浮き沈みを利用して)」	「きらきらシャボン玉」(光の不思議)

石原ゼミ…	2 年「風車」「紙飛行機」「上昇気流を利用したおもちゃ」
-------	------------------------------

小石川ゼミ…	4 年「ジェルキャントル」(チーフ赤坂 10 名参加)
	3 年「顕微鏡の世界」「七ヶ浜の化石」(チーフ鹿内 5 名参加)
幼稚園ゼミ	「プラトンボ」(チーフ柳沢)「プラガエル」(チーフ成田萌) (15 名参加)
	2 年「LED を利用してクリスマス飾り」(チーフ田幡 10 名参加)

東北福祉大学学生の参加人数

石原ゼミ (12 名) 白井ゼミ (30 名) 小石川ゼミ (40 名) リエゾンゼミ 20 組 (22 名)

渡会ゼミ (30 名) 青木ゼミ (23 名) 合計 157 名 +3 名 ?

引率教員 5 名 + 講師 (若生氏) 6 名

七ヶ浜での発表（2014 七ヶ浜芸術祭に参加）

2014 年 11 月 8 日七ヶ浜国際村にて

七ヶ浜を知ろう（リエゾンゼミ 20 組）

「化石グループ」（七ヶ浜町の昔）

「貝塚グループ」（縄文のくらし等）

「地名・植生グループ」（地域の歴史。黒松と赤松の違いは）

「貞山堀グループ」（伊達政宗と貞山堀・・・物流）

「子どもグループ 1」（小学校の現状）

「子どもグループ 2」（保育園・児童館などの現状）



22 名を 6 グループに分ける・・・テーマ設定ごとに現地調査 2 回

1 回目・・・6 月 21 日（土）9 時から 5 時まで…全体でテーマを探る

2 回目・・・10 月 4 日（土）9 時から 5 時まで…テーマごと、グループごとに課題を持って実施調査

11 月 8 日（土）七ヶ浜芸術祭会場にて 11:45 ～ 12:30 各グループごとにプレゼン

化石グループ

化石について調べる機会などめったにないと思うので、今回は本当に貴重な体験ができたと思います。化石のでき方や掘り方を私自身も全く知らなかったので勉強になりました。せっかくこのような体験ができたので、今後教育者として生かせる場面があったらいいなと思います。

14KC152 前田風子

今回の七ヶ浜での活動を終えて私自身が知らなかった七ヶ浜のことを調べ、まとめ、発表することで知識が増えただけでなく、地域の人々、他の学校の人、その他たくさんの人と関わることでできた良い機会だった。また、今まで理科などは苦手教科だったがやっていくうちに興味がわいた。そして、改めて子ども達との関わり方をよく考えさせてもらった。次、似たような機会があったら率先していきたい。

14KC151 星川志侑

今回七ヶ浜で現地調査は自分にとって良い経験になりました。

特に小学生の前で調べたことを発表した時に小学生が発表に興味を示してくれたことにやりがいを感じるこ

ができました。

今回の学習はとても充実していたので、良い経験になりました。

14KC156 高崎聖也

最初、七ヶ浜の活動を聞いたときは、正直めんどくさいと思っていました。

しかし、活動が始まると現地で化石掘りを実際にしたりと充実した経験をすることができました。本番の時は、あまり子どもはいませんでした。来てくれた子が化石を見てうれしそうな様子は今でもはっきりと覚えています。

先輩方の物づくりもとても楽しかったです。たくさんの新たな経験ができ、このゼミでよかったと思いました。

14KC153 松原すずの

七ヶ浜という行ったことのなかったまちについて調べ、化石を掘ったりするというのはとても貴重な経験となりました。自分たちで調べたことや採集した化石を多くの人に聞いたり見たりしてもらい、充実した期間で、七ヶ浜について知ることができました。

14KC139 長谷川真由

貝塚グループ

私たちは七ヶ浜の貝塚について調査しました。

(内容)

- ① 縄文時代の人々の暮らし
- ② 貝塚の説明
- ③ 七ヶ浜の地質と貝殻の性質の説明
- ④ リトマス試験紙を用いた酸性・中性・アルカリ性の実験
- ⑤ クイズ
- ⑥ まとめ

(感想)

- ・三度のフィールドワークを通して、現地での調査で沢山の情報を得ることができた。協力頂いた資料館の学芸員の方たちに感謝の気持ちでいっぱいです！
- ・子どもに分かりやすい発表を目指して、実験などを取り入れた。準備していた私たち自身も、リトマス

試験紙や水溶液の性質について改めて学びを深めることができ、楽しかった。

- ・ゼミ生の先輩たちのおもちゃ作り体験のように、私たちの発表も子どもたちに体験型の要素を取り入れたらよかったかなと思う。
- ・発表を通して何を伝えたいのか、何を学び取つてほしいのかを明確にできたので、芯の通った発表ができたかなと思う。

(反省点)

- ・紙芝居の形式を取り入れたため、製作に時間がかかってしまった。
- ・発表練習をする時間があまり取れなかった。
- ・実験をもつと分かりやすくできればと思った。体験型を取り入れてみればよかったかなと思う。
- ・半年の期間をかけて頑張ってきた達成感とやりがいを感じた。

「七ヶ浜の子どもたち」グループ

11月8日土曜日、七ヶ浜の子どもたちについて調べたことの発表会でした。私たち1年生は初めてのことで、自分たちで進んで行動することが出来ず、会場に着いても戸惑っていました。そんな私たちを見た先輩方が、「1年生〇〇して」などと声を掛けてくれました。先輩方は指示がなくても自分たちで声を掛け合い準備していきます。私たちには、自分たちで率先して行動する力がまだついていないと感じました。誰かからの指示を待つのではなく、自分たちで声を掛け合い、協力して行動しなければいけないということを先輩方から学びました。

自分たちの会場の準備が終わり、グループごとに練習を始めました。私たちの班はスライドが上手く映る心配でしたが、スライドも無事に映りました。読み合わせの練習とスライドの切り替えの練習をしました。しかし、そこで感じたことは練習不足であるということでした。全員で集まる時間がなく、本番まで各自での練習でしたが、明らかに練習が足りていないという感じでした。それでも短時間でしたが何回か練習して、リハーサルよりも良い感じに仕上がりました。

いよいよ発表本番。発表本番は15分遅らせても小学校1年生の男の子とお母さんしかお客さんがいませんでした。しかし、私たちのゼミの全員が自分たちの発表を見に来てくれた男の子とお母さんのために今までで1番の発表をしようと意気込んでました。たった2人でも私たちの発表を見に来てくれたことが嬉しかった。先輩方も私たちの発表を聞きに来て下さりました。それぞれのグループが工夫を凝らした発表でした。どのグループもリハーサルの時より、分かりやすく、聞きやすくなっていました。私たちのグループの発表は1番最後で、他のグ

ループの発表が素晴らしかったのでとても緊張しました。しかし、先輩方がスライドを見て「すごい」「おー」とリアクションをしたり、説明を聞いて「なるほど。」「そうなんだ。」と相づちを打ってくれたので、発表しやすかったです。クイズも子ども向けに考えた簡単なものでしたが、ゼミのみんなが盛り上げてくれたり、先輩方が積極的に参加してくれたりしました。

リハーサルの時よりも、落ち着いて、お客さんともコミュニケーションが取れていたのでもいい発表になりました。

調べ学習から発表までを通した感想。

ゼミ全体としては、調べ学習の時はやらされているという気持ちがあり、自分たちから率先して行動出来ていませんでした。しかし、発表の準備はみんな真面目に取り組んでいて、一人ひとりが自分の仕事をしっかりとこなしていました。発表はどのグループも工夫がしてあり、楽しく学べるようになっていたと思います。私たちのグループとしては、練習時間を確保出来ればよかったと思いました。また、もう少し早く保育園や児童館の人をお願いしていれば、更に、内容が充実した発表にすることが出来たと思います。しかし、最終的に満足いく発表ができ、見に来てくれた人も楽しんでくれたので、良かったと思いました。

今回の発表は、小石川先生、自井先生、協力して下さった保育所や児童館の方々、七ヶ浜の方々や、先輩方のおかげで成功させることが出来ました。協力して下さった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。今回学んだことをこれからの学習に生かしていきたいと思います。

2014 年七ヶ浜芸術祭 合唱・合唱発表、絵画教室、科学ものづくり教室



スノードームづくり

<良かった点>

- ・飾りつけを自分で自由にできるので、小さい子どもから大人まで楽しむことができたこと。
- ・それぞれのスノードームに個性が出ていて、作り終わったあとに、笑顔でスノードームを持ち帰る姿を見ることができたところ。
- ・初めに実物（見利を見せて、「作つてみない？」と積極的に声がけをしたことで、スノードームに対する興味も増すし、自分が今から作るものをイメージしやすくなること。
- ・季節感があるので、子どもにとっては季節を感じることでできる良い教材になること。
- ・のりと水で簡単に作れるので、自宅でも作れるということ。
- ・入れるものを工夫したことで、ただ上下に落ちるだけでなく、舞ったり、その場にとどまったりと、さまざまな動きを手軽に実演できるということ。
- ・中に入れるものの色を統一させたり、ラメをたくさん入れてキラキラさせたりと、一人ひとりの個性がでていたこと。

<反省点>

- ・中の液体が漏れてしまうこと。ホットボンドを使って頑丈にとめたつもりでも、漏れてしまうことが何度かあったので、何か他に漏れない工夫が必要だということ。
- ・お客さんが多くなったときに慌ててしまい、冷静な

対応ができなくなってしまったこと。

- ・予想以上の人気があったために、一人ひとりへの対応が疎かになつてしまったこと。
- ・準備の段階での話し合いが浅かったため、お客さんからの予想していなかった質問や行動に適切に対応できたか不安だったこと。
- ・当日にホットボンドを持っていくのを忘れたこと。今回は隣のブースから借りることができたが、そうでない時のためにもつとしっかり準備物の確認をすべきだったということ。
- ・ホットボンドにかける時間が長かったため、待ち時間を長くさせてしまったこと。

<準備の過程で感じたこと>

- ・スノードームの中身ののりと水の割合を、中に入れる消しゴムによって変えることを工夫したことで、消しゴムを生かしたスノードームを作ることができたので良かった。
- ・雪をイメージさせるためにサンゴの化石を使うことで、きれいな雪を作り出すことができたので嬉しかった。
- ・中に入れる消しゴムの高さが低い場合に、「高さを出すため、ビーズが入っていた入れ物を使おう」、「海の動物の場合は固定しないで泳げるようにしよう」など積極的に意見を出し合えた。
- ・国見祭での反省点を十分に生かして、グループで協力して準備することができました。

浮沈子づくり



平成 26 年 11 月 8 日（土）に七ヶ浜国際村において、「2014 七ヶ浜芸術祭～音と絵と科学にふれよう～」が開催されました。

七ヶ浜教育委員会の後援のもと、東北福祉大学が主催として携わせていただきました。音楽や科学、美術を通して子供達や保護者の方など、たくさんの方々と触れ合うとても貴重な経験ができました。

私達は、科学ブースの「浮沈子」を担当させていただきました。午後から親子連れが多く来場し、「浮沈子」に興味を持ってくれる子供達が多くいました。

『「ふちんじ」って何だろう・・・?』



と言葉に反応してブースに寄ってくる子は少なく、実物を見て『面白そう』と興味を抱いて寄ってきてくれる子供達がほとんどでした。

私達が作った『浮沈子』とは、浮力と密度が関係したおもちゃのことです。ペットボトルを押さえて圧力をかけると、浮きの中に水が押し込まれ、中の空気が入り替わって水が入った分、浮きの密度が大きくなって浮きの密度が水より大きくなった時に浮きが沈みます。ペットボトルを押したり離したりすることで、浮きが動く様子を

子供達は楽しんでいるようでした。

今回の大きな反省点は、「事前準備の甘さ」でした。前日準備で車に積み込んだと思っていた油性マジックが積まれて



いなかったり、看板を当日即席で作ることになったりしてしまいました。会場の配置や当日の活動の流れなどを学生が十分に把握できておらず、当日の流れをイメージして何が必要なのかというところを順序立てて考えることができていませんでした。積み込んだ荷物は指差しで確認し、ゆとりももった事前準備が必要だということを痛感しました。

学生 1 人 1 人が、自分にできる仕事を見つけ自ら動き、子供達と視線を合わせながら話す姿が印象的でした。子供が抱く完成のイメージに伝えられるように、どんな色を使うか何を描きたいかななどを丁寧に聞いて、子供達が主体的に楽しめるような言葉掛けができていたことが良かった点として挙げられると思います。日頃からゼミで活動している仲間と、達成感を味わえて良かったです。今回の実践での学びを、今後の日常生活に生かしていきたいです。このような取り組みに参加できたことを感謝します。



合唱・合奏発表

＜良かった点＞

- ・当日観客が大学生だけというハプニング？があったが、堂々と演奏できたのが良かった。
- ・楽器運搬を協力してできたのが良かった。
- ・合唱、練習の成果が発揮できた。'
- ・大学生相手だったが、発表自体は盛り上がったので良かった。
- ・会場全体で楽しくできた。
- ・準備、片付けが素早くできた。
- ・急な変更点もあったが臨機応変に対応できた。
- ・聞いている人も参力口できる部分があって楽しんでもらえた。
- ・楽しめた。
- ・会場が一体感があった。
- ・一人ひとり精一杯取り組んでいた。
- ・参加型という形で発表するのが初めてだったが、きちんと形になっていた。
- ・予算が組まれているのは良かった。
- ・お客さんをこちらのノリに引き込めた。参加型だったのが良かった。
- ・楽しく演奏できた。
- ・いろんなゼミの活動に参加できた。
- ・準備、片付けがスムーズにできた。
- ・演奏間の移動がスムーズにできた。

＜改善点（ここはもっとこうしてほしかった点など）＞

- ・イベントがあるというお知らせが急で、国見祭の練習も同時並行だったため、つらかった。また、七ヶ浜と国見祭で行う内容がまるっきり違ったため大変だった。
- ・練習期間が短かった。
- ・午前中からもっとお客さんに来てほしかった。

- ・集客
- ・時間を考慮し、午前、午後 1 回ずつ演奏すればよかった。
- ・イベントの運営時間帯
- ・午前中の演奏披露の他に午後にも設けてほしかった。
- ・午前中に演奏が終わってしまったため、暇だった。
- ・発表の時間帯、集客を見て調整してみても良かった。
- ・午前と午後の 2 部構成にしても良かった。
- ・イベントの開催自体、もう少し短くても良かった。
- ・マイクのバランスが悪かった。
- ・町内の学校の行事を把握すること。それで合うところを設定し、確実に 100 人くらいは子どもが集まれるように日程を調整すること。
- ・11 月は厳しいため、9 月あたりだと望ましい。寒さの関係もあるため。雨が心配である。
- ・午前が集まらないようなら、午後に行うようにする。
- ・町の共催にしてほしい。そうするともう少し融通が利くと思う。
- ・リハーサルが短かった。
- ・午後の時間でガンザを作るコーナーを設けたら、時間をもっと有意義に使えたと思う。
- ・楽器体験とか、以前ゼミで行った楽器づくりなど、他のゼミのようにやると充実しそうだった。
- ・合唱では歌詞を覚えきれていなかった。楽譜を持って歌つても良かったかも。
- ・当日までの練習期間が短かった。
- ・学年毎になったときに盛り上がり欠けた（お客さんに子どもがいなかったせいもあるだろうが）、人数が少なくても盛り上げられるようにできるとよかった。
- ・午後が暇だった。午後でも発表できるとよかった。
- ・午後の時間も渡会ゼミで何かできるとよかった。

絵の教室

私たちのゼミは、「手の工房」にて絵葉書作成、ししやものの模写、四つの色を使った絵画制作、ボディペインティングを行いました。

直前のゼミの段階で青木一則先生から、運営の際の留意点の説明を受け、実際に作品を制作することで活動の内容を理解し、いざ実践。すると、座学では見えてこない発見が多くありました。人と関わる為にどのように声掛けをすればよいのか、私達運営者側がどのように動けばよいのか、活動の展開のタイミングは何を目安にすればよいのか…『ワークショップ』という形式の実践が殆どなかった私たちにとって、個々が多くの課題を見つけました。3年ゼミは「四つの色」「ボディペインティング」のブースを担当しましたが、それぞれに課題が見えてきて、とてもよい学びの機会となりました。

また、シフト割により、外で宣伝活動を行った際、他のゼミの様子を見ることができました。ゼミごとの特色を生かした催し物は、目移りするほど楽しそうなものばかりで、参加して下さった地域の方々の笑顔も多かったように感じます。運営側となった福祉大生の方々も楽しんでいる様子で、だからこそ、皆様が楽しめたのでは

ないかと感じます。

午後の出し物だけではなく。午前の渡会ゼミのコンサートは、素敵な歌や楽器の演奏に耳を傾けつつ、どのような楽器を使っているのか、どのように演奏しているのか、といったように日でも楽しむことができました。また、ボディパーカッションと、配布された「ガンザ」の演奏で、会場にいた全員と心をつなげることができました。

七ヶ浜に関する歴史を調べてくださったりエゾンゼミの方々の発表も、地元民ではない私達でも驚くような発見があり、地域の特色を学ぶことができました。

この度七ヶ浜芸術祭に参加し、多くの人と触れ合うことで普段の近い人との関わりでは見えてこない、多様な人との関わりの楽しさと、それに伴う難しさを感じました。特に、自らが何かを教える立場となった時に有用であると考えられる「相手と共にいき、共に悩みながら活動を行う」という事に関して、まだまだ未熟であると感じました。今回学ぶことができた数々の発見を、今後の活動や将来のスキルとして生かしていくことができるよう、反省を行い、成長の糧にしていきたいと思います。

かざぐるまづくり

1. 用意したもの

- クリアファイル 約 30 枚
- ストロー約 150 本
- ビーズ約 150 個
- 針金 3.5 cm 約 150 個
- 工 具類・デザイン類（ラジオペンチ、はさみ、ホットボンド、ホッチキス、油性カラーペン、マスキングテープ）

2. フェスティバルに向けての準備とその工夫

準備はまずかざぐるまの部品を何にするかから話しはじめました。持ち手はストローと割り箸。羽部分はクリアファイルと折り紙（紙）。軸部分は針金、ビーズ、つまようじ、画鋲、など。すべて用意し、実際に作ることで安全面、回転の滑らかさなどの観点から結果的に上記の素材に決めました。

1 枚のクリアファイルからかざぐるま 4 つ分の羽を作ることができる。ストローやビーズはいろいろな色を準備し子供の好みに合わせられるようにする。ビーズと針金はどのようにつなげるかが課題で最初は針金をどのように曲げてつなげるかというように曲げ方を考えていたがかなりの力が必要なため結果ホットボンドでくつつける形にした。ただ針金には強く接着しなかったため針金の先端に凹みを入れることで抜けないようにしました。

3. フェスティバルを終えての反省と改善点（考察）

フェスティバル当日は思いのほかお客さんが少なく不安があるスタートだったが、昼過ぎにはちらほら子ども

たちが来てくれたのでよかったです。でも想定していた人数よりずっと少なく材料は余ってしまいました。今回は 1 回目ということもありお客さんの人数は把握するのが難しかったかもしれないが来年も開催するのであればもつと宣伝をしてお客さんを増やせればと思った。ブース間の人気の偏りはどうしても出てしまうと思うので来年はスタンプラリーを取り入れるなどしていろいろなブースを体験してもらう工夫も取り入れたいと思います。

かざぐるまブースは大きな失敗もなく無事に終わることができました。かざぐるまを子どもたちが作る際になるべく簡単にできるように簡単な切る作業と絵を描く以外のことは事前にこちらで準備したのはよかったと思います。ただ、ホッチキスでかざぐるまの中心を止める作業が難しく実際のところお客さんの少なさに助けられたところがあると感じているのでその部分に改善の余地があると思います。

4. 代表者感想

今回第 1 回目の子どもフェスティバルということもあり、改善点が多くあったのは仕方ないが学生自身も楽しめていたし、たいいていのボランティアはやることが決まっていたそれを学生が手伝うというものが多く中、このように自分たちでブースを考えて準備して子どもたちに楽しんでもらうというボランティアはなかなかないのでとても良い経験になったと思います。早めに子どもフェスティバルのことがわかっていたので準備もあせらずにできた点も良かったです。

来年もあればひまた新しいブースを考えたいです。

プラゼミづくり

<反省点>

- ・事前にやること、確認しておくことを皆で情報共有しておけば良かった
- ・装飾のシール等をもつと子どもの興味に合わせて準備すれば良かった（妖怪ウォッチやアナと雪の女王等）
- ・看板やレイアウト等、子どもを惹きつける工夫が必要だったのではないかな
- ・子どもに待っていてもらう時間に何か出来たのではないかな
- ・もつとたくさん子どもたちに作ってもらえるように積極的に声がけ、働きかけることが必要だったのではないかな
- ・フィルムケースの穴に紐を通す作業に苦慮する子どもが見られたため、やりやすく工夫することも必要だったのではないかな
- ・プラゼミを回して音を鳴らしている時にフィルムケースが飛んでしまうことがあったため安全面を考え対策を考えておけばよかった
- ・年齢によってプラゼミを回すのが苦慮している子どももいた（紐が絡まってしまう等）ため、上手く回すコツなどもっと上手く教えてあげられれば良かった

<良かった点>

- ・子どもたちも学生も楽しんで取り組んでいた
- ・子どもたちが楽しそうに遊んでいた様子が見られた
- ・学生同士が他のブースに興味を持って見に行ったり、製作しに行ったりする等交流することができた
- ・未就学児や小学校中学年程度の子どもの等いろいろな年齢の子どもと関わった
- ・プラゼミを作るにあたって紐の色やビーズ、重りやシールを色々な種類を用意したことで子どものオリジナルのものが出来上がり満足していたのではないかな
- ・年齢によって出来ることが異なるため、どこまで援助が必要なのかを見極めることを学んだ
- ・子どもの年齢に合わせてどこまで援助するか、どんな声がけをするか等考えながら関わる大切さを学ぶことができた
- ・ヤニをたくさん付けると大きい音が鳴るということに子どもが自ら気づいて、工夫して遊んでいる姿を見ることができた
- ・始めは作つても上手く鳴らせない子どもがいたが、鳴らせるようになるととても嬉しそうな顔をしていたのが印象的だった
- ・始めは上手くプラゼミを回せない子どもでも、練習したり家族と一緒に楽しんだり遊びの展開を様々見ることができました

クリスマスイルミネーションづくり

今回私たちは、LED を用いたクリスマスイルミネーションを作成した。LED 電球と台とを別々に用意しておき、来場者には 2 つを繋ぎ合わせる作業と装飾を体験してもらった。主には、装飾に時間をかけた。今回の大きな特色である「クリスマス」のイルミネーションであることを生かして、装飾に雪だるまとプレゼントの飾りを用意した。そして、出来上がったクリスマスイルミネーションを、私たちが作成したおうちに入れ、暗くなると光ることを見てもらいました。

< 4 段雪だるまの少年 >

私たちの予想では、発泡スチロールの白い球を 2 つ合わせて、ノーマルな雪だるまを作ることになっていた。そこに現れたとある少年。少年は 4 つの球を合わせて、なんと 4 段の雪だるまを作っていた。私たちにそのような発想はなかったため、子どもの発想は面白いなと改めて感じました。

< ホットボンド >

ホットボンドは熱く、子どもに触らせるには少し危険であることは認識していたが、その代替となるものを見つけれずにいた。しかし、今回、発泡スチロールは爪楊枝で、キラキラの装飾は厚い両面テープでくつつくことが分かった。このことで、どの年代の人でも安全に飾り付けることができること、工夫次第で安全になることを学びました。

< 大量の忘れ物 >

私たちの今回の最大の反省点は、大量の忘れ物をしてしまったことだ。事前の準備における確認が不足し、ニッパや両面テープといった致命的な忘れ物があった。相互の確認を怠った全員の責任である。次回からは、誰か任せにせず、持っていくものリストを作成し、何度も確認をしていきたいと思います。

II . 野々島プロジェクト

野々島プロジェクト

目 的

豊かな環境の中で自然の素晴らしさを直接感じられる体験や環境づくりの基礎を学ぶなどの取り組みを、支援や配慮を必要とする子どもたちを対象に東北福祉大学の専門的知識を有する教職員と学生が一体となって行うことを通して、子どもたちに自信と勇気を取り戻す場を提供します。

また、子どもたちを対象とした体験型学習を学生主体で展開することによって、その経験を卒業後の学校現場や社会生活の場面で生かすことができる力量を身に付けた学生を育てることを目指します。



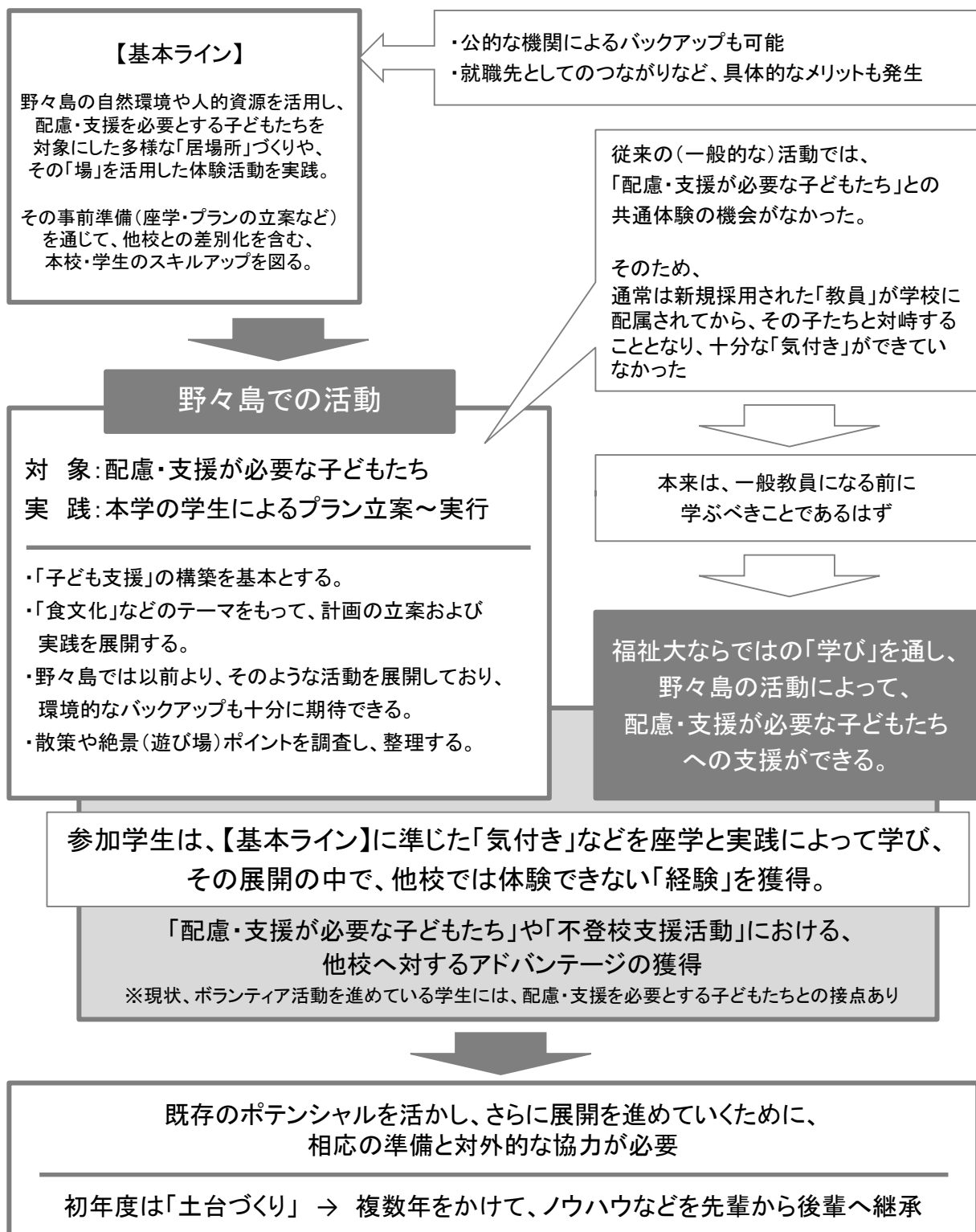
実施計画

期間	項目			
5月下旬～ 6月中旬	事前準備	実施テーマのピックアップ	【動物（＝メダカ）】【植物（＝ラベンダー）】【食物（＝仙台白菜）】など、野々島での実施にかかる項目の選定。	
		実施関係者へのヒアリング	「野々島自然塾」や「くろしお」などに、実施協力の是非を確認。教育関係各部署などに対する、事前確認も併せて行う。	
		必要アイテムのピックアップ	野々島上陸のための手段（バス・船など）、島内での移動や荷物の運搬にかかる手段（自転車、リヤカーなど）、さらには、実施にかかるアイテム（ボート・カヤックなど）も確認。	購入またはレンタルで対応する。
6月28日（土）	野々島での調査	学生・教員・スタッフ	野々島での現地調査。（金ゼミ）	野々島自然塾など、地域の方の協力もいただく。
6月下旬	プランニング	学生・教員・スタッフ	野々島で実施。実施テーマ（動物・植物・食物）別のプログラム準備。（金ゼミ）	
	参加学生の募集	学生・教員・スタッフ	野々島実施に向けて、学生を募る。	協力頂ける教職員にも声をかける。
7月中旬	リハーサル準備（前半）	学生・教員・スタッフ	野々島での実施に際し、事前に学生のみでリハーサルを実施。当該企画にかかる「危険」の発見や、その回避方法などの構築を目的とする。	野々島自然塾など、地域の方の協力もいただく。
7月4日（金）	ワークショップ＜1＞自然学習	学内にて実施 17:30～（座学を想定）6限目	支援や配慮を必要とする子どもたちへの対応や、環境づくりにかかる基礎知識を習得。実施テーマ（動物・植物・食物）に沿った、プログラムも作成。	自然体験活動の支援をしてもらえるような学生を、金ゼミ以外の学生からも募る。
7月11日（金）	ワークショップ＜2＞不登校支援			
7月18日（金）	ワークショップ＜3＞不登校支援			
8月5日（火）～20日（水）	リハーサル準備（後半）	学生・教員・スタッフ	野々島で実施。実施テーマ（動物・植物・食物）別のプログラム準備、野々島での実施に際し、事前に学生のみでリハーサルを実施。当該企画にかかる「危険」の発見や、その回避方法などの構築を目的とする。	野々島自然塾など、地域の方の協力もいただく。
9月7日（日）（予備日8、9日）	リハーサル	学生・教員・スタッフ	実施テーマ（動物・植物・食物）別のプログラムを実施。「くろしお」などの協力を得てアクティブなオプションも用意し、「海の学習」として構築する。 ※全て日帰りでの実施を想定。	移動手段には、自転車、荷物運搬にはリヤカーが必要 各種アイテムなども購入やレンタルで対応する。
9月28日（日）	野々島での自然体験型学習の実施	当該計画のメイン活動	リハーサルの内容を基に実施。 ※事前の考察や修正項目などをベースにプログラムの再編成も行う。 ※次年度も含め、今後の展開のモデルケースとなるような実施とする。	保護者らも参加しやすいように、実施時期を秋に設定。
7月～10月	実施資料のまとめ・編集	学内にて作成	事前の計画立案段階・ワークショップでの考察を踏まえた、実施までの記録を作成。「大学祭」での発表を目的とした、事後ワークとして展開。 ※次年度への継続も考慮した内容とする。	
10月25日（土）・26日（日）	大学祭での発表	大学祭にて一般公開	対外的な広報の一環として、実施の内容をプレゼンテーションする。実施した子どもたちや、協力いただいた皆さんからのコメント発表も行う。 ※大学祭での「ブース」は（学生によって）手配済み。	実施した子どもたち、関係者・協力者もこのプレゼンには参加・列席いただく。

<補足説明>

- ・上記計画の実施タイミングに合わせて、各メディアへのニュースリリースを発信します。
- ・初年度の動きとして、「広報（＝ニュースの創出）」の意味合いを持たせた展開を想定します。
- ・当該事業に対する大学内および対外的な「認知・理解」を進めるための実施とします。
- ※その他、詳細についてはご協議の上にての決定とさせていただきます。

野々島の活動・展開（全体ストーリー案）



「島であそべんちゃー IN 野々島」事前活動報告

1. はじめに

この報告書は、2014 年 9 月に宮城県塩竈市浦戸諸島、野々島で行われたイベント「島であそべんちゃー」の準備期間の活動をまとめたものです（イベント詳細については後述のイベント当日報告書参照）。

イベント本番までの準備の流れとしましては、まず、野々島とはどのようなところなのかを調べ、次に、参加

児童とよりよく接するために、自然体験活動の心得、児童の行動特性について、専門の講師を迎え、ワークを用いた学習（全3回）を行いました。続いて簡易プログラムを作成しリハーサルを実施、その後リハーサルを行った際に出た課題を参考にしながらプログラムを改良、さらに、必要なものを作成し、イベント前日にゼミ生で野々島に宿泊し、当日に備えました。

[illegible]

募集要項

2. 事前学習について

5~6 月：野々島の特産を調べ、発表

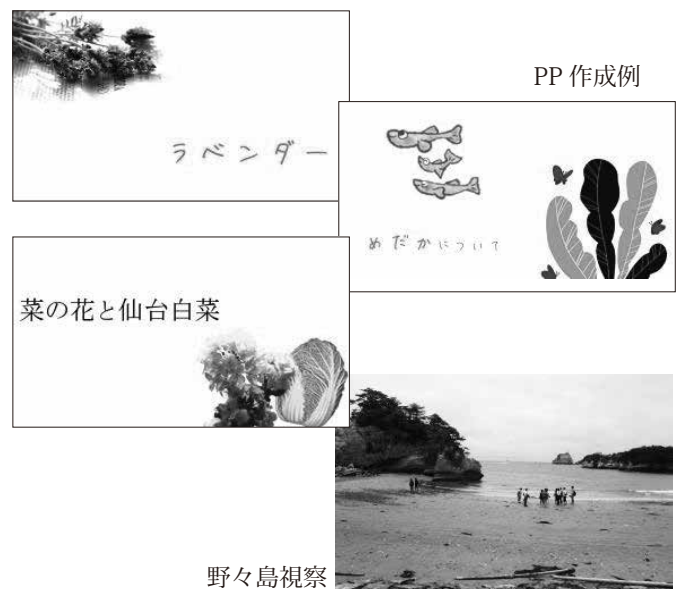
事前学習として、野々島に関わりのある「仙台白菜」「メダカ」「ラベンダー」について自分たちでP Pにまとめ、発表しました。

6 月末：野々島視察

実際に野々島へ視察に行き、島の雰囲気や関係者、会場を確認しました。

7月：自然の中での活動、子供たちへの接し方についての座学

外部支援者として講師を招き、自然体験活動の心得と配慮が必要な子供たちに対しての接し方を学びました。



野々島視察

3. リハーサルについて

野々島到着後スケジュールの確認・準備

時間軸に沿っての最終確認と会場設営を行いました。

対象者出迎え

A班はマリンゲート塩釜にて参加者（児童）役の学生と乗船し野々島へ向かいました。

B班は一部の学生が野々島船着場で出迎えをし、他の学生は宇内浜にて出迎えをしました。

出合いの集い

主催者挨拶に始まり、活動内容についての説明・諸注意をしました。

活動

学生が計画したボール遊びと野々島で採った貝殻や木の枝、木の実で工作を行いました。

昼食

昼食はイモ煮、手巻き寿司、おにぎりづくりを実施し、特に小学生向けの具材選別（手巻き寿司、おにぎり）に気くばりしました。

またイモ煮の味選びができるよう、味噌と醤油の二種類を用意しました。

お楽しみイベント

アニメ妖怪ウォッチ（妖怪体操第一）を学生が参加者役になり小学生向けの指導方法を考えました。

参加者見送り・片付け・反省会を行いました。

A班は参加者をマリンゲート塩釜まで見送って、再度船で野々島に戻りました。

B班は宇内浜にて会場撤去作業を行い、A班が戻ってくるのを待ち、合流後、野々島自然塾にて反省会を行いました。

時刻	内容	担当	内容	担当	内容	担当
10:00	集合・挨拶	学生	集合・挨拶	学生	集合・挨拶	学生
10:10	説明・注意事項	学生	説明・注意事項	学生	説明・注意事項	学生
10:20	ボール遊び	学生	ボール遊び	学生	ボール遊び	学生
10:30	工作	学生	工作	学生	工作	学生
10:40	昼食	学生	昼食	学生	昼食	学生
10:50	お楽しみイベント	学生	お楽しみイベント	学生	お楽しみイベント	学生
11:00	片付け	学生	片付け	学生	片付け	学生
11:10	反省会	学生	反省会	学生	反省会	学生
11:20	解散	学生	解散	学生	解散	学生

リハーサルスケジュール



ストラックアウト



サッカー



フォトフレーム作り



昼食（仙台味噌）



ダンス

4. 準備期間について

リハーサルで出た課題点を修正するために、まず学生全員の役割分担を行いました。探険隊係や工作係といった当日活動する係のほか、物品係や食事係など、細かく分けました。定期的にリーダー会議を行い、各係の状況が分かるように工夫しました。

また、前日準備のためにゼミ生はブルーセンターに前泊しました。荷物運びや昼食の仕込み、最終打ち合わせなどを行って翌日の本番に備えました。

課題・改善策チェックシート

リハーサル終了時に学生・教員全員に配布したアンケートを集計し、分類ごとにまとめました。特に、情報の共有がスタッフ全体に伝わっていないことが多く指摘されました。

[illegible]

課題・改善策チェックシート

係活動予定表

誰がどの係なのか、各係のリーダーが誰であることをハッキリとさせるためのものを作成しました。

必要なもののリスト

係りごとの活動に必要な物品をリスト化し、このリストを基に物品係が物品の購入を行いました。

リーダー会議

各係のリーダーが早朝あるいは昼休みに集まり、係りごとの準備の進捗状況や変更点、全体的な変更点を他のリーダーに報告するため、あるいは班員に伝えるためのミーティングを行いました。

前泊

野々島のブルーセンターに宿泊し、翌日のイベントのために、食事の下準備、必要物の作成、最終ミーティングなどを行いました。

保護助手定表			
係 名 ()	係 名 ()	係 名 ()	係 名 ()
メンバー (サリーター) :			
00 00	00 00	00 00	00 00
00 00			
活動内容			
曜日	活動時間	活動場所	活動内容
00:00	00:00	00:00	00:00
	00:00	00:00	00:00
留意事項			
○			
○			
○			
その他			
○			
○			
○			

保護助手定表			
係 名 ()	係 名 ()	係 名 ()	係 名 ()
メンバー (サリーター) :			
00 00	00 00	00 00	00 00
00 00			
活動内容			
曜日	活動時間	活動場所	活動内容
00:00	00:00	00:00	00:00
	00:00	00:00	00:00
留意事項			
○			
○			
○			
その他			
○			
○			
○			

係活動予定表

※1.お持ち込み品が次のリストに該当し、購入が必要となる場合に購入品名を記入する					
	品名	数量(単位あるものは単位)	船料	所定	
	(具体的に、写真であれば添付も記入)	購入時に、これから購入が必要なものか 在庫品(既に購入済みなもの)	0 1	A+B=1	備
	舟) モーターボートのボート				
1	燃料(ガソリン)	購入品か 在庫品か	0 1	1	
2	穴あきパン	購入品か 在庫品か	0 1	1	費用
3	缶 (魚上置証、持参、燃料かうい、す魚) 100粒入り	購入品か 在庫品か	0 1	1	
4		購入品か 在庫品か			
5		購入品か 在庫品か			
6		購入品か 在庫品か			
7		購入品か 在庫品か			
8		購入品か 在庫品か			
9		購入品か 在庫品か			

必要なもののリスト

発表資料

2014年度

野々島活動報告レポート

{	秋保 良樹
	阿部 史華
	石川 健太
	菅原 悠里江
	水戸 遥

1.事前学習
7月 座学

配慮が必要な子供たちについて学ぶため



目次

1. 事前学習
2. リハーサル
3. 準備期間
4. まとめ

2.リハーサル

出迎え班



会場設営班



1.事前学習
5～6月 事前学習

菜の花と仙食白菜

白菜の原産地

ラベンダーについて

メダカについて



2.リハーサル

出合いの集い

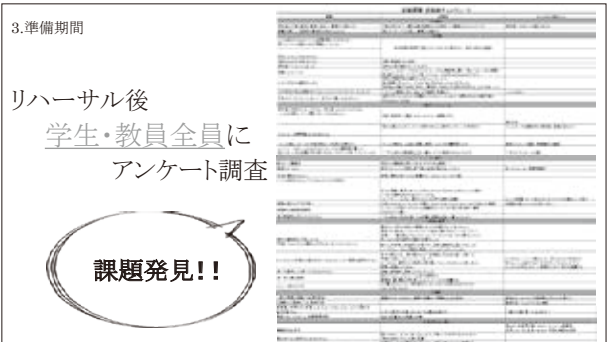


1.事前学習
6月末 野々島視察



2.リハーサル





まとめ

知る → 計画立案



課題発見 → 課題解決 → 本番



課題発見 → 再

「島であそべんちゃー IN 野々島」活動報告

1 趣旨

東北福祉大学では、子ども支援プロジェクト推進委員会が中心となり、震災（津波）で大きな被害を受けた地域（塩竈近郊）の児童を対象とした自然体験活動を、本学の学生が主体となり、教職員、学外の支援者の協力を得てこの秋「野々島」にて実施する運びとなりました。さわやかな秋のひと時「野々島」のきれいな海と自然を通して、参加していただいた児童の皆さんが様々な事を体験し学ぶこと、また心の癒しに繋がることができれば、と考えています。

2 主催 東北福祉大学

3 後援 塩竈市教育委員会

4 支援・協力 野々島自然塾

5 期日

平成 26 年 9 月 28 日（日） 9 時 00 分～ 15 時 30 分

6 場所 塩竈市 浦戸諸島『野々島』

7 参加者状況

	男	女	合計
児童	8 人	10 人	18 人
学生スタッフ	8 人	15 人	23 人
教員	3 人	0 人	3 人
学外支援者	6 人	1 人	7 人
合計	25 人	26 人	51 人

8 当日スケジュール

時刻	活動内容		場所
9:00	参加者受付	・名札作成 ・乗船時の注意事項説明	マリンゲート塩釜
9:30	定期船 乗船		
10:01	定期船 下船		野々島船着場
10:15	出合いの集い	・挨拶 ・宇内浜会場図案内 ・注意事項説明	宇内浜
10:20	探検	・島歩き ・野々島の観光クイズ ・特産物の紹介	野々島各所
12:00	昼食	・仙台芋煮、手巻き寿司、おにぎり	宇内浜
13:00	お昼休み	・ポップリづくり ・フォトフレームづくり ・ボール遊び等	
13:30	お楽しみイベント	・ダンス	
14:00	別れの集い	・一日の振り返り ・挨拶	
14:23	定期船 乗船		野々島船着場
15:01	定期船 下船		マリンゲート塩釜
15:30	解散	・保護者へ引き渡し	

9 活動状況

(1) 受付・送迎 ①



1



2



3



4



5



6



7

学生スタッフ 8 名でマリゲート塩釜内にて参加する児童の受付を行いました。一組、また一組と次々に参加児童とその保護者の皆さんが集まりました。参加者にはスタッフがニックネームの名札を作って胸元に貼り、活動のしおりを首から下げました。保護者の皆さんには受付時に学生スタッフが個々に対応し、安全面での対応や不安事項などについてはないかなど、直接確認を行いました。また、スタッフは児童に積極的に話しかけ、緊張



8

を和らげよう、楽しませようという気持ちが出ていました（写真 1,2）。その後、定期船乗船時の注意事項を説明し乗船しました（写真 3、4、5）。出航する際、保護者の皆さんが手を振ってお見送りをしてくれました。

野々島に着くと、学生スタッフが手作りの『島であそべんちゃー IN 野々島』という看板で出迎えてくれました（写真 6）。その後、出会いの集いを行うために本活動の中心地となる宇内浜へ向かいました（写真 7、8）。

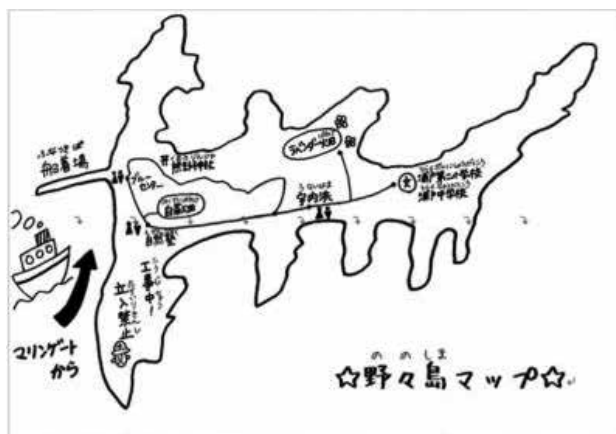
(2) 出会いの集い

船着場から元気に歩いて来た児童を、宇内浜で待機していた支援学生一同が笑顔で出迎えました。事前に手渡した学生スタッフ名簿にあった顔写真の学生スタッフを見つけると、早速ニックネームで呼び、打ち解けた子どももいました。そして司会進行の下、主催者挨拶や諸注意、スケジュールの確認を行い（写真 9）、最初のイベントとなる野々島探検隊へと引き継ぎました。



9

(3) 野々島探検



10



13



11



12



14



15

出会いの集いが終わり、宇内浜で児童と一緒に持ち物チェックをした後、虫除けスプレーなど野々島探検の準備をしてから出発しました。

探検ルートは、夜泣き地蔵 → 古道 → 椿のトンネル → ボラ※ → 白菜畑 → 自然塾 → 宇内浜の順に回りました(写真 10)。また、何かトラブルがあったときに迅速に対応できるよう、参加者の列の先頭・中間・最後尾に学生がつく隊列を維持しながら歩きました。

観光名所の夜泣き地蔵で、地蔵と椿に関するクイズを出しました(写真 11)。古道に入り、椿のトンネルへ到着すると、道にたくさん落ちていた椿のタネに参加者が気づき、拾い集めました(写真 12)。その後山林を抜け(写真 13、14)、ブルーセンターでトイレ休憩を済ませ、ボラ※洞窟群の前で再びクイズを出しました。

その後、野々島の食文化の紹介として、参加者に実際に仙台白菜の畑を見せながらどのような野菜かを説明したり、ラベンダーの香りを嗅いでもらったり、ラベンダーとはどのような花であるか、また、実際にメダカの稚魚を観察してもらいながら、野々島の野生で生息しているメダカが如何に希少であるかを説明しました(写真 15、16)。その後、自然塾で昼食のための手洗いをして宇内浜へ戻り、到着後集合写真を撮りました(写真 17)。



16



17

※ボラとは、野々島を歩くといたる所で見かける洞穴です。地元ではこの洞穴のことを「ボラ」と呼んでいます。いつ頃作られたのか？ 当初の目的は何だったのかは謎となっています。現在、多くの洞穴は民家の倉庫や漁具などの資材置き場として利用されています。

(4) 昼 食



18



19



20



21



22



23

昼食は、芋煮と参加者が手づくり体験できる手巻き寿司を用意しました（写真 18）。

芋煮は里芋、にんじん、だいこん、白菜、こんにゃく、しめじなどと、野々島で育てられた長ネギを加えた味噌味の仙台芋煮です。前日から準備していた甲斐もあり、具たくさんの芋煮は好評でおかわりをする児童もいました（写真 19、20）。

参加者が自分で手づくりする手巻き寿司は、海苔にご

飯を乗せその中に自分の好きな具材を入れて巻く簡単なものです。具材の量が多すぎて巻くことができない児童もいましたが、みんな楽しみながら手巻き寿司を作っていました（写真 21）。

手巻き寿司と芋煮を持ち、海の見える場所、テントの中、ステージの上など思い思いの場所で楽しそうに食事をしていく様子が印象的でした（写真 22、23）。

(5) 工 作

お昼休みの自由時間を使って「フォトフレームづくり」と「ポプリづくり」を行いました（写真 24）。

フォトフレームづくりでは、フォトフレームには野々島の海岸で拾った貝殻や木の枝（事前に学生が煮沸消毒を済ませたもの）、学生が持参したビーズなどを貼り付け、デコレーションしました。このデコレーションしたフォトフレームは、昼食時間前に撮影した集合写真を入れて、イベントの思い出としてポプリと共に持ち帰ってもらいました。

ポプリづくりは、学生手づくりのポプリ入れに野々島で収穫したラベンダーを乾燥させたものを詰め、ミサンガで結ぶといった手順で行いました。工作を通じて野々島の自然に触れてもらうことができた体験となりました（写真 25、26）。



24



25



26

(6) お楽しみイベント

お楽しみイベントとして、小学生を中心に人気のアニメ「妖怪ウォッチ」より、「妖怪体操第一」を参加児童、サポート学生、教員、学外協力者、全員で踊りました（写真 27）。簡単なダンスなので、初めて踊る参加者も全体練習を2回ほど繰り返せば踊れるようになりました（写真 28）。中には恥ずかしがっていた子どももいましたが、みんなで楽しく踊ることができました（写真 29）。



27



28



29

(7) 別れの集い



30



31

お楽しみイベントのダンスが終わり、そのまま別れの集いを行った（写真 30、31）。疲れが見えたり寂しそうにしている児童がいた一方で、まだ遊び足りない元気な児童がいるなど様々な表情を観ることができた。集いの後、児童自身がデコレーションしたフォトフレームに



32

集合写真を入れたものと手づくりのラベンダーのポプリを一人ひとりに手渡した。帰りの船の時間が迫る中、学生の多くも名残惜しそうに参加者と会話している姿が印象的であった（写真 32、33）。



33

(8) 受付・送迎 ②

宇内浜で別れの集いを終えた後、別れを惜しみつつ参加児童一行は見送りの学生とともに、野々島の船着き場へ向かいました（写真 34、35）。マリンゲート塩釜の船着き場では、保護者の方が手を振って迎えてくれました。保護者の皆さんと合流し、共に受付を行ったマリンゲー



34

ト内のロビーへ向かいました。参加児童の点呼を行ってから、おわかれの挨拶をし、お土産であるラベンダーの苗と野々島の貝殻を手渡しました。その後、全員で「さようなら」をして保護者の方へ引き渡しを行いました。保護者の方が何度もお辞儀をし、参加児童は何度も手を振ってくれる姿が印象的でした（写真 36、37）。



35



36



37

10 まとめ

まず成果としてあげたいのは、参加して頂いた児童とその保護者の皆さんに「今回の企画に参加できて良かった」と喜んで貰えたことです。はじめは1人でいた児童も、参加者同士で打ち解けて、次第に笑顔が見られるようになりました。イベント後、参加児童とその保護者に実施したアンケートでは「楽しかった」といった声が多く寄せられており、保護者からは「是非また機会があれば参加したい」という言葉も寄せられました。

当日はケガや体調を崩した児童も無く、楽しそうに活動する様子が見られました。しかし一方で、主催者側の

準備不足も多く目立ちました。児童への注意の仕方が分からなかったり、リハーサルで指摘された数々の課題や改善点を踏まえた新たなリハーサルを事前に行うことが出来ないまま本番を迎えるなど、不安要素を抱えながら活動を行ってしまったことも事実です。

これから、今年の活動を振り返り、そこで出た課題や問題点を改善しながら、次年度の活動に繋げて行きたいと思います。

なお、この活動報告書は今回の取り組みの企画から実施に携わった学生が中心にまとめたものです。

発表資料

平成27年2月18日
金政信ゼミ

遠藤郁
佐藤真由
若松苑実

島であそべんちゃー
IN 野々島

活動報告

◎受付



マリンゲート内

・参加者: 名札作成、しおり配布
・保護者: 1人ずつ対応、不安事項の確認等

船着き場

・乗船時注意事項を説明

時 刻	活動内容		場 所
9:00	参加者受付	・名札作成 ・乗船時の注意事項説明	塩釜マリンゲート
9:30	乗船		
10:01	下船		野々島船着場
10:15	出合いの集い	・挨拶 ・宇内浜会場図案内 ・注意事項説明	宇内浜
10:20	探検	・島歩き ・野々島の観光クイズ ・特産物の紹介	野々島各所
12:00	昼食	・仙台芋煮、手巻き、おにぎり	宇内浜
13:00	お昼休み	・ポップ作り ・フォトフレーム作り ・ボール遊び等	
13:30	お楽しみイベント	・ダンス	
14:00	別れの集い	・一日の振り返り ・挨拶	
14:23	乗船		野々島船着場
15:01	下船		塩釜マリンゲート
15:30	解散	・保護者へ引き渡し	



集合場所で広がりすぎ
まとまりがない



参加者に対して、学生スタッフ
が少なかったのでは・・・？

◎島であそべんちゃー IN 野々島

期日: 平成26年9月28日(日)9時00分～15時30分
場所: 塩竈市 浦戸諸島『野々島』
主催: 東北福祉大学
後援: 塩竈市教育委員会
支援・協力: 野々島自然塾

参加者状況:

	男	女	合計
児童	8人	10人	18人
学生スタッフ	8人	15人	23人
教員	3人	0人	3人
学外支援者	6人	1人	7人
合計	25人	26人	51人



◎出会いの集い

宇内浜

- ・主催者挨拶、諸注意
- ・スケジュール確認

探検出発準備

- ・持ち物チェック
- ・虫除けスプレー



白菜畑

- ・実際に畑を見せながら白菜の説明！

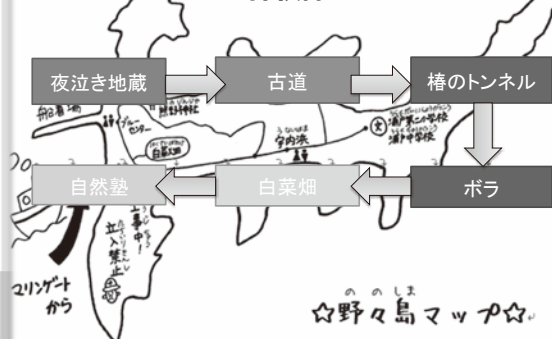
- ・実際に香りを嗅いでもらいながらラベンダーの説明！

自然塾

- ・実際にメダカの稚魚を観察！



◎探検隊



夜泣き地蔵前

- ・地蔵と橋に関するクイズ出題！



橋のトンネル

- ・橋のタネを発見！



ボラ洞窟前

- ・ボラに関するクイズ出題！



気温が高かったため、歩き疲れる子が見られた



乗り気ではない子どもへの対応が不十分だったのではないかな…？



拡声器を利用しても前列にしか声が届いていなかった

◎昼食

手巻き寿司



好きな具を選んで、
自分で作った！

仙台芋煮



野々島で作られた
長ネギを使った！

◎自由時間

フォトフレーム作り

・野々島の海岸で拾った貝殻・木の枝、ビーズなどでデコレーション

ポプリ作り

・野々島のラベンダーを使用



手巻き寿司の人気具材に偏りがあり、すぐに無くなってしまった



芋煮と手巻き寿司の量が多すぎて、余らせてしまった



工作ブースが小さすぎたこと



工作をメインとして考えても良かったのでは・・・？



時間が足りず、完成できない子がいたこと

◎お楽しみイベント



人気アニメ『妖怪ウォッチ』より
『妖怪体操第一』を全員で踊った！



曲が低学年向けであったこと



踊りたがらない子への対応



◎引き渡し



マリンゲート内

- ・点呼後、別れのあいさつ・お土産を手渡す
- ・「さようなら」のあいさつ・保護者の方へ引き渡し

まとめ

成果

ケガや体調を崩した児童もなく楽しく活動できた

反省

- ・リハーサルなどの準備不足
- ・児童への接し方

課題や問題点を改善しながら、次年度に繋げていく。



全体的に広がりすぎてしまったこと



保護者の方への引き渡しの仕方に問題があったのではないか…？

ご清聴ありがとうございました。



「島であそべんちゃー IN 野々島」事後活動報告 — 「国見祭」(大学祭) での活動報告 —

1 趣旨

東北福祉大学では、子ども支援プロジェクト推進委員会が中心となり、震災(津波)で大きな被害を受けた地域(塩竈近郊)の児童を対象とした自然体験活動を、本学の学生が主体となり、教職員、学外の支援者の協力を得てこの秋「野々島」にて実施する運びとなりました。その際の活動報告を、大学祭で行いました。

2 主催 東北福祉大学 金政信ゼミ

3 期日

平成 26 年 10 月 25 日(土) 10 時～14 時 30 分
26 日(日) 10 時～15 時 30 分

4 場所 東北福祉大学 2 号館第 19 演習室

5 参加者状況

(1) 学生スタッフ数

	男	女	合計
25 日	3 人	6 人	9 人
26 日	1 人	4 人	5 人
合計	4 人	10 人	14 人

(2) 来場者数

	人数
25 日	179 人
26 日	131 人
合計	310 人

6 活動状況

(1) 大学祭での活動報告のための準備

9 月 28 日(日)の活動終了後、後日、活動を振り返り、報告書の作成を行いました。その報告書を元に活動係ごとに分かれて、参加児童との思い出に浸りながら報告内容を模造紙にまとめました。学生全員が活動の思い出が鮮明だったため、スムーズに準備が行われました。報告したいことはすぐに膨れ上がりまとめきれなくなり一時



困惑した時もありましたが、時間をかけて練りあげ完成することができました。

(2) 準備

未完成だった掲示物を完成させたのち、作成した掲示物をあらかじめ決めた展示室の配置図に沿って掲示板や





教室の壁などに貼り付ける作業を行いました。掲示物だけでは教室が殺風景であったため、折り紙や風船・人気キャラクターの絵等を準備して誰でも気軽に入場できるような環境づくりを心掛けました。

(3) 本番

① 紹介ビデオでの発表



教室展示への来場者に対して、野々島についての基本的な情報や 9 月 28 日に実施した「島であそべんちゃー IN 野々島」での活動報告を、活動中の写真などを交えて、約 10 分にまとめた、パワーポイントを使って発表を行いました。発表の合間には、活動中の写真をスライドショーにして流しました。野々島での活動を振り返ることにより、野々島についての知識、関心をさらに深めることができました。そして、この発表を通して多くの来場者に、野々島の良さや、野々島での活動の様子を、自分たちの言葉で発信することができました。

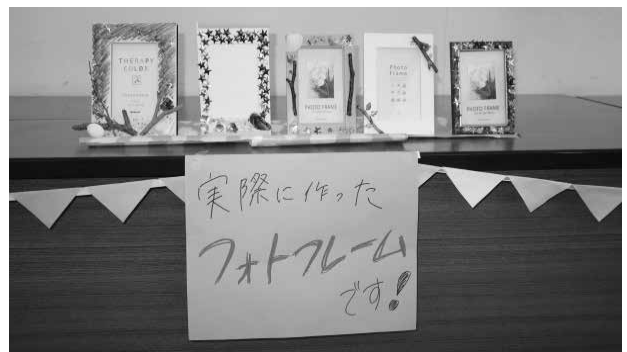
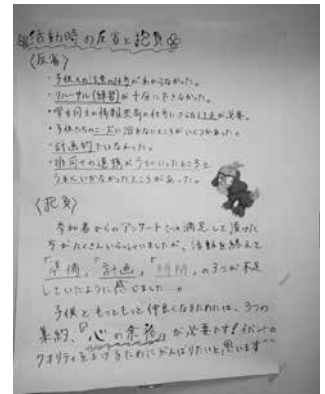
② ポプリづくり体験コーナー

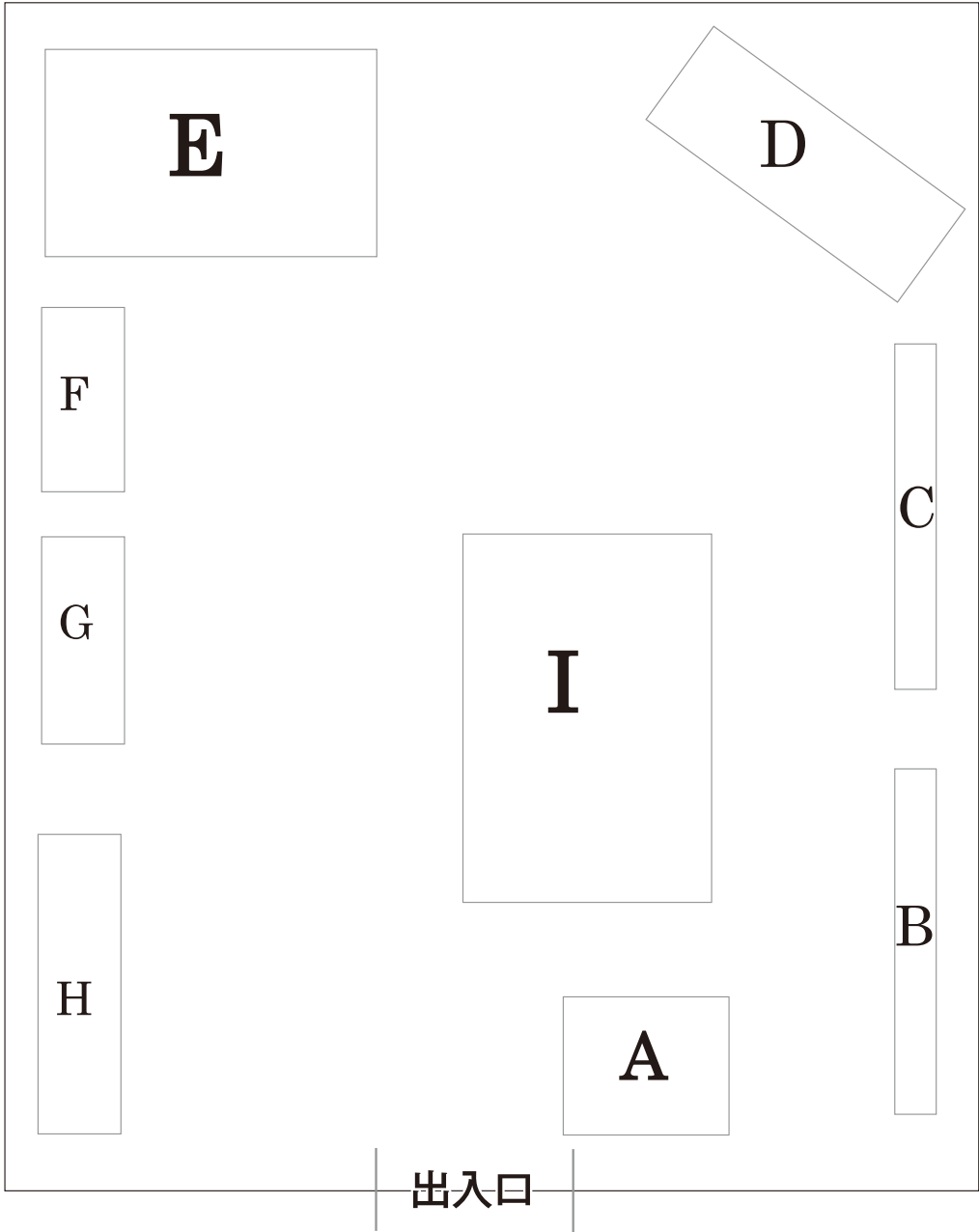
ポプリづくりの体験コーナーを設けて、来場者にポプリづくりを行ってもらいました。作り方は簡単だったのでみんな楽しそうにつくっていました。ポプリづくりをすることで、ラベンダーや野々島に興味を持ってくれた方が多くいました。また、「枕元に置いたらぐっすり寝れそうだわ〜」と、特に高齢者の方に喜んでもらえたポプリづくり体験の場となりました。



③ 展示掲示物

私たちが野々島で活動してきたことをまとめ展示しました（図表参照）。模造紙には、野々島の歴史・マップ・活動目的・タイムスケジュール・探検隊・工作・食事・クイズを書き込み壁に貼り展示しました。その周りには、たくさんの写真も展示しました。テーブルの上には、ゼミ内で野々島の名産品について調べた資料やパンフレット、活動当日に探検隊で利用したクイズの画用紙、工作で作った写真立てを並べました。正面のモニターでは、子ども達と私たちが活動した様子がよく分かるようたくさんの写真をスライドショーにして流しました。





- | | |
|---------------------|------------------|
| A 受付 | F 工作 |
| B 野々島について（ゼミ生まとめ） | G 探検隊 |
| C 活動目的・スケジュール，反省と抱負 | H 野々島について（先生まとめ） |
| D 野々島クイズ | I ポプリづくり体験コーナー |
| E 紹介ビデオ | |

図表：教室内の展示配置図

野々島を知っていた方も野々島を知りたくて興味を持って来場された方も、野々島のことを知らずに来場された方もお年寄りから若い学生、小さな子どもまで、沢山の方々が教室を回って展示物を見てくれました。来場者、一人ひとりに私たちが積極的に声をかけ案内をし、質問に答えたり、活動について話したり、野々島について教えたり、丁寧な対応ができたと思います。ポプリづくりには多くの方々が集まってくれました。来場のみなさんから「楽しかった」「野々島に行ってみたい」「こういう活動してみたい」など嬉しい言葉をたくさんいただきました。



(4) 片付け

今回、活動報告するために作った模造紙などは、資料として今後も活用すべく丁寧に保管しました。片付け作業を行った人数は少なかったですが、迅速に作業を行うことができました。使用した教室は、使う前よりもきれいになるよう心掛けました。



7 感想・反省

今回の国見祭での活動報告は、多くの来場者に野々島を知ってもらえる良い機会となりました。野々島を懐かしんでいた方や、行ってみたいと言ってくださった方、さらには後日お手紙をくださった方もいらっしゃいました。中でも特に年配の方々からの興味関心が強く感じられ、活動報告を行った自分たちも、やりがいを感じることができました。

一方、反省点も多く見られました。掲示物は、自分た

ちが野々島で行ったイベントの報告に加え、野々島自体についての説明も掲示したのですが、その野々島についての知識の共有が出来ていませんでした。個々人で掲示物の作成を行ったため、作成者本人は詳しく知っていても他のゼミ生が把握しきれていませんでした。そのため、来場者を案内する際に詳しい説明ができないという事態が発生してしまったことが反省点として挙げられました。また、時間を決め、定期的にパワーポイントを用いた活動報告を行う予定でしたが、来場者に個別で案内者が付いての説明を優先したため、その結果パワーポイントを

活用した活動報告がほとんどできませんでした。しかしながら、来場者に個別に案内者を付けられたことで来場者からの反応は良かった（満足度は高かった）ようです。

準備物での反省点としては、来場者の数が予想以上に多くポプリの数が足りなかったことや写真の色が薄くて見づらいという声があったため、来年以降検討・改善していきたいと思います。

なお、この活動報告書は、今回の取り組みの企画から実施に携わった学生が中心にまとめたものです。

発表資料

平成26年度 東北福祉大学
「国見祭」活動報告

3年 安齋真人
大沢拓実
河村大輔
馬場洸太
千田彩香

5、参加者状況

(1)学生スタッフ数

	男	女	合計
25日	3人	6人	9人
26日	1人	4人	5人
合計	4人	10人	14人

(重複有り)

1、趣旨

東北福祉大学では、子ども支援プロジェクト推進委員会が中心となり、震災(津波)で大きな被害を受けた地域(塩竈近郊)の児童を対象とした自然体験活動を、本学の学生が主体となり、教職員、学外の支援者の協力を得てこの秋「野々島」にて実施する運びとなった。その際の活動報告を、大学祭で行った。

(2)来場者数

	人数
25日	179人
26日	131人
合計	310人

2、主催
東北福祉大学 金政信ゼミ

3、期日
平成26年10月25日(土) 10時～14時30分
26日(日) 10時～15時30分

4、場所
東北福祉大学 2号館 第19演習室

6.活動状況

(1)大学祭での活動報告と準備
(2)大学祭当日に向けた準備
(3)本番
(4)片付け

(1) 大学祭での活動報告の準備

- ＊ 9月28日(日)活動終了後、鮮明な思い出に浸りながら模造紙に報告書をまとめた。
- ＊ 大学祭で発表するスライドと原稿の作成を行った。



②ポプリづくり体験コーナー

- ・ 野々島でも行ったポプリ作りの体験コーナーを設置
- ・ 特に女性や高齢者の方に喜んでもらえるブースとなった



(2) 大学祭当日に向けた準備

- ＊ 完成させた掲示物をあらかじめ決めた配置図にそって壁等に貼付ける作業を行った。
- ＊ 折り紙や風船、人気キャラクターの絵等も利用し、気軽に来場しやすい環境作りに工夫をした。



③展示掲示物

- ・ 教室内には、野々島で活動してきたことをまとめたものを展示した
- ・ 正面のテレビでは、子供たちと私たちが活動した様子がよくわかるよう、たくさんの写真をスライドショーで流した

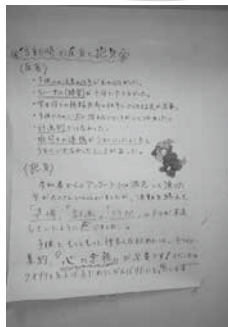


(3) 本番

①紹介ビデオでの発表

- ＊ 「島で遊べんちゃーin野々島」での活動報告を、活動中の写真などを交えて、約10分にまとめたパワーポイントでの発表を行った。





(4)片付け

* 活動報告のために作った模造紙などは、資料として今後も活用すべく丁寧に保管。



7. 感想・反省

良かった点

- * 多くの来場者に野々島を知ってもらえる良い機会となった。
- * 特に年配の方々から興味関心が強く感じられた。
- * ポプリづくり体験ブースが好評だった。

④様子

- ・ 野々島を知っている方も野々島に興味があって来てくれた方も、ただ何となく来てくれた方もお年寄りから若い学生、小さな子どもまで、沢山の方が教室内を回って展示物を見てくれた。
- ・ ポプリ作りには人が沢山集まっていた。来てくれた方には「楽しかった」「野々島に行ってみよう」「こういう活動してみたい」など嬉しい言葉を送った。



反省点

- * ポプリの数が足りなかった。
- * 写真の色が薄く見づらいという声があった。
- * 掲示物の準備を個々で行ったため、ゼミ生全員での知識の共有ができていなかった。
- * スライドでの発表を行う時間を取ることができなかった。
→ 来場者に個別で案内役を付けられたことで来場者からの反応は良かった。



Ⅲ．学生企画事業

学生企画事業

目 的

世代的に子どもたちに目線が近く、また日頃のボランティア等で子どもと接することの多い学生の多様なアイデアを活用し、子ども支援を有効性を高める。

自分たちの活動が選ばれることで自己肯定感を高め、学生のやる気と主体性を促進させるとともに、実践力アップを図る。



実施計画

期間	項目	内容	備考
7月中旬	説明会	コンペの応募についての説明	
8月6日から8日の間の一日	事前ツアー	サマースクールおよび現地の様子を見学	
9月12日	コンペ応募締切	企画案と予算を委員会に提出	
9月中旬	審査	プロジェクト委員会で審査	
9月30日	審査結果発表	入選団体及び補助金額を発表	
10月～1月	活動期間	企画にそって活動を実施	実施に当たっては常に指導教員と連絡をとる

事業一覧

団体名 / 企画名	概要	開催日時 / 応募期間	開催場所	対象 / 定員	開催人数
陸上競技部 ホップ♪ステップ ♪ランニング	①コースに分かれての実施 初心者（飛び跳ねるボールを素早くキャッチ、うつ伏せから合図でスタートダッシュ）上級者（ストレッチ、障害物） ②全員で駅伝リレー	① 11/29（土）11：00～13：00 → 11/21（金）締切 ② 12/13（土）11：00～13：00 → 12/5（金）締切 ③ 1/24（土）11：00～13：00 → 1/16（金）締切	3日とも、セヶ浜中学 仮設グラウンド（晴天時）、屋内運動場（雨天時）	小学生 40 名 （各 コー ス 20 名目安）	約 15 名
三浦ゼミ ことばの貯金箱 in セヶ浜	新聞から好きなことばや写真を切り取って箱に集め、その中のものを台紙に貼って発表します。	① 11/30（日）13：00～14：30 → 11/20（木）締切 ② 1/25（日）13：00～14：30 → 12/22（月）締切	①国際村セミナー室 3 ②生涯学習センター和室	小学生 20 名	11 名
黄ゼミ リズムで英語 in セヶ浜	英語に親しむ機会を提供することで、英語学習に対する興味、関心を高めたいと考えております。小学校高学年および中学生はそれに加え、英語学習の基礎となる音と文字のルールである、「フォニックス」を中心とした学習支援を行いたいと考えております。	① 12/14（日）10:00～12：00 13：30～15：30 ② 12/20（土）10:00～ 12：00 13：30～15：30 ③ 1/10（土）10:00～12：00 13：30～15：30 → 11/30（日）締切 受付 AM9：30 PM13：00	①生涯学習センター第 1・2 研修室、多目的ホー ル ②生涯学習センター談 話室か宿泊室 ③生涯学習センター第 1・2 研修室、多目的ホー ル	小 学 1 ～ 中 学 1 年 生 午 前：30 人 午後：30 人	約 15 名
ふぁみりあ 目指せてっぺん!! 冬の運動会	玉入れや障害物競走といった定番の種目をアレンジしたものを参加者の小学生とともに取り組みます。また、協力して競技をこなしていくと最後に隠された謎を解くことが出来ます。	12/21（日）10：00～12：30 → 12/8（月）締切	生涯学習センター屋内 運動場、和室	小学生 50 名	22 名
森ゼミ なりきりわくわく ワークショップ	グループごとにテーマに合わせて、沢山の素材をビニールカップに貼り付け、なりたいものを表現してもらいます。	① 1/17（土）13：00～16：00 ② 1/18（日）13：00～16：00 → 12/1～1/8 締切	両日、生涯学習センター 第 1・2 研修室	① 1 ～ 3 年 生 15 名 ② 4 ～ 6 年生 15 名	約 8 名

活動報告

七ヶ浜町内訪問について

平成 26 年 11 月 12 日 報告者 畑田友美 小林文香

1、件名

七ヶ浜町内訪問について

2、日時

平成 26 年 11 月 12 日水曜日 14 時～ 15 時 20 分

3、場所

七ヶ浜町立向洋中学校、七ヶ浜町立汐見小学校

4、面談者名

七ヶ浜町立向洋中学校 教務主任 寺崎智弘さま
七ヶ浜町立汐見小学校 主幹教諭 坂本 雅紀先生

5、訪問者名

畑田（森ゼミ）、小林（陸上競技部）

6、目的

子ども支援プロジェクト学生企画の広報のため

7、内容

七ヶ浜町立向洋中学校は校長先生がご不在であったため、寺崎さまに口頭で 1 年生を対象とした黄グループの活動について説明を行いました。チラシはすでに配布済みでしたが、ポスターについてはこれから掲示を検討するとのことでした。

七ヶ浜町立汐見小学校は面談者である坂本先生に、企画概要を説明し、各団体の申込方法も再度確認しました。それから大学から郵送したチラシを確認し、各クラスごとに分ける作業を行いました。予備が 6 部となりました。最後にポスターの掲示を依頼し、快く受け入れていただきました。

8、備考

以下、七ヶ浜町立向洋中学校の寺崎さまより今後プロジェクトを続けていくうえでのアドバイスをいただきました。

「もっと教員の協力を仰ぐ必要があるのでは。例えば応募の受付を学校毎にし、学校に提出させるようにすることでより集客が見込めるのではないか。」

ホップ♪ステップ♪ランニング！

平成 26 年 12 月 20 日 報告者 小林 文香

1、事業名および趣旨

事業名：ホップ♪ステップ♪ランニング！

趣旨：子どもたちにスポーツの基本である「走る」という動作の奥深さと単純な運動ではないことをゲーム形式での基礎動作や駅伝競走のプログラムを取り入れ楽しんで感じてもらう。

2、開催団体名

東北福祉大学体育会陸上競技部

3、活動日時

平成 26 年 12 月 13 日土曜日 9 時 30 分～13 時 45 分

4、開催場所

七ヶ浜町生涯学習センター 屋内運動場

5、参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

対象者：七ヶ浜町の児童生徒及び保護者

参加者：14 名（児童 13 名 保護者 1 名）

開催者：11 名（学生：10 名 引率者：1 名）

6、開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

9：30 多賀城駅 集合

9：30～9：45 移動（タクシー）

9：45 七ヶ浜町生涯学習センター到着

9：50 会場準備

10：30 受付

11：00～12：45 陸上教室

12：45 会場撤収

13：15～13：30 移動（タクシー）

13：30 昼食

13：45 多賀城駅 解散

7、活動を通じて学んだこと・課題

今回の活動では、児童たちの意欲的な姿勢のおかげで、我々学生もスムーズに進行することが出来ました。参加者には幼児から小学校低学年が多く見られましたが、コース別に分かれてのプログラムや、幼児も楽しめられるような体制をつくることが出来ました。予定していたプログラムを進行するにあたって、学生たちでアレンジを加えたりして上手く時間調整をし、一人一人が計画に頼らず臨機応変に動けたように感じました。陸上教室を終えて、参加した児童からは「普段こんなに走ることがなかったから楽しかった！」「走るって楽しい！」「また来たい！」「普段しているスポーツとは別に、陸上というスポーツが出来てよかった！」という声が多く聞かれました。保護者の方々からも感謝の言葉をいただき、我々も充実した活動が出来たと実感しました。参加者と一緒になって楽しんで活動を行うことができました。

参加者には楽しんでいただけましたが、多くの課題も見つかりました。まず一つ目に受付体制です。開催時間が近づくと参加者が次々と集まり受付が混み合ってしまう、その間に走りまわってしまう児童もいたため、次回に向けて受付体制を整える必要があると感じました。

二つ目に開催時間です。11 時から 13 時とお昼をまたぐ時間でした。保護者の方からは「お弁当は出るのですか？」「何でこの時間なのだろう？」といった声がありました。また陸上教室の後半は、児童からも「お腹が空いた」という声が聞かれ、集中力もかけてきた子も見られました。私たち学生の開催しやすい時間を設定したのですが、参加者が集まりやすい開催時間の設定の考慮の必要性を感じました。

三つ目に児童との関わり方です。参加者が会場に集まり始めた頃、私たちは参加者である児童たちにどのような関わり方をしていけばいいのか戸惑い、硬くなってしまったところがありました。引率の冠木さんが受付を終

えた児童のもとへ行き、スキンシップをとっている姿を見て、自ら児童たちのもとへ行き積極的な関わり方が大切だと感じました。それから我々も児童との関わりに慣れてきてコミュニケーションがとれるようになってきました。全体の活動を通して見てみると、児童と直接触れ合う学生と、児童を見守っている学生に分かれていました。その中にはなかなか児童とのコミュニケーションがとれなく、引いてしまう学生もいました。児童とは直接スキンシップをとることがコミュニケーションを深めることにつながるように感じましたが、学生全員が積極的な関わりをするのではなく、客観的な視点から児童を見守るという立場の必要性も感じました。

また、休憩時間をもっと配慮すべきでした。プログラムを進めることに夢中になり休憩の回数が足りませんでした。児童たちは楽しさに気をとられ、自分の体調をコントロール出来ていません。そのため休憩時間も走り回ったりして動いていないと落ち着かない様子でした。休憩にストレッチを取り入れるなどの工夫しましたが、どうしても児童たちがおとなしく休憩をとれるのか考える必要があります。

また、プログラムを進行していく中で、学生が説明する言葉が難しかったり、児童が行うには難しい動作があったりと課題も見つかりました。児童に伝わりやすい言葉、説明で興味がわくようなプログラムを組んでいく必要があると感じました。

四つ目に学生同士の連携です。活動までの準備は一部の学生で行ってきたため、ほとんどの学生がこの活動の企画・運営までの内容を把握しておらず、活動日間に活動内容を聞かされ理解しました。これはプロジェクトの代表者の責任でもあります。活動の準備段階から、他の学生の力をかりるなど、情報共有をしていく必要がありました。一部の学生だけで準備するのではなく、なるべく多くの学生と準備に取り掛かっていれば、より活動の趣旨・内容の理解が出来、活動当日の動きもスムーズに理解することが出来たのではないかと感じます。学生同士の連携を大切にしていきたいです。

今回の活動をより良いものにするために、準備からとても時間をかけてきました。学生主体ということで、コンペの準備から始まり、企画・運営、多機関への依頼や連絡・調整などと今までにないことを経験し、運営にい

たるまでの準備の大変さを改めて感じました。学生主体だからこそ自分たちがやりたいことを反映させて新しい企画を作ることが出来る反面、どこまで学生主体なのか、ご協力いただいている七ヶ浜町教育委員会との連携を図ることが難しかったように思えました。活動自体は良いものでしたが、多くの課題が見つかったため、今後に生かしてさらに良いものにしていきたいです。児童たちが楽しんで走る姿を見て、我々も一緒に楽しみ、原点に戻るきっかけとなりました。次回の開催は1月24日となり今年度最後のため、しっかり学生で連携して準備に取り掛かっていきたいです。そしてこの活動を今後も継続していきたいです。

8、活動風景（写真）

- 始めに学生から挨拶・趣旨説明を行った後、参加者に自己紹介をしてもらい、全員でウォーミングアップ
- 初心者コースと上級者コースに分かれてのプログラム



【初心者コース】

- ・リアクションボールを使って敏しょう性を鍛える



学生がボールを投げ、地面から跳ね返ったボールを
キャッチ



【上級者コース】

・ラダートレーニング



・うつぶせドン

うつぶせの状態から合図を出たら、ダッシュ



・ハードルくぐり



・小さな児童にも道具を用いて対応



○休憩中は全員でストレッチ



○クールダウン後の体操



○全員で動き作り（サイドスキップをしている際の写真）



○最後に今回の陸上教室の感想を参加者に聞き、学生から挨拶をして終了



○学生も含めた全員駅伝リレー



ホップ♪ステップ♪ランニング！

平成 27 年 2 月 5 日 報告者 石山 由佳

1、事業名および趣旨

事業名：ホップ♪ステップ♪ランニング！

趣旨：子どもたちにスポーツの基本である「走る」という動作の奥深さと単純な運動ではないことをゲーム形式のプログラムで楽しんでもらう。第二回では第一回の反省を生かし、応用プログラムを取り入れる。

2、開催団体名

東北福祉大学体育会陸上競技部

3、活動日時

平成 27 年 1 月 24 日（土） 10 時 00 分～13 時 00 分

4、開催場所

七ヶ浜町生涯学習センター 屋内運動場

5、参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

対象者：七ヶ浜町の児童生徒及び保護者

参加者：11 名（児童 11 名）

開催者：11 名（学生：10 名 引率者：1 名）

6、開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

9：30 多賀城駅 集合

9：40～10：00 移動（タクシー）

9：50 七ヶ浜町生涯学習センター到着

10：00 会場準備

10：45 受付

11：00～12：50 陸上教室

12：55 会場撤収

13：15～13：30 移動（タクシー）

13：30 昼食

13：45 多賀城駅 解散

7、活動を通じて学んだこと・課題

前回 12 月 13 日の活動を終え、課題や継続すべき点をメンバーで話し合い、今回の活動に臨みました。準備から本活動まで全て学生が主体となり行われた活動でしたが、前回の課題や反省点を生かし、より良い活動が出来たと思います。参加児童は、全員が前回に引き続いての参加であり、全体の流れもスムーズだったように感じました。前回同様、コース別に分かれたプログラムを行いましたが、「もっと本格的な技術を教えてほしい」といった声を取り入れ、今回は上級者、初級者コースともに更にレベルアップしたプログラムを企画しました。事前の計画に沿いつつ、参加児童の状態や時間を配慮し、全員が臨機応変に行動することが出来たように思います。終始、児童や保護者、そして学生の笑顔が溢れる活動になったのではないかと思います。

前回の課題を踏まえて、改善した点は 3 点です。1 つめは、受付体制です。前はスムーズな受付、参加者の把握が出来ませんでした。前のメンバーのアドバイスを取り入れ、入り口に分かりやすい受け付けを設置。また受付の際、休憩中にしっかり水分を補給していただくためのドリンクの配布と、気温が低い運動場で子どもを見守ってくださるお母さん方には使い捨てカイロの配布も行いました。一つ一つの小さな配慮が参加者の笑顔へ繋がったように思います。

2 つめは、児童との関わり方です。前は第 1 回の開催ということもあり、児童はもちろん、学生にも戸惑いや緊張があったように思います。今回は、会場に到着した児童へ積極的にコミュニケーションを図り、本活動の陸上教室に入る前段階でいくらか打ち解けることが出来ていたように感じました。また、プログラムを進行していく中では、前回の課題を生かし、一つ一つ丁寧に、児童に伝わりやすい言葉を選んで説明を行うことを心掛けました。第 2 回メンバーのテーマを「明るく、元気良く」とし、学生が積極的に声を出し、盛り上げることができたように思います。

3つめは、学生同士の連携についてです。今回は、活動を行うメンバーのみならず、前回のメンバーともミーティングを行い、活動をより良いものにするために連携を図ることができました。学生代表者の小林が主軸となり、学生間での意見の交換や、情報の共有を大切にしてきました。それにより、チーム全体を巻き込んで協力し合うプロジェクトが出来ました。

第1回の課題を改善すべく取り組んできた第2回の活動でしたが、新たな学びや課題も見つかりました。第2回参加学生より2つのことが挙げられました。1つめは、前回よりレベルアップしたプログラムを行ったことによる課題です。普段のトレーニングにより学生は身体で覚えているトレーニングに対し、言葉で伝える難しさを感じていました。例としては、速い動きを意識させようとするあまり、児童たちの動きが正確性に欠けてしまうといった点です。ここでは、学生の型にはまったトレーニングではなく、各児童の能力に応じた対応を行う必要があると感じました。

2つめは、保育課程の学生より挙げた細かな配慮についてです。小学生や幼稚園児とコミュニケーションを取る際には、その子と目線を合わせて会話を行うことが大切だという点を学びました。活動を振り返ると、児童たちは説明を行う学生を見上げる場面が多く見られました。個別の対応では学生が膝立ちになるなど、目線を合わせてコミュニケーションを取っている場面も見受けられ、その際は児童と上手にコミュニケーションがとれていたように感じます。普段からこういった細かな配慮を大切にしていく必要があります。また、パワー溢れる児童の上手な休憩の取り方、遊びの要素を取り入れつつ、本格的な陸上競技へと繋げていく工夫など、まだまだ探っていく必要があることを実感しました。

今回の陸上教室を終えて、参加した児童からは「前より楽しかった!」「走ることはただ息が苦しくなるだけじゃないね!」「駅伝が一番面白かった!」「時間があっという間だったー!」と多くの笑顔を見ることができました。お別れの際には、保護者の方々にも前回同様、感謝の言葉をいただきました。そして、私たち学生側も児童たちの笑顔や保護者の方々の温かい言葉に、多くの元気やパワーをいただいたのです。

このプロジェクトを開催するにあたり、私たち陸上競

技部の目的は「七ヶ浜町内の方々と交流を図り、走ることの楽しさや喜びを共感する」というものでした。学生が主体となり、行ってきたこのプロジェクトは、日々試行錯誤し、悩みながらの活動でしたが、参加してくださった皆さんの笑顔は目的の達成へ近づいたと信じています。最後に、これはタクシーで七ヶ浜町を移動する際の運転手さんとの一コマです。「震災後は多くのボランティアが駆け付けていた。しかし、最近のボランティアは珍しいよ。ありがとう。」私たちが出来たことは、大好きな陸上競技を通して七ヶ浜町内の方々と時間と笑顔を共有したこと。学生に出来ることは数少なく、小さなボランティアではありますが、学んだことはたくさんあります。これからも大切に継続していきたいと思います。

8、活動風景（写真）

○全員でウォーミングアップ（鬼ごっこ）



○上級者、初級者コースに分かれてのプログラム
《上級者コース》

◎サーキットトレーニング（腕立て伏せ）



◎ラダートレーニング



◎思いっきり体を動かした 1 日でした



《初級者コース》

◎カラフルコーンタッチ



◎ラダーじゃんけん



○全員でクールダウン



最後に、今年度のプロジェクトを開催するにあたり、ご協力いただいた七ヶ浜町民の皆さん、七ヶ浜町教育委員会様、東北福祉大学子ども支援プロジェクト事業の皆さん、本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

ことばの貯金箱 in 七ヶ浜 活動報告

平成 26 年 12 月 8 日 報告者 赤澤活人

1. 事業名及び趣旨

事業名：ことばの貯金箱 in 七ヶ浜

趣旨：ことばの貯金箱（NIE 活動）を通して、子どもたちに新聞への興味関心を持ってもらうことや、読解力、表現力を向上させること。また、活動を通じた心のケアをすること。

2. 開催団体名

子ども教育学科三浦ゼミ

3. 活動日時

平成 26 年 11 月 30 日（日）11：20～17：00

4. 開催場所

七ヶ浜国際村

5. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学生及びその保護者

参加者数：5 名（小学生 4 名 保護者 1 名）

開催者数：9 名（学生 7 名 教員 2 名）

6. 開催内容 当日の日程

11:20 下馬駅前 集合

11:20~12:20 移動（ぐるりんこ）

12:20~12:50 到着、会場設営、昼食

12:50~13:00 受付

13:00~13:15 開始、ことばの貯金箱の説明

13:15~14:20 作成

14:20~15:00 発表、終了

15:00~15:30 撤収作業

15:30 完全撤収

16:00~16:45 移動（ぐるりんこ）

16:45 下馬駅前 解散

7. 活動報告

7.1 会場設営の様子 [セミナー室 3]



- ・会場は 6 人がけのテーブルを二つ合わせたものを 2 セットと、ホワイトボードを用意した。合わせたテーブルにそれぞれ 3 人ずつ座ってもらい活動しました。

7.2 「ことばの貯金箱 in 七ヶ浜」の活動の様子

① 「ことばの貯金箱の活動」の説明



- ・合言葉である「ちゃり〜ん」や、誰かが切り取ったものを全員で「いいね！」と評価しあうといった説明がされる。また、活動を通して語彙を増やせること、それによって表現力が広がることの素晴らしさについての説明もあった。そして、活動を通しての

目標が「ことばの億万長者」（たくさん言葉を知っている人）であることについても説明された。

②新聞から好きな言葉や写真を切り抜いたり、台紙に貼り付ける活動



- ・合言葉である「ちゃり〜ん」や、切り取った言葉や写真を全員で評価しあう「いいね！」の声が会場に響き渡っていた。



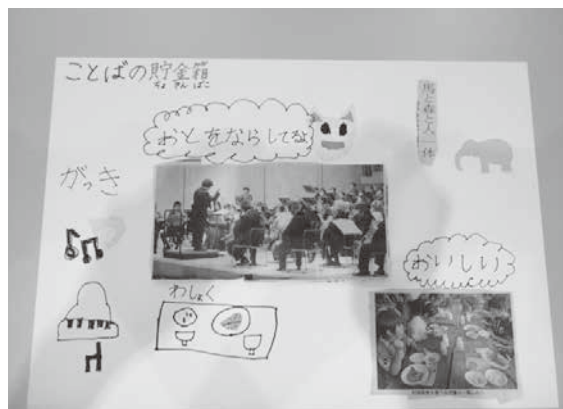
- ・絵や言葉を書き加えるなど、発想の広がりが見て取れる

③発表

- ・作品その 1（高学年児童の作品…復興への思いを込めている）



- ・作品その 2（低学年児童の作品…習った漢字を見つけて作成）



- ・作品（全員）



8. 参加者の感想

○高学年男子

- ・普段の生活なにげなく見ていた新聞が、この言葉をよく考えてみると、いろいろなことが学べました。これからは、こういうくふうをいかして今後の生活に取り組みたいと思います。このようなイベントをやってくれてありがとうございます。
- ・今日はこの「ことばの貯金箱」のイベントに参加させていただきまことにありがとうございます。このイベントはやっているうちに自然と心が暖くなる、最高のイベントだと思います。大学生のみなさんとも仲良くなれたし、とても、すてきな企画だと思います。このイベントがこれからも続いたらいいな…と思います。本当にありがとうございます！

○低学年女子

- ・漢字が分かったのでよかった。楽しかった。

○低学年男子

- ・チャリンがことばや絵を切り取ったことがとても楽しかったです。
- ・難しかったけど、出来てよかったです。

○教員の感想

- ・渡辺裕子先生：とても質の良い活動である。子どもたちが震災を乗り越えて前向きに生活しているのが活動中のことばや姿から伝わってきた。企画、準備、実行と生徒にとっては貴重な体験の場であり、将来教師になったときに必ず生きてくる。この体験を大事にして欲しい。
- ・三浦和美先生：渡辺先生のアドバイスを頂きながら企画を進めてきた。子どもたちにも保護者にも心に残る活動となったのも、今回プリンセスプリンセスの支援の賜物と心より感謝している。子どもたちからは「とてもいいイベントなので続けて欲しい」という声もあるため、息の長い支援活動となるようにしたいと考えた。小学校の教員を目指す学生には実習の場ともなる。

9. 活動を通じて学んだこと、課題

ことばの貯金箱という企画を実施するにあたり、私達は準備段階から開催に至るまで数多くの課題にぶつかりながら、それを乗り越えてきました。その中で学んだも

のの一つが、情報共有の重要性です。三浦ゼミ内で情報共有がうまく行われなかった結果、1人に業務が集まってしまいました。そのため、企画全体に関してよく議論が行われないままの実施となってしまいました。さらに、その人が事情で欠席になった時、対応に手間がかかってしまいました。これらのことから、企画を実施する上での情報共有の大切さを学ぶことができました。第二に学んだことは、児童理解についてです。今回のことばの貯金箱の活動で子どもたちをサポートする中で、子どもたちの感じ方や表現などについて多く知ることが出来ました。これは、教員を目指す私達にとって大きな収穫でした。また、子どものサポートや作っていた作品やその発表から、子どもたちの震災に対する反応を見ることができました。具体的には、震災に関係することを作品に取り上げた子どもが2人、全く触れていない子どもが2人という結果でした。震災に関係することを取り上げた子どもの内、1人(Aとする)は津波の被害を写した写真を作品のやや中央に貼り付けていました。このことに関して、Aは特に理由を話しませんでした。意図的なものではない可能性もありますが、津波の被害の状況に対して極度な恐怖や抵抗を感じているような様子は見られませんでした。一方でもう一人の方(Bとする)は、「震災で落ち込んでいる東北を元気にしたい」など、震災から立ち直るという震災に対する前向きな姿勢が見られました。また、全く触れていない子どもに関しても、早く忘れたいなど後ろ向きな発言は見られませんでした。以上のことから、子どもは震災への考え方に関して前向きに変化しつつあると言えるでしょう。しかし、今回参加してくれた子どもが被災した子ども全員の代表という訳ではないので、今後ことばの貯金箱を進める中で子どもについての震災について観察、研究していきたいと考えます。

イベントとして、大いに盛り上がった企画でしたが、課題は多く残りました。第一に情報共有を確実に行うということです。上述の通り、企画を進める中で情報が共有されなかったことにより大変苦労しました。今後は知り得た情報はいち早く共有する他、自らが率先して情報共有を呼びかけるなどゼミ生全体で意識を高めていかなくてはならないと感じました。

第二に、応募方法の見直し及び統一です。開催当日、会場にこちらが把握していない参加者が来てしまうとい

う事態が発生しました。その参加者は FAX で応募したと言いますが、こちらは受け取ることが出来ませんでした。これは、FAX という応募方法がやや確実性に欠けるからだと思います。紙媒体と電子メールという二つの異なるものの参加者の管理は難しいので、メールでのやり取りの方が確実と思われます。次回開催時は、FAX とメールという形ではなく、どちらか一本に募集方法を統一したいと思います。こちらが応募を把握できなかったなどの事態が絶対に起こらないようにしなくてはなりません。

第三にイベントの内容の再構築です。今回、イベントを開催した時、1 人がカメラマンに徹していたため、子どもとのふれあいは皆無でした。また、参加者の 1 人 1 人に学生 1 人がついてサポートをしたことは良かったのですが、その子だけにつきっきりになってしまうことがありました。このように、イベント内容に改良を加えるべき点がありました。これらの点を改善していこうと考

えます。

第四に、被災した子どもたちとどのように接したり、支援していくかという問題です。これは、イベントを続けていく中で学んでいくべきことであるとも考えられます。しかし、今後イベントを続ける中で、しかも、子どもと接する中で重要になってくることであるとも考えられます。実際、子どもに寄り添いながら作品作りをサポートする中でどのようにすればいいかわからない場面が多々ありました。被災地でイベントを開催するにあたり、どのようなサポートをすればいいのか、また自分たちができる支援とはどのようなものであるか、これらの内容を考え、統一してイベントを行いたいです。

以上が私達がことばの貯金箱を実施するにあたり、学んだこと、そして次回に向けての課題です。学んだことはこれからの活動に活かし、また課題は確実に解決し、今後もこの活動を続けていきたいです。

ことばの貯金箱 in 七ヶ浜 活動報告

平成 27 年 2 月 8 日 報告者 熊谷 健吾

1. 事業名及び趣旨

事業名：ことばの貯金箱 in 七ヶ浜

趣旨：ことばの貯金箱（NIE 活動）を通して、子どもたちに新聞への興味関心を持ってもらうことや、読解力、表現力を向上させること。また、活動を通じた心のケアをすること。

2. 開催団体名

子ども教育学科三浦ゼミ

3. 活動日時

平成 27 年 1 月 25 日（日）11：20 ～ 16：00

4. 開催場所

七ヶ浜生涯学習センター（2 階 和室）

5. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学生

参加者数：1 名（小学生 1 名）

開催者数：11 名（学生 10 名 教員 1 名）

6. 開催内容 当日の日程

11:20 下馬駅前 集合
11:42~12:06 移動（ぐるりんこ）
12:06~12:50 到着、会場設営、昼食
12:50~13:00 受付
13:10~13:15 開始、ことばの貯金箱の説明
13:15~14:15 作成
14:15~15:00 発表、終了
15:00~15:30 撤収作業及び反省会
16:00 完全撤収
16:11~16:36 移動（ぐるりんこ）
16:36 下馬駅前 解散

7. 活動報告

7.1 会場設営の様子 [和室]



- ・会場は 6 人がけのテーブルを 2 セット用意し活動にあたった。

7.2 「ことばの貯金箱 in 七ヶ浜」の活動の様子

④「ことばの貯金箱の活動」の説明

- ・今回の参加児童は前回も参加してくれた児童なので、活動の手順や合言葉である「ちゃり〜ん」、誰かが切り取ったものを全員で「いいね!」と評価しあうといった決まりごとの再確認をおこなった。

⑤新聞から好きな言葉や写真を切り抜き、台紙に貼り付ける活動



- ・たくさんの言葉や絵を見つけ、切り取っていた。



- ・見つけた言葉や絵の発表の様子。この活動の合言葉である「ちゃり〜ん」や、切り取った言葉や写真を全員で評価しあう「いいね！」の聲が会場に響き渡っていた。

③作品の発表



- ・どのような思いで作品を制作したのか、参加児童だけでなく、三浦先生、ゼミ生も発表し合った。参加児童の保護者の方も同席した。



- ・今回の活動もたくさんの「ことば」で溢れる活動となった。

8. 参加者の感想

○低学年男子

- ・新聞で絵や写真を切って貼ったのがおもしろかったです。

○教員の感想

- ・三浦和美先生：今回は2回目のイベントでしたが、渡辺先生がご都合のため参加できず、学生のみのもになりました。当日までの準備や当日の進行などもしっかり自分たちでできていて、このプログラムの良さをとても感じました。一名の参加でしたが、これからも継続することで七ヶ浜町の復興に寄与できると思いました。

○ゼミ生の感想

- ・小林茉央：参加した児童の様子を見ていて、時間がたつにつれて楽しそうに活動しているのが嬉しかったです。小学生新聞にはカラーの写真がたくさんあったので、使いやすそうでした。学びの多い一日となりました。
- ・藤泉沙彩：今回の活動は、自分たちが中心となって企画運営しました。最後までトラブルが尽きませんでしたが、児童が楽しそうにしていたり、「心を大切に」と書き込んでいりしているのを見て、NIEの活動の素晴らしさを実感しました。
- ・杉本安美：作品はどれもすばらしいものでした。選んだことばや写真・絵で何を考えているか、気持ちが見えてくることを実感しました。“気持ちは態度に出る”これを踏まえて子どもを理解していきたいです。
- ・松本康平：自分の構成が確かめられた良い機会だった。前回の子たちの様子を思い浮かべながら、自分も今回必死に頑張ったが、やはり子どもの持つ柔軟な発想にはかなわず、作品は児童らしさがよく現れた素晴らしい作品になっていて、楽しんでもらえて、とても楽しかった。
- ・千葉望花：今回の活動を通して、今の自分が何を考えているか、整理がついた。自分の心の中に不安

と、これからの目標と希望がつのっているなと思った。そして、再生へ心ひとつにということばはいつになってもはずせないことばである。

- ・村上笑：前は子どもたちがやっているところを見ているだけだったけど、自分が今、何を考えているのが明確になった。他の人と違った部分に目がいて、同じものがなくて楽しかった。
- ・戸野塚彩：直感で切り取ったものを集めると、自然といろいろな発想ができてきて、想像以上に楽しい活動ができた。
- ・小保内真知：実際活動してみて、自分が思っていることに関しての記事を選んでしまうのだと思った。「言葉」に惹かれるという意味がこの活動を通してよくわかった。

9. 活動を通じて学んだこと、課題

今回はことばの貯金箱 in 七ヶ浜の2回目の活動となり、初回の活動よりもスムーズな企画運営を行うことが出来ました。今回は参加希望者5名に対し、当日は1名のみ参加となってしまいましたが、前回のことばの貯金箱にも参加してくれた児童でしたので、活動の説明に当てる時間を若干省き、製作する時間を少し長めに確保しました。参加児童の活動の様子を見ていて感じたことは、前回の活動よりもたくさんの言葉や写真を新聞から見つけることが出来ていた、ということです。また、「心を大切に」という自分の言葉を作品に書き込んでいるのを見て、言葉の豊かさ、大切さに気づいてくれたものと考えます。このような参加児童の成長から、NIE活動は参加者の心の成長や言語能力の向上において有用的なものであるということを実感しました。そして今回は2回目の活動ということで、ほとんどを学生主体で企画運営をおこないましたが、ゼミ生全員がそれぞれ担う役割を遂行することの重要性や達成感をあらためて学ぶことが出来ました。これからは継続的な活動を行っていきたいと考えます。

前回の活動を通しての課題点として、「情報共有の重要性」、「応募方法の見直し及び統一」が企画運営における課題点として挙がっていたため、今回の企画においてさまざまな改善策を考え実行しましたが、やはり完璧な企

画運営とはいかず、いくつか新たな課題点が浮き彫りとなりました。一つ目は、まだまだ情報共有に甘さがあったということです。前はゼミ内で情報共有がうまく行われなかった結果、ゼミ長1人に業務が集まってしまい、企画全体に関してよく議論が行われないままの実施となってしまいました。今回に関しては、業務集中は生じませんでしたが、それぞれが担った仕事はどこまで進んでいるかなどの情報共有を怠ってしまう場面が見られました。その結果として作業がどこまで進んだのか、企画を行う準備が完了しているのかが曖昧な状態で当日を迎えてしまいました。最終的にはすべての準備が完了していることがわかったのですが、これは引き続き今後の課題点となりました。

二つ目は、企画実施日の見直しと、実施日前の参加希望者への確認の連絡を取ることが課題として挙がりました。第一回目の活動は年を越す前に行い、その日の活動の最後に次回、つまり今回の活動の実施日を予告しました。また、第一回目の参加児童及び、新しい参加希望者(計5名)のご自宅に年賀状として「第2回ことばの貯金箱」の概要についてはがきを送ったのですが、当日参加した児童はわずか1名だけでした。この理由として挙がったのが「企画実施日が年をまたいで設定されたこと」、「前日に再度確認を取らなかったこと」です。その改善案として前者は、次回以降の企画は年をまたいだり、期間を空けすぎたりせずに企画を実施する、という案が出されました。後者に関しては、当日になって参加希望をしていて会場に来なかった児童の自宅へ電話した(連絡を試みた児童宅はすべて留守番電話へと繋がり、確認を取ることが出来ませんでした。)のですが、次回以降は実施日の3日前くらいにもう一度参加するかの確認を取る必要があるという案が出ました。これらの課題解決が今後の活動をおこなっていく上でより充実した企画運営へと繋がるものであると考えていますので、ゼミ生一同これからも精進してまいります。

しかしそんな中、今回の活動から学んだこともあります。それは子どもの持つ柔軟な発想です。今回は参加者が少なかったため、急遽ゼミ生もことばの貯金箱の活動を児童と一緒に実践することとなりました。それを通して学んだことは、私たちは、「少なからず先を見越して作品を制作する」のに対して、児童は「とにかく言葉を集

め、後から言葉を厳選し作品を制作する」ということです。私たちの場合は、少なからず先を見越して言葉を選ぶ傾向により、作品も若干一方通行なものとなりました。しかし児童の場合、さまざまな言葉を集めた後にどのような作品にするかを考えていたため、ゼミ生の作品よりもずっと自由で独創的かつ多面的な作品となりました。これは子どもの持つ柔軟性が示された場面であったと考えると同時に、教員として伸ばしていきたいと思う能力であると、ゼミ生の何人かも感想として残しています。もう一点は、「気持ちや考えは言葉に表れる」ということです。これは「ことばの貯金箱」の活動のおもしろさです。同時にこれは子どもを理解する上でも大切にしなければならぬことであると考えます。「なぜこの言葉を選んだのか」というのを最後の発表で自分の言葉で紹介する、ということを企画の中でおこなっていますが、同じ言葉でも人によって使い方や捉え方が違う、という場面が多く見られました。それはつまり言葉はいい意味でも悪い意味でも、さまざまな表情を持っている、ということであると思います。さらに言えば、気持ちは言葉に表れる、ということであると思いますので、これを理解すること

は教員になったときに、なぜこの子どもはこの言葉を使ったのか、真意は何か、など、子どもを理解しようとすることに繋がるのではないかと考えます。

以上が、私たちがことばの貯金箱を実施するにあたり、学んだこと、そして次回に向けての課題です。学んだことはこれからの活動に活かし、また課題は確実に解決し、今後もこの活動を続けていきたいです。

また、プロジェクトの企画を例えば「子ども祭り」のようなイベントにして、各ブースで展開するなどの方法も考えられるのではないかという意見が出ました。今後の支援の在り方についても検討していくことで復興支援の継続が図れるのではないかと考えました。

最後になりましたが、この度「プリンセスプリンセス基金」により七ヶ浜町の子どもたちの支援の一環として本企画を計画・実施できましたことを心より御礼申し上げます。

また、本企画の実施に当たり、親身のご指導を賜りました東北福祉大学の先生方・職員の皆様にもこの場をお借りして御礼申し上げます。

リズムで英語 in 七ヶ浜 活動報告

平成 26 年 12 月 14 日 ファングループ 代表 平野裕司 担当教員 黄 淵熙 報告者 柳村 早紀

1 事業名及び趣旨

事業名：リズムで英語 in 七ヶ浜

趣旨：英語に親しむ機会を提供することで、英語学習に対する興味・関心を高めたいと考えて企画しました。小学校中学年までは英語学習の導入として、音楽やゲームを使った学習動機を高めるための活動を、小学校高学年および中学生はそれに加え、英語学習の基礎となる音と文字のルールである「フォニックス」を中心とした学習支援を行いたいと考えていました。

2. 開催団体名

黄グループ

3. 活動日時

平成 26 年 12 月 14 日（日）

10：00～12：00 13：00～15：00

4. 開催場所

生涯学習センター

5. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学校 1 年生から中学校 1 年生

参加者数：16 人（小学生 15 人 中学生 1 人）

開催者数：16 人（学生 15 人 教員 1 人）

6. 開催内容 当日の日程

9：00 生涯学習センター 集合

8：00～9：00 移動（宮城県交通バス）

9：00～9：30 到着、会場設営

9：30～10：00 受付

10：00～12：20 開始、自己紹介ゲーム、スクエアステップ、松ぼっくりツリー作り 説明

12：30～13：00 終了、昼食、受付

13：00～15：00 開始、自己紹介ゲーム、スクエアステップ、松ぼっくりツリー作り 説明

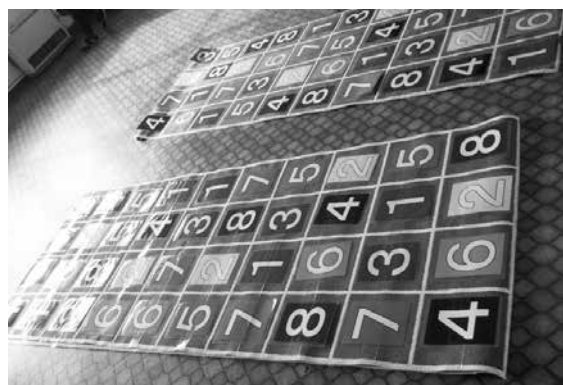
15：00 終了

15：00～15：30 撤収作業

15：30 生涯学習センター 解散

7. 活動報告

7.1 会場設営の様子 [研修室 1・2]



スクエアステップ準備

- ・研修室 1、2 をパーティションで 2 つに仕切り、一方では活動、一方では準備というように運営を行った。準備待ちの時間を作らずスムーズに活動を行うことができた。

7.2 「リズムで英語 in セーバ」の活動の様子



- ・導入としてまず、自己紹介ゲームを行った。最初は緊張していた子ども達も徐々に慣れてきた様子であった。元気に英語で自己紹介を行っていたり、学生だけでなく自分たちでグループをつくりビンゴを完成させたりと積極的な活動が見られた。

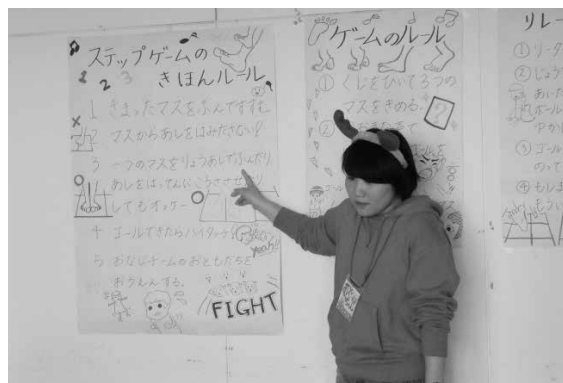
① English ソング（数について）と絵本読み聞かせ（色について）



本を使い色の勉強

- ・English ソングでは、1～7までの数字を英語でいい、言えるようになったらみんなで輪になり音楽をかけ「1・2・3・4・5・6・7」と歌いながら「3」でしゃがみ「5」でジャンプするという活動を行った。みんな楽しく活動していた。

② 「スクエアステップの活動」の説明



- ・スクエアステップをポスターと実際にマットで行い説明。決まったマスで踏む。マスからはみ出さない。などの基本ルールからリレーの説明を行い実際に活動した。

③ 実際の活動

- ・ルールを理解し、グループを決め活動。自分のグループを応援することで団結力も高まった。一生懸命にステップを踏み、終われば友達とハイタッチをして笑顔がたくさん見られた。どのグループも勝ちたいという思いが伝わるものであった。



④ツリー作り



- ・読み聞かせの時に覚えた色と、English ソングで覚えた数を使いツリー作りを行った。サンタは英語しか話せないという設定のもと「Blue star three please.」と言えらるという風にして松ぼっくりでツリーを作った。みんなサンタから好きなものをもらい自分だけのツリーを作っていた。

8. 参加者の感想

○ 低学年男子

- ・ツリーを作るところが楽しかった。数字や色を勉強してそれを使ってサンタさんからプレゼントをもらえたので嬉しかった。マットもチームで勝負できて楽しかったです。内容は簡単でした。

○ 低学年女子

- ・お兄さんお姉さんが面白かったです。ツリーを作るのがとても楽しかった。また、早く活動したいです。

9. 活動を通じて学んだこと、課題

今回の活動を企画するうえで、多くの課題にぶつかりました。4年生と3年生での意見のすれ違いや情報共有不足による勘違いがあり、活動ギリギリまで話し合いを行い、「安全面に十分配慮し、1回やってみて子どもをみないことには始まらない。」ということで第1回目を行いました。

当日は問題もなくスムーズに進めることができました。しかし、活動を通し学んだことは、「七ヶ浜の子ども達は英語に触れる機会が少ない」と認識していたため、参加した子どもたちは思ったよりも簡単に出来てしまったことが自分達は甘くみていたと反省点で残りました。参加

児童からは「思ったよりも簡単だった。」という感想をもらいました。また、English ソングでは数字を 1～7 までしか教えませんでした、10 からが分からないという子どももいて、自分たちの準備が足りなかったこと、七ヶ浜の子ども達の英語の学習状況に関する情報が全く入っていなかったことから、事前に保護者から子どもの英語の学習状況を事前に聞き、内容を決めるべきであったと認識させられた活動でもありました。

良かった点では子ども達が楽しんでいたということが 1 番に挙げられました。その他では、子どもが積極的に話してくれて、最後にまた来たいと言ってくれた子ども達もいたこと、スタッフもあたふたしないで予定外のことであっても対応できたことなどが挙げられます。元気な子どもと静かな子どもがいて話す場面では元気な子が目立ち静かな子が目立たなかったのですが、ツリーの活動を通してその子たちも積極的に参加し自分らしさを出せていたのではないかと、ということが挙げられました。

また、私たちが普段から個別学習指導で行っている「ご褒美制度」を活用しました。子どもが早く着席をした時

や英語で発言をした時にご褒美シールを渡し、最後にシールの枚数に応じて子どもにプレゼント（お菓子）をサンタクロースが渡すというものです。この活動により子どもは常に良いことをしてシールを貰おうとするので会の進行の上でも良い効果が生まれます。また、保護者にご褒美制度を説明すると「家でもやってみよう」という発言を聞くことができました。

悪かった点では、子ども到着時刻が少しずれ、最初の準備がバタバタした。足を怪我していた子がいたので変わりになる活動を考えておけば良かった。スクエアステップのルールの確認不足（いけるところまで飛んだりしていたので）バランスボールで座っている人を見るのと進むという 2 つの動作が難しい。数字赤とオレンジの区別がつかない（1・5）内容をもう少し難しくしたほうが良かった。英語が少ない。ということが挙げられました。

良かった点はそのまま活かし、悪かった点をこれからの活動で改善していき初回よりもよりよいものを作っていきたいと思っています。

リズムで英語 in 七ヶ浜 活動報告

平成 26 年 12 月 20 日 ファングループ 代表 平野裕司 担当教員 黄 淵熙 報告者 柳村 早紀

1. 事業名及び趣旨

事業名：リズムで英語 in 七ヶ浜

趣旨：英語に親しむ機会を提供することで、英語学習に対する興味・関心を高めたいと考えて企画しました。小学校中学年までの子どもに対しては英語学習の導入として、音楽やゲームを使った学習動機を高めるための活動を行い、小学校高学年および中学生にはそれに加えて、英語学習の基礎となる音と文字のルールである「フォニックス」を中心とした学習支援を行いたいと考えました。

2. 開催団体名

黄グループ

3. 活動日時

平成 26 年 12 月 20 日（土）

10：00～12：00 13：00～15：00

4. 開催場所

生涯学習センター

5. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学校 1 年生から中学校 1 年生

参加者数：16 人（小学生 15 人 中学生 1 人）

開催者数：16 人（学生 15 人 教員 1 人）

6. 開催内容 当日の日程

9：00 生涯学習センター 集合

8：00～9：00 移動（宮城県交通バス）

9：00～9：30 到着、会場設営

9：30～10：00

受付（How the Grinch Stole Christmas DVD 鑑賞）※1

10：00～12：20

開始、ゲーム、スクエアステップ、フォニックス、説明

12：30～13：00 終了、昼食、午後の部受付

13：00～15：00 開始、ゲーム、スクエアステップ、フォニックス、説明

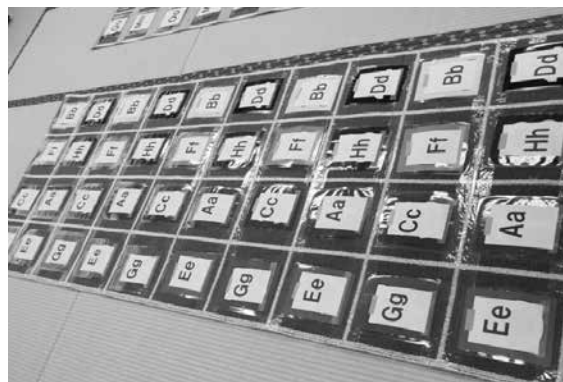
15：00 終了

15：00～15：30 撤収作業

15：30 生涯学習センター 解散

7. 活動報告

7.1 会場設営の様子〔宿泊室 1・2〕



スクエアステップ準備

- ・第 1 回のスクエアステップでは数字を使ってステップを踏みましたが、第 2 回のスクエアステップではアルファベットを使ってステップを踏むように準備を行った。
- ・第 1 回では研修室 1・2 を使用したが、会場の調整上、第 2 回は宿泊室 1・2 を使用して行った。襖で 2 つに仕切り、一方では活動、一方では準備というように運営を行った。
- ・準備待ちの時間を作らないでスムーズに活動を行うことができた。

7.2 「リズムで英語 in センター」の活動の様子



- ・受付の待ち時間に「How the Grinch Stole Christmas」のDVD（英語バージョン）を上映した。英語だったが、みんな真剣に見ていた。また、第1回では緊張していた子ども達も徐々に慣れてきた様子であった。

① English ソング



- ・英語の歌を使って指定された場所に手を当てるゲームを行った。

② 「スクエアステップの活動」の説明



- ・スクエアステップをポスターとマットを使用しながら説明した。決まったマス（マス）を踏むこと、マスからはみ出さないことなどの基本ルールとリレーの説明を行った。

③ スクエアステップの活動

ルールを理解し、グループを決め活動。自分のグループを応援することで団結力も高まった。一生懸命にステップを踏み、終われば友達とハイタッチをするなど、笑顔がたくさん見られた。どのグループも勝ちたいという思いが伝わるものであった。第1回の活動ではジャンプしてしまうという予想外の行動もあり大変であったが、第2回の活動では最初のルール説明を丁寧に行うことで、ルールを理解してもらうことができた。



④ フォニックス

※第1回の活動時に英語を話せる子どもが何人かいたため、子どもと保護者から英語の学習状況を確認し、

英語の学習経験が浅い子どもと、学習経験がある子どもとに分けた。分け方は第1回の活動の様子（帰国子女の参加も2名、英語教室に週3回通っている子ども1名）のほか、pとqの区別ができるかななどを受付の際に確認することで行った。（シールを名札に貼り移動に際わかりやすくした。）

[英語経験浅い子]

a～mの単語を使つてのカルタ遊び（Do you like ～のやり取りを用いた遊び）を行いました。通常、カルタは読まれた絵札を取るものですが、今回は、やり取りを行いながらカルタ遊びをします。子どもが、サンタに Do you like cat? と、好きな動物かを尋ねます。サンタが Yes, I do. と言えば、カードを取ることができますが、No, I don't. では取ることができません。何度も単語を言うこと、楽しみながらやり取りをしてゲームをすることを目的にしています。

[英語経験有りの子]

cat mat hat bat を使つての単語遊びをします。catの単語を見せ、cの音、aの音と確認し、この単語は、みんなの知っているキャットであると確認します。そのように、bat 等も行い、これらの単語には同じ部分があることを知らせます。それに気づいたら、そのatはアットと読み、前の所を入れ換えると色んな単語になることを知らせます。（中学生には同じ部分を探しながら単語を覚えると覚えやすいことを話しておきます）次に前置詞を使った遊びをし、この単語でonやunderを使つて遊びます。

「cat is under the table. hat is on the cat, bat is under the cat, cat is on the mat」

とサンタに言われたら、その英語が示してある所へ行つて、catのカードをグループで協力して探したり、その英語の絵を協力して書いたりします。



8. 参加者の感想

○ 低学年男子

・頑張ったらご褒美のシールを貰えて、帰る時にご褒美のお菓子を貰えてよかった。1月の時はもっとシールを貰えるように頑張りたい。

○ 中学年女子

・お兄さんお姉さんが面白かったです。久しぶりに英語をたくさん勉強できて楽しかった。また、早く活動したいです。

○ 中学生男子

・cat mat hat batの説明を聞き、単語を覚えやすいと思った。他の単語のやり方も勉強したい。

9. 活動を通じて学んだこと、課題

第1回の活動から6日後の実施でした。第1回の活動で参加者のレベルを知ることができたので、それをもとに第2回の活動に向けて準備を行いました。

スクエアステップでは第1回での活動で子どもにスク

エアステップのルールが完璧に入っていないという反省点や子どもが慣れてきてふざけることを予想し、最初子どもにルールを教えました。また、教えた後はルールを守ってできた子どもにご褒美シールを渡しました。このような褒美システムを活用して行うことで、良いこと、悪いことの区別をつけることができるようになったと考えます。

フォニックスの活動では英語の経験が浅い子どもと、経験がある子どもを分けたことにより、子どもたちの発言回数は増えました。分け方は第 1 回の活動の様子（帰国子女の参加も 2 名、英語教室に週 3 回通っている子ども 1 名）のほか、p と q の区別ができるのかなどを受付の際確認し行いました。（シールを名札に貼り移動に際わかりやすくした。）

実際のフォニックスの活動では子どもたちがそれぞれのレベルにあった学習をすることで、中学 1 年生（英語経験者）の子どもは、cat の単語をみせ、c の音、a の音と確認し、この単語は、みんなの知っているキャットであると確認。そのように、bat 等も行い、これらの単語には同じ部分があることを知らせます。それに気づいたら、その at はアットと読み、前の所を入れ換えると色々な単語になることを教えると「あっ！こうすれば覚えるのが少なくて済む。使ってみたい」との発言を聞くことができました。

小学 2 年生（英語経験浅い）の子どもは、最初あまり話していませんでしたが次第に話すようになり、フォニックスでも積極的に参加する様子が見られた。最後帰り保護

者に会うと「楽しかった！」という発言を聞くことができました。

第 1 回の活動を企画するうえで、多くの課題にぶつかりました。4 年生と 3 年生での意見のすれ違のいや情報共有不足による勘違いがあり、活動ギリギリまで話し合いを行い、「安全面に十分配慮し、1 回やってみて子どもをみないことには始まらない。」ということで第 1 回を行いました。

第 2 回の活動もインフルエンザで当日欠席する子どももいましたが無事実施することができました。

保護者の方々からは「子どもが楽しかったと話してくれたのですが、どのような教材を使っているのか教えてもらっていいですか？」という要望をいただき、実際に使用した教材を見ていただきました。

保護者 A 「このような活動を 3 回で終了しないでほしい。」「春休みなど継続して実施してくれないですか？」

保護者 B 「普段英語教室でフォニックスを習っているようだが一定の年齢を過ぎてからはあまり入っていないと思う。このように日本人の先生が教えてくれる、あいうえおフォニックスの方がいいのではないかと思います。」

以上のように保護者の方に言っていただけることはとても嬉しいことであり、現在決まっている 1 月実施分の活動も頑張りたいと思いました。

良かった点はそのまま活かし、悪かった点をこれからの活動で改善していき初回よりもよりよいものを作っていきたいと思っています。

リズムで英語 in 七ヶ浜

平成 27 年 1 月 10 日 ファングループ 代表 平野裕司 担当教員 黄 淵熙 報告者 櫻井 友貴

1. 事業名及び趣旨

事業名：リズムで英語 in 七ヶ浜

趣旨：英語に親しむ機会を提供することで、英語学習に対する興味・関心を高めたいと考えて企画しました。小学校中学年までは英語学習の導入として、音楽やゲームを使った学習動機を高めるための活動を、小学校高学年および中学生はそれに加え、英語学習の基礎となる音と文字のルールである「フォニックス」を中心とした学習支援を行いたいと考えていました。

2. 開催団体名

黄グループ

3. 活動日時

平成 27 年 1 月 10 日 (土)

10:00 ~ 12:00 13:00 ~ 15:00

4. 開催場所

生涯学習センター

5. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学校 1 年生から中学校 1 年生

参加者数：16 人 (小学生 15 人 中学生 1 人)

開催者数：16 人 (学生 15 人 教員 1 人)

6. 開催内容 当日の日程

9:00 生涯学習センター 集合

8:00 ~ 9:00 移動 (宮城県交通バス)

9:00 ~ 9:30 到着、会場設営

9:30 ~ 10:00

受付 (How the Grinch Stole Christmas DVD 鑑賞) ※ 1

10:00 ~ 12:20

開始、ゲーム、スクエアステップ、フォニックス、説明、

修了式

12:30 ~ 13:00 終了、昼食、午後の部受付

13:00 ~ 15:00 開始、ゲーム、スクエアステップ、フォニックス、説明、修了式

15:00 終了

15:00 ~ 15:30 撤収作業

15:30 生涯学習センター 解散

7. 活動報告

7.1 会場設営の様子 [宿泊室 1・2]



スクエアステップ準備

- ・第 2 回のスクエアステップではアルファベットを使ってステップを踏みましたが、第 3 回のスクエアステップでは数字を使ってステップを踏むように準備を行った。
- ・第 2 回と同様に宿泊室 1・2 を使用して行った。襖で 2 つに仕切り、一方では活動、一方では準備というように運営を行った。
- ・準備待ちの時間を作らないでスムーズに活動を行うことができた。

7.2 「リズムで英語 in セーバ」の活動の様子



- ・受付の待ち時間に How the Grinch Stole Christmas の DVD（英語バージョン）を上映した。内容は英語だったものの、みんな真剣に見ていた。また、第 3 回ということもあり、子どもたちも落ち着いた様子であった。

① Head Shoulders Knees and Toes ♪

- ・身体の部分名称の確認。頭、肩、膝、つま先を音楽に合わせてタッチしていく。段々と音楽の速度が上昇し、難易度が変わっていく。

② One little finger ♪

- ・王様当てゲーム。王様を当てる側と王様側に分かれて行う。王様はばれないように仲間に指示を送り、当てる側は指示を出している王様を探し当てる。

③ 「スクエアステップの活動」の説明



- ・スクエアステップの説明をポスターとマットを用いて行った。決まったマス进行を踏むこと、マスからはみ

出さないことなどの基本ルールからリレーの説明を行い、実際に活動した。

④ スクエアステップの活動

- ・ルールを理解し、グループを決め活動。グループ内で友達と相談しながら順番を考え、一生懸命にスクエアステップステップに参加していた。どのグループも一番になりたいという気持ちが強く、全員が真剣にリレーに取り組んでいた。前回の活動ではジャンプしてしまうなど予想外の行動もあり大変であったが、第 3 回の活動では丁寧なルール説明を心掛けた。



⑤ フォニックス

- ※前回の活動と同様に英語の経験が浅い子どもと、経験がある子どもとに分けた。分け方は第 1 回の活動の様子（帰国子女 2 名、英語教室に週 3 回通っている子ども 1 名）のほか、第 2 回に p と q の区別ができるのかなどを受付の際に行った確認をもとに分割

した。(シールを名札に貼り移動の際わかりやすくした)

[英語経験浅い子]



- 1 前回の復習 (A ~ M)
- 2 チャンツ & フォニックス歌 (N ~ Z)
- 3 Simon Says Game
- 4 THE FOOT BOOK 絵本
- 5 だるまさんが転んだの英語バージョン

はじめに前回の復習のために a ~ m の単語を使っ
ての遊びを行い、次に n ~ z のフォニックスの歌
をうたいました。簡単な英語、例えば「Stand up.」
「Sit down.」「Walk.」「Stop.」などの指示に、「Simon
says」と言った時だけ、指示に従うゲームです。THE
FOOT BOOK の絵本を読み、「だるまさんが転んだ」の
遊びに結びました。体も使うリスニングも兼ねたゲー
ムであり、音声と動作が一致させる T P R (全身反応
法) 教授法ということから今回の活動に取り入れまし
た。

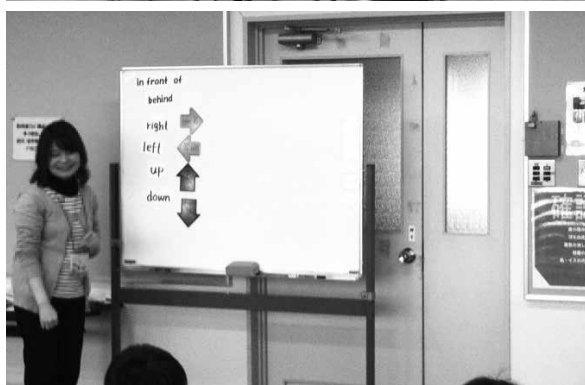
[英語経験有りの子]

- 1 前回の復習
- 2 サイレント e のフォニックス
- 3 前置詞を使った遊び (ペアになり、英語で考えた文
章を相手チームが再現する遊び。福笑い。Card さ
がし←理解度により調整。)

前回の活動からさらにサイレント e のフォニックス
の学習と前置詞の学習を取り入れました。はじめに
cat mat hat bat を使った単語遊びで復習を行い、サ
イレント e の学習では、hate cute wine の単語を使い、

この単語たちに共通するルールとして、母音字+子音
字+e の時、終わりの e はその前の母音字をアルファ
ベットの名前読みに変え、e 自体は発音しないという
ルールがあるということを学びました。前置詞を使っ
た遊びをし、この単語で on や under を使って遊びま
した。「cat is under the table. hat is on the cat, bat is
under the cat, cat is on the mat」

と言われたら、その英語が示してある所へ行って、
cat のカードをグループで協力して探す遊び、福笑い
等を行いました。



⑥修了式



- ・3回の活動をやりぬいたことを称えて、賞状の授与を行いました。何名かの子どもに感想を発表してもらいました。

8. 参加者の感想

○ 低学年男子

- ・お菓子を貰えてよかった。英語のゲームが楽しく、またやってみたいと思った。

○ 中学年女子

- ・英語をたくさん勉強することができた。また活動があったら参加したいと思った。

○ 中学生男子

- ・英語には、いろいろなルールがあることが分かった。ゲームもとても面白かった。

9. 活動を通じて学んだこと、課題

昨年の活動に続いて3回目となった今回の活動では、第1回の活動、第2回の活動で参加者のレベルを知ることができたことや子どもが活動に慣れ、ふざけてしまうというような課題を見直し、改善を図りました。

主な改善点としては、活動を始める前に活動中に使用機器に触れないことや、安全的配慮からこちらの指示には従ってもらおうという旨を伝えたことです。子どもの理解度に応じて、柔軟な配慮を行い、活動への取り組みが円滑になるようにしました。

スクエアステップでは感覚運動統合の意味を持たせるために、ルール確認を念入りに行いました。子どもにスクエアステップのルールが完璧に入っていないという反省点や子どもが慣れてきてふざけることを予想し、説明を行いました。また、ルールを守り活動に取り組んだ子どもに対しては、お菓子の景品を渡しました。ご褒美システムを活用したことで、内的動機づけがより強くなり、良いこと、悪いことの区別をつけることができるようになったと考えます。

フォニックスの活動では英語の経験が浅い子どもと、

経験がある子どもを分割したことに加えて、活動内でも理解度に応じて子どもたちの学習内容を分岐させました。それにより子どもたちは、今回こちらが学ばせたいと考える内容を前回以上に理解することができたと考えます。グループ分けの際には、第1回の活動の様子（帰国子女2名、英語教室に週3回通っている子ども1名）のほか、第2回にpとqの区別ができるのかなどを受付の際に行った確認をもとに分割しました。（シールを名札に貼り移動の際わかりやすくしました）

フォニックスの活動では子どもたちがそれぞれのレベルにあった学習活動を行うことで、楽しく活発に活動に取り組み、企画の趣旨でもある英語に親しむ機会を提供することで、英語学習に対する興味・関心を高めるということや英語学習の基礎となる音と文字のルールである「フォニックス」を中心とした学習支援を行うことができたと感じます。

最初の活動以降、だんだんと子どもたちから活動への積極的な参加が臨まれるようになり、最後には全員から「楽しかった!」という感想を聞くことができました。

第3回の活動では、前回、前々回での反省点や良かった点を生かし、スムーズかつ楽しく活動することができました。企画するうえでぶつかった課題に対しては、しっかりと話し合いを重ね、総力を挙げて対応することができました。その結果、第3回の活動もインフルエンザによって欠席する子どもが出るなどトラブルはありましたが、無事実施することができました。

保護者の方々からも活動を見学したいといった要望をいただき、実際の活動、教材を見ていただきました。「もっと活動を続けてほしい。」「3回と言わず春休みなど長期休みでも実施してくれませんか?」など好意的な意見をいただくことができました。

以上のように保護者の方々からも子どもたちからも今回の活動に対して、良い印象を持てただけのことに成功しました。大変喜ばしいことであるとともに七ヶ浜町における学習支援としての成功を意味するものであると感じました。

ふぁみりあ冬の大運動会 活動報告

平成 27 年 1 月 5 日 報告者 伊藤拓哉

1、事業名および趣旨

事業名：ふぁみりあ冬の大運動会

趣旨：子どもたちの体力向上や協力しあうことの大切さを感じてもらう

2、開催団体名

東北福祉大学学生ボランティアサークルふぁみりあ

3、活動日時

平成 26 年 12 月 21 日（日） 10：00～12：30

4、開催場所

七ヶ浜町生涯学習センター 屋内運動場

5、参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

対象者：七ヶ浜町の小学生

参加者：児童 9 名、保護者 6 名

開催者：（学生 21 名 引率者 2 名）

6、開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

7：00 福祉大正門集合 荷物搬入

7：30 移動（借り上げバス）

8：25 七ヶ浜町生涯学習センター到着

8：30 会場設営、打ち合わせ

9：45 受付開始

10：00 イベント開始

12：30 昼食

14：00 生涯学習センター発

15：00 福祉大着 解散

7、活動を通じて学んだこと・課題

○運動会というイベントを開催するにあたって当初は定員を 50 名で考えていたが実際に来ていただいた

参加者は 9 名ということで直前になり種目のルールなどの変更等がありました。

○当日は不安もありつつの開催となったが参加者の積極的な参加、スタッフな臨機応変な対応などもありスムーズな進行ができたように思います。参加者、保護者に書いていただいたアンケートにも「またこのようなイベントを企画してほしい」「楽しかった」などの感想がとても多く見られた反面課題、反省も多く見られました。

今回のイベントではスタッフをそれぞれ各種目の担当に振り分けそれぞれの種目の運営、企画をそのスタッフに任せる方式をとったため各担当のスタッフによかった点、反省点を挙げてもらいました。

■玉入れ

- ・スタッフの実況がとてもよかった。
- ・盛り上がる事ができた。
- ・玉をもっと多く作るべきだった。
- ・投げた球の回収方法を考えておくべきだった。
- ・事前準備の時間をもっととるべきだった。

■○×クイズ

- ・問題の難易度はちょうど良かった。
- ・臨機応変にスタッフで子どもの対応ができた。
- ・参加者側に混ざったスタッフの子どもの気配りが良いサポートだった。
- ・予定していた時間をオーバーしてしまった。
- ・答えを間違ったチームのフォローを考えておくべきだった。
- ・打ち合わせ不足だった。

■全員リレー

- ・スタッフがそれぞれの役割をしっかりと把握していてスムーズに競技をすすめられた。
- ・臨機応変に対応できた。
- ・けがの心配があったがその心配もなくてよかった。
- ・ふぁみりあの企画力を活かす工夫ができなかった。
- ・説明のときにミスがあった。
- ・進行を - スムーズに行うことができなかった。

■しっぼとり

- ・スタッフの対応もよくずるした子に対してもみんな平等に楽しめた
- ・説明、デモがわかりやすかった。
- ・時間をもう少し短くとってもよかった。
- ・3 回行ったが3 回目にはバテバテになっている子どももいた。
- ・準備に時間がかかってしまった。
- ・ルールを破る子どもたちへの対応が難しかった。
- ・準備不足。
- ・子ども同士でぶつかってしまったことがあったためリスクマネジメントをもう少し考えるべきだった。
- ・スタッフ同士の連携がとれていないことがあった。

■綱引き

- ・時間通りに終わらすことができた。
- ・説明もしっかりできていた。
- ・綱にひっぱられた子どもが転んでしまうことがあった。
- ・スタッフも臨機応変に楽しめた。

■障害物リレー

- ・怪我もなく実施することができた。
- ・デモや説明がわかりやすかった。
- ・なぞなぞのクイズの難易度に差があった。
- ・準備不足が目立った。
- ・各競技しっかりとしたもののができた。

などが挙げられました。

○多くの種目の反省で挙げられたのが準備不足ということでした。

このプロジェクトが始まったのが夏の終わり頃からで準備期間はたくさんあったにもかかわらず準備不足という反省が多く挙げられるのはやはり助成をしていただいたボランティアという初めての経験によるものとバスや運動用品のレンタルなどの事務的な手続きに時間がかかってしまったことが大きな要因としてあると感じました。

そして、今後このようなプロジェクトに参加させていただく際には広報活動をもう少し考えなければいけないと感じました。1 度チラシを配って各小学校にポスターを貼るだけでは参加者はなかなか集まりません。例えば各小学校に直接出向き、主催者自身で小学生に対しイベントの説明をする時間を設けさせていただくことや他のプロジェクトの団体と協力し各団体がイベントを開催する際に他の団体の紹介を行うなど改善の余地はあったように感じます。同じプロジェクトで活動しているのであればもう少し繋がりをもって各団体同士が協力しあえる体制を作ればなお良かったように感じました。反省もありますが全体的には事前準備、当日運営を通してふぁみりあの企画力を活かせたとても良いイベントを行うことができたように思います。今回の貴重な経験を今後のふぁみりあの活動に役立てていければと思います。

8、活動風景（写真）

■開会式の様子



- ・開会式ではタイムスケジュール、避難経路の説明、ふぁみりあの説明を行った。

■ 準備運動



- ・ラジオ体操の音源を使用し準備運動を行った
- ・仙人の弟子役が先頭にたっておこなった。

■ 仙人登場



- ・準備運動が終わったタイミングで登場
- ・参加者に試練を与えるという目的で登場

■ 玉入れ



- ・普通の玉入れではなく距離をとった玉入れを行った

- ・予想以上に玉が入り玉を数えるのに時間がかかったがとても盛り上がった

■ ○×クイズ



- ・地理、アニメ、流行など様々なジャンルの○×クイズを行った
- ・スタッフと参加者が協力して行うことができた

■ 全員リレー



- ・参加者、スタッフ全員参加の全員リレーを行った。
- ・一人半周でアンカーは一周走った

■ しっぽとり



- ・腰にすずらんテープで作ったひもをはさみ、それを取りあうゲーム
- ・途中接触もあったがけがなく行うことができた
- ・3分でおこなったが後半はばてばてだったため2分でもよかったかもしれない

■ 綱引き



- ・2チームで3回行った。
- ・学生スタッフと参加者の対抗戦も行った
- ・赤白協力してできた。

■ 障害物リレー



- ・ネットをくぐり、動物絵合わせ、ピンポン玉運び、などなどをおこなった。
- ・最後には仙人も登場

■ 閉会式



- ・代表からの挨拶、参加者にインタビューを行った。
- ・その後参加者や保護者に対するアンケートも行った。

■アンケート

○子ども

- ・アンケートによると「今回の活動が楽しかった」とする子どもは9人でした。
- ・次回、体験してみたい活動については「サッカー」「ドッチボール」という声がありました。

○保護者

- ・参加させてよかったとした人は6人でした。
- ・子どもに体験してほしい活動として「サッカー」「バドミントン」「ドッチボール」という声がありました。

以上、子ども・保護者の方々の声を今後の活動にも反映していきたいと思います。

末筆ながら七ヶ浜教育委員会、七ヶ浜の各小学校、本補助金の関係者の皆さまにこの場をお借りし感謝申し上げます。

なりきり わくわく ワークショップ 活動報告

平成 27 年 2 月 13 日 森ゼミ 代表 高山優衣 担当教員 森明人 報告者 高橋侑希

1、活動目的

1 月 17 日実施予定のワークショップの前日準備および現地会場でのリハーサル

2、開催団体名

森ゼミ

3、活動日時

平成 27 年 1 月 16 日（金）12 時 30 分～16 時 00 分

4、開催場所

七ヶ浜町生涯学習センター

5、参加者の状況（前日準備の為参加者は学生のみ）

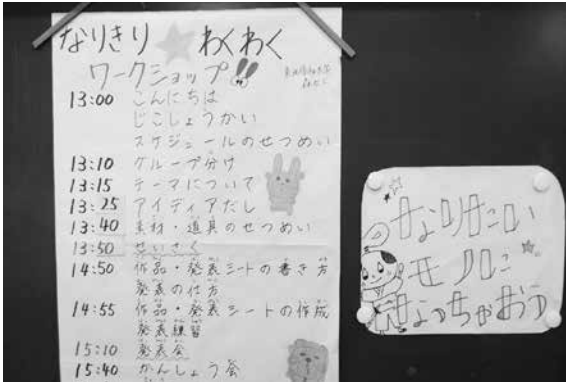
開催者：11 名

6、開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

10:50	仙台駅集合
11:00～12:00	移動（仙石線、タクシー）
12:00	生涯学習センター到着
12:00～13:00	昼食
13:00～17:00	準備・リハーサル
17:00～18:00	片付け・反省会
18:00～19:00	移動（タクシー、仙石線）
19:00	解散

7、活動報告

7.1[会場設営の様子]



7.2[リハーサルの様子]



8、1日の振り返り

翌日の本番に向けて、全員で会場設営やリハーサルを行いました。会場の広さや照明の明るさなど、なかなかイメージがつかめなかったため前日に現場に行き確認することによって、不安な点が残らないようにするためです。会場設営では教室の雰囲気を明るく見せ、子供たちがリラックスし、ワクワク感じられる空間にするために黒板を使いウェルカムボードを作成したり、画用紙にイラストを描いたりと装飾を施しました。また、子供たちが安全に作業できるよう、机の設置の仕方も通路が狭くならないかなど注意しながら行いました。

なかなかメンバー全員が揃ってミーティングやリハーサルをする時間がなかったため、共有事項に漏れがないか確認した後に、リハーサルを行いました。内容としては、

実際に学生が参加者の小学生役になりきり、最初の受付から発表会まで一連の流れを確認しました。その後、リハーサルの流れから問題点がなかったか確認し合い、互いにアドバイスを出し合いました。いざリハーサルをしてみると抜けている点がたくさん見つかり、プログラムを練り直したり、物品の追加購入をしたりなどバタバタしてしまい、早めに本番を意識したりリハーサルを行っておくべきであったと感じ反省しました。しかし、時間がない中でもメンバー同士協力し合い、素早く実際に購入した道具・素材を広げ設置し、不足しているものや使用するとき危険なものなどがないか話し合うことができたことや、常時気になる点などを全員で話し合い改善したことが翌日スムーズな運営ができたことに繋がったのだと感ずます。

なりきり わくわく ワークショップ 活動報告

平成 27 年 1 月 27 日 森ゼミ 代表 高山優衣 担当教員 森明人 報告者 高山優衣

1、事業名および趣旨

事業名：なりきり わくわく ワークショップ

趣 旨：なりきりワークショップということで、子どもたちに何になりたいのか考えてもらい、カップに装飾をして作品を作ってもらい。グループの子と創作活動を行うことで、自発的に他の子と関わり、コミュニケーション能力を養ってもらい。また、作品を作ることで、創造する力、表現する力、楽しさを感じてもらい。

2、開催団体名

森ゼミ

3、活動日時

平成 27 年 1 月 17 日土曜日 12:30～16:00

4、開催場所

七ヶ浜町生涯学習センター

5、参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

対象者：小学 1 年生～小学 6 年生

参加者：4 名

開催者：12 名

6、開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

7:45 仙台駅集合

8:00～9:00 移動（仙石線、タクシー）

9:00 生涯学習センター到着

9:00～11:30 準備・リハーサル

12:30～13:00 受付・アイスブレイク

13:00～13:50 自己紹介、内容の説明、
サンプル紹介、素材・道具の説明

13:50～14:50 作成、作品・発表シートの作成

14:50～15:50 発表会、鑑賞会、1 日の振り返り

16:00 ワークショップ終了

16:00～18:30 撤収作業・反省会

18:30 移動（タクシー、仙石線）

19:00 解散

7、活動報告

7.1[会場設営の様子]



7.2[活動の様子]

①アイスブレイク・自己紹介・スケジュール説明

始めにクイズや人間知恵の輪などで、アイスブレイクを行った。初めて会った子が多かったので、緊張をほぐす良い時間となった。その後、自己紹介と



今日のスケジュールの説明、子どもたち向けに今日の注意事項を話し、2人1組、3人1組のグループに分かれた。

②作品紹介・カップパ選び

どんなものを子どもたちに作ってもらうのか、イメージが湧きやすいように、事前に学生が作った作品を紹介した。その後、作品の土台となるカップパをポンチョ型と袖のある一般的な形のものの2種類から子どもたちに選んでもらった。



③素材・道具の説明

制作に入る前に、今日使う素材と道具の説明を行った。素材ではカラフルなものや質感の異なるもの、音のなるものなどたくさん用意したので、どのようなものがあるのか手に取って学生が紹介した。はさみなどの道具も使い方によっては危険なので注意してほしいことも交えて説明した。



④制作

始めにアイディアを紙に書いてもらい、それをもとにグループの子と制作に取り組んでもらった。たくさんの素材を工夫して組み合わせ、試行錯誤しながら作成していた。グループの子と自然とコミュニケーションをとりながら、協力して取り組む姿が見られた。



⑤発表会

子どもたちが作ってくれた作品をみんなの前で紹介する発表会を行った。事前に発表シートを作成してもらい、それをもとに紹介してもらった。何になりきったのか、どんな特徴を持っているのか、言葉にししながら、一生懸命伝えようと頑張って発表してくれた。



⑥子どもたちの作品

左：題名「ようかいにんげん」

右：題名「春の桜」

作品はどれも私たちが驚くものばかりで、子どもたちの想像力には驚かされた。



8、参加者の感想

○小学 1 年生男の子

- ・色々なものをくっつけることが出来て、難しかったけど楽しかったです。

○小学 6 年生女の子

- ・学校ではあまりやらない図工だったので、楽しかったです。友達と協力して出来たので良かったです。
- ・普段できないような体験ができて楽しかったです。
- ・素材がたくさんあったので選ぶのが楽しかったです。

9、活動を通して学んだこと、課題

これまでゼミ内では企業の方にプログラム提供を受け、何度か子ども向けワークショップを行ってきましたが、自分たちで企画し、コンペを受け、ワークショップ開催までの事務的な作業や運営を行うのは初めてのことでした。戸惑いながらも、子ども支援プロジェクトの教員の皆様はじめ、各団体の皆様のご指導、ご協力のもと学生同士協力し合いながら、活動を進めてくることが出来、無事に事業を開催することが出来ました。

当日は体調不良による急遽欠席や飛び入り参加など、事前練習と違う人数ということから不安もありましたが、リハーサルや準備を行っていたこともあり、柔軟に対応できたと感じました。ワークショップをやり遂げて、子どもたちには楽しんでもらえたと感じています。ほとんどが初対面の子もだったため、アイスブレイクや自己紹介など最初の時点で子どもたちの緊張をほぐし、場を和ませるような雰囲気作りを大切に取り組みました。また、制作中は創作活動により、子どもたちの想像力や表

現力を引き出すため、あえて手伝いをするのではなく、少し距離をとり、子どもたち主体の活動を意識して取り組みました。どういうものを作るのかという説明や事前に自分たちでサンプルの作成をするなど、子どもたちが「わくわくする」「こういう風に作りたい」といった創造意力をかきたてられるよう工夫しました。また、ワークショップの中ではコミュニケーションをとる重要性について改めて実感しました。参加してくれたこどもに対してのコミュニケーション。なかなか打ち解けられない子ども同士の関わりの懸け橋となるコミュニケーション。子どもたちに対してファシリテーションする学生スタッフ同士のコミュニケーション。これらのコミュニケーションが重要だと考え、人と人との距離感、積極的な声掛け、情報の共有などに注意して取り組みました。子どもの手伝いをしすぎると学生スタッフに甘えてしまい、積極的に取り組まなくなってしまう子や人見知りで聞きたくても聞けない子をそのままにしまい作業が遅れてしまう子。私たちと子どもの距離の取り方次第で、制作の進行状況や子どもの良さを引き出せるかに影響を及ぼすと感じ、関わり方、距離の取り方に気を付けるべきだと感じました。学生スタッフ内での連携を取るためにもコミュニケーションをとり、協力して進めていくことの大切さを改めて実感しました。

今後の課題として、大きく 2 つ挙げられます。1 つ目は子どもとの距離の取り方です。あまり手伝いすぎず、子どもたちの作成のヒントになるような言葉を投げかけるなど、あくまでも見守るという姿勢を大事に取り組んでいく必要があると考えます。2 つ目は念入りの準備をすることです。本番をイメージした準備が必要です。事前にプログラムや物品購入など準備は進めてきたものの、いざリハーサルをしてみると抜けている点がたくさん見つかり、プログラムを練り直したり、物品の追加購入をしたりなど最後まで気が抜けませんでした。もっと事前にリハーサルを設け、本番をしっかりと意識した準備が出来れば、さらによいワークショップができたと考え、今後の課題として挙げました。今回のワークショップを企画・運営するに当たり、多くの学びと課題が見つかりました。ここでの学びや経験はワークショップだけに限らず、様々なところで発揮できると感じ、学生各々が今後の活動に活かしていきたいと考えてます。

森ゼミ「なりきりわくわくワークショップ」(1月18日分) 中止の理由について

平成27年2月12日 担当教員 森明人 報告者 森ゼミ高山優衣

標記の件につきまして、1月18日第二回目のワークショップへの応募者が1名だったため、参加者の許可を得まして、1月17日第一回目のワークショップへ参加変更をして頂きました。本ワークショップは、こども達が少人数にわかれてペア・グループでワークショップを

進めるため、1名の参加者ではワークショップが成立しませんでした。

今後、機会があれば開催日時・プロモーションを工夫し、ひとりでも多くの子どもたちに参加してもらえるよう取り組んで参りたいと存じます。

第 3 章

総 括

七ヶ浜町の取り組みを通して

石 原 直

宮城県宮城郡七ヶ浜町は、仙台市の東側の沿岸部に位置します。人口 2 万人ほどの町ですが、東日本大震災による死者、行方不明者は 77 名、住宅、建物被害は 1323 戸（全壊＋半壊数）にのぼる大きな被害を受けた被災地です。（2012 年 10 月 31 日時点）

小学校は 3 校、中学校は 2 校あり、合わせて 1900 人ほどの子どもたちが在籍しています。

東北福祉大学（以下本学）は、東日本大震災直後から南三陸町をはじめとした多くの地域で震災ボランティアなどの活動を積極的に行ってきました。このような中、平成 26 年 4 月に七ヶ浜町教育委員会と本学は、教育に係る連携協定を締結しました。

被災地である七ヶ浜町の子どもたちのために、どんなことをしていけば私たちは役に立つことができるのだろうかと考え、サマースクールを企画しました。被災地には未だ仮設住宅に暮らす方たちも多く、落ち着いた学習環境が保てない子どもたちもいるのではないかと。未だ、震災が精神面でも大きな影を落としているのではないかなど、子どもたちへの支援が必要だと考えたからでした。

夏休み中に小学校 3 校で、学生による学習支援をすることで少しでも子どもたちの学びに貢献したいと考えました。また、学力向上だけでなく、学ぶ喜びや学習に興味を持つ機会にもしたいと考え、午前中は学習支援、午後はものづくりや実験教室を開催することとしました。

今年度は、午前中の勉強会にはのべ 968 名の子どもたちが参加し、午後のものづくりや実験教室には、のべ 690 名の子どもたちが参加してくれました。関わった学生は、のべ 201 名にもなりました。問題が解けたときの子どもたちの笑顔、実験を見たときの驚いた顔、ものづくりを終えたときの達成感など、子どもたちにとって忘れられない夏だったことと思います。そして、学生たちにとっても充実した貴重な経験でした。

また、秋には七ヶ浜国際村を会場とした『七ヶ浜芸術祭』

を開催しました。

サマースクールは小学生だけを対象にしたものでしたので、もっと幅広い多くの子どもたちに学ぶ楽しさを感じて欲しいと考えたからです。午前中は、楽器演奏や歌、絵の教室などを開催し、午後はものづくりのコーナーをたくさん開きました。さらに、本学の学生が七ヶ浜町をフィールドとして調査した土地の成り立ちを初めとした様々な内容の発表会も行い、小学生だけでなく、未就学の子どもたちや保護者の方たちも来場し、学生とともに楽しい時間を過ごしていきました。

このほかにも、ゼミやサークルを対象としたコンペを実施し、選ばれたグループが工夫を凝らした講座やイベントを開催し、多くの子どもたちや保護者の方たちに楽しんでいただきました。

私たちは、七ヶ浜町を単にたくさんある被災地の一つと考えているわけではありません。今回取り組んだ様々な活動は、子どもたちのためであるとともに、学生の学びの機会でもありました。

現在七ヶ浜町は、少しずつ震災前の姿を取り戻そうとしています。しかし子どもたちの心や体が元に戻るのに長いときが必要であることは想像に難くありません。本学はこれからも子どもたちを思い、寄り添っていきたいと考えています。そのためには継続した取り組みが欠かせません。幸いなことに、七ヶ浜町教育委員会や各学校からは、子どもたちにとってとても良い機会であり、来年度以降もぜひ継続して欲しいという評価を頂きました。頂いた声に応え、今後は今回の取り組みを精査し、工夫改善を加えながらより良いものにしていきたいと考えています。

このような機会を頂いた七ヶ浜町の皆様や子どもたち、ご支援いただいたプリンセスプリンセスならびに事務所、関係機関の方々に深く感謝申し上げます。

野々島の取り組みを通して

金 政 信

学生主体に実施した、島であそべんちゃー IN 野々島（児童生徒を対象とした体験型学習）は、その計画から実施の過程の中で、地域資源の活用や環境づくりの大切さ、様々な人々の協力や支援があって実現できたこと（「地域との共創」）を、今回携わった学生は実感し学んだはずで

す。また、学生は今回の活動の準備から実施終了までの過程の中で、地域再生のヒントをつかんだり、「社会で必要な力」（「社会力」①自らかかわる、②自ら考える・気づく、③自らアクションを起こす）を養うことが出来たのではないのでしょうか。

そこで、本総括では、準備から実施までの過程を振り返りながら前述したことの考察を行ってみたいと思います。

まず、第1段階として、本活動に携わることになった学生は活動に必要な、知識の習得を行うことにしました。具体的には、野々島という活動場所についての学びです。「浦戸諸島・野々島って、どんなところ？」、「どんな資源があるの？」、「現地の実情は？」、「島の歩き方について」などを、座学と現地調査の実施（島の散策や現地で活動する団体や島の方から学ぶ）から学びました。

次に、第2段階として、第1段階の知識の習得を踏まえたうえで、児童生徒を対象とした自然体験活動支援のプロクラム（活動内容）を作成することにしました。この過程の中で、学生は活動内容がなんとなくイメージできるようになってきました。しかしながら、この後何を行っていけばよいのか具体性に欠けている状況でした。様々な準備を進める中で、更なる活動に必要な知識の習得が必要となってきました。参加対象者や、自然環境の中での活動についての知識が必要になってきました。もともと本活動の計画では、配慮が必要な児童生徒を対象とした自然体験活動を実施する計画となっていました（実際は、一般児童で実施）。

そのため、第3段階として、配慮が必要な児童生徒への接し方、自然体験活動を行う際のリスク管理の知識の習得や、心得について、それぞれ、ご専門の先生を招いて、ロールプレーを交えた学習指導を行っていただきました。

そして、第4段階として、今まで積み上げてきたことを基に、実施を想定したりハーサルに向けての準備へと進み、野々島にて活動本番を想定したりハーサルを実施

しました。その結果、想定していなかった多くの問題や課題が出てきました。実際の現場で実施することで、準備の段階では見えなかった様々な問題や課題が見えてきたのです。一例を紹介するならば「何を行ったらよいかわからなくなった（自分の立ち位置や、周りが今何をしているのかがわからない、このあと何をしたらよいのかわからない・・・）」「予定したことが、きちんと行われなかった」「活動場所の設営が大変だった（活動を想定した配置ではなかった）」「必要ないこと（もの）が、いろいろあった」「必要なこと（もの）がぬけていた」「食事の準備に時間がかかった」など。リハーサルを行ったことで、学生自らが自分たちの、社会で必要な力が弱いこと（未熟さ）に気づかされたのです。この段階での、自らの気づきが今回の活動過程の中でとても重要なことだったと思います。

そこで、改善（克服）するために行ったことは、まず、役割割りごとのグループを再編成し「係活動予定表」「当日用タイムスケジュール」「備品リスト」を整理し、何度も話し合わせつくり込んでいったことです。また、並行して「全体計画」「会場（設営）マップ」「参加者名簿」「しおり」なども作成しました。この時、各係はもとより全体の情報の共有化を徹底することを義務づけました。ライン（ネット）上のコミュニケーションだけではなく、顔の見えるコミュニケーションの大切さも学んでもらいました。

第5段階として、9月28日（日）秋晴れの中、小学生18名を迎え、自然体験活動を実施しました。課題は残ったものの、事故もなく無事終了することが出来ました。参加していただいた、児童やその保護者の皆様から大変満足していただけた活動となりました。

なお、毎年10月に開催される大学祭（国見祭）において展示会場を設け、大学内外の方々に、本活動や野々島の素晴らしさについて知ってもらう機会も得ました。

次年度の活動に向け多くの課題を残しつつも、冒頭で記述した「地域との共創」「社会で必要な力」の大切については、計画から実施までの活動過程の中で学生自身の気づきの中から養われたようです。

最後になりますが、塩竈市教育委員会様にはご後援、児童の募集等ご尽力いただき感謝申し上げます。企画の段階からご支援いただいている津田安廣塾長はじめ、野々

島自然塾の皆様、島民の皆様、参加していただいた児童の保護者の皆様、その他多くの皆様のご支援ご協力があった、本年度の活動を無事終えることができました。この

場をお借りして改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

菊 地 淳

野々島の恵まれた自然環境や文化、伝統など地域の素材を活かしながら、学生が自ら企画立案し、様々な障害を乗り越えながら、事業を実施する事を通し、自分自身の持つ特性や、得意・不得意なことを認知し、学生同士が補完し合い、不足な部分は地域の方や専門家の力を借りて、プロジェクトを推進した学生の皆さんの成長ぶりは、目を見張るのがありました。

初めは、想定する参加者の子どもたちへ提供するプログラムを考えると、子どもがやりたいと思う事よりも、子どもたちにやらせたいことや自分たちがやりたいことにすり替わってしまうような場面が多く見られたのが、講義やロールプレイ、現場でのリハーサルなどの学びを重ねるたびに、実現可能な内容に近づいて行きました。

日程表や予定表、役割分担、物品リストなど、提供されたプロ用のフォームもアレンジしながら活用し、担当する係を決定し、教材やしおり、サインなどイベントで必要なものを揃えることが出来たのも、それぞれの得意分野を活かした活動になっていったからだと感じました。

今回のように経験のないイベント企画をする場合、自分たちの思いが先行してしまい、様々なメディアから得られる不確実な情報を参照して、机上で計画を立てることが起こりがちです。その事がいかに不条理であるかに自ら気づくことは難しいことです。少し時間はかかりましたが、企画会議で議論を重ね、自らの力で出口を見つ

けることが出来ました。

当初何をやってらよいかを迷っていた学生たちが、現場に足を運び自分の目や耳や嗅覚など五感を使って得てきた情報やプレ事業で得た経験や課題は、価値ある貴重なもので、計画づくりのベースになったと感じます。更には先生方や経験者の指導助言を素直に受け止め、より良いプログラムを作るためにシミュレーションを行い、問題点や課題を確認して共有し、対応策を練り一つ一つ解決しました。自らの経験として積み重ねるために多くの時間を使いましたが、その努力が学生個々の対応力を高めました。何事にも真摯に取り組んだことが、事故なく参加者の評価が高い、大きな成果に結び付いたのだという、関係者からの評価でした。

自分の体を使い、五感を総動員し、第六感を働かせながら活動した経験は、参加した学生一人ひとりの器を大きくしてくれたことと確信しています。これからの学業でも、社会人となって職場でも、将来の家庭生活や子育ての場面でも役立つことがあると思います。自信を持って活用していただきたいと思います。

最後になりますが、野々島での「仙台白菜採種のプロジェクト」を支援していた縁を、「島であそべんちゃーIN 野々島」につなぐ機会をいただいた本プロジェクトに心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

学生企画の取り組みを通して

萩 野 寛 雄

東北福祉大学は、部／サークル活動が盛んである。野球やゴルフのようにスポーツ分野で世界的に活躍する部活動もあれば、ボランティアなど地に根差した社会貢献分野で活躍するサークルもたくさんある。また、地域で実践的に活動するゼミもある。中でも、子どもを対象とする活動は大人気である。

そこで、子ども支援プロジェクトでは子どもと年齢も近い大学生の若い感性を活かし、その活動を支援することで被災にあった子どもの笑顔を効果的に引き出したいと考えた。しかし単なる支援ではなく、学生の勉強にもなるようコンペ方式を採用した。学生は現地を調査し、自分たちの行いたい支援プログラムを考案し、それを審査員である教員にプレゼンせねばならない。実際に子どもに接するには、古いTV番組「マネーの虎」のような厳しい教員の目をパスしなければならなかったのだ。

7月22日の夕方遅くに開催された説明会には、急な日程にもかかわらず6団体が参加してくれた。6団体は前期試験終了直後の8月6日、被災地の七ヶ浜町で現地見学ツアーを行った。会場として利用可能な施設を実際に見て、七ヶ浜の子どもと直に会うことで、学生諸君のインスピレーションも高まったようである。夏休み中、各団体は支援プログラムを決定し、コンセプトを明確化し

てプレゼン準備に励んだ。二学期開始早々の9/19に緊張のコンペが開催され、体育会1、サークル1、ゼミ3の5団体が応募して見事なプレゼンを披露してくれた。

採用枠は本来3だったが、どのプログラムも甲乙つけがたく、学生の熱意に押されて5団体全ての支援が決定した。その後、学生は自ら七ヶ浜の教育委員会や学校をポスターやチラシを手に何度も訪れ、活動への御協力を依頼した。年度途中での突然の事業だったため、各学校様も行事が詰まっていた日程調整には苦労した。11月30日によりやく実施にこぎつけ、最終的には5団体で9回の企画を実施できて100名近い参加者が集まってくれた。

今年はプログラム初年度だったこともあり、七ヶ浜町の皆様や本学学生諸君に多大な負担をかけてしまったことを大変申し訳ないと反省している。しかし、被災地の子どもの笑顔によって、学生諸君の苦労も報われたのではないかと密かに安堵している。来年は今年の実省を踏まえ、日程を早めに確定させたり広報を工夫したりして、ますます多くの子どもの笑顔を引き出して頂きたい。学生諸君の努力には、心から感心しました。

次年度以降について

星 山 幸 男

1、基本方針

今年度に引き続き、七ヶ浜町での活動、塩竈市浦戸諸島野々島での活動、学生企画事業の三つの柱でプロジェクトを推進していく予定です。

2、七ヶ浜町での活動

七ヶ浜の子どもたちの心や体が本来の姿に戻るには時間が必要で、子どもたちに寄り添いながら活動を継続していかなければなりません。そこで、今年度実施したサマースクールとオータムフェスティバル活動を、学校等と連携しながら地域の皆さんと一緒に推進していきます。今年度の反省を踏まえて改善を加え、学習支援・ものづくり教室・絵画や音楽などの表現活動・体験型科学実験を継続していく予定です。その際、町からの要望も受け止めて、活動を広げることにも配慮していきたいと思っています。また、活動を支援してくれる学生を増やしていく努力も必要になると考えています。

3、塩竈市浦戸諸島野々島での活動

「地域との共創」「社会で必要な力を養う」という二つの目標は継続します。今年度は自然体験活動が9月に実施されましたが、来年度以降は、子どもたちが参加しやすい時期を慎重に選んで、早い段階から準備を進めていく予定です。そして、野外活動や自然環境に関する専門知識を有する学内・学外の人との連携をより深め、学生が主体的に関わりながら子どもたちの支援が行えるようなプログラムのさらなる充実を図っていきます。

4、学生企画事業

参加を希望する学生団体の募集を今年度より早く開始し、学生たちが夏休み前から現地で活動できるようなスケジュールで推進していきます。また、プロジェクト推進委員会が十分な準備がなされていると判断した場合には、活動場所を七ヶ浜町に限定せず、対象地域を広げていくことも予定しています。活動推進に当たっては、広報の仕方を工夫しより多くの方に知っていただくように努めること、団体を直接指導している本学教職員とプロジェクト委員会の連携を一層密にして学生の指導に万全を期することに配慮していきます。

協力団体・協力者一覧（敬称略、順不同）

七ヶ浜町教育委員会

生涯学習センター	七ヶ浜国際村
七ヶ浜歴史資料館	松ヶ浜小学校
亦楽小学校	汐見小学校
七ヶ浜中学校	向洋中学校

塩竈市教育委員会

第一小学校	第二小学校
第三小学校	月見ヶ丘小学校
杉の入小学校	玉川小学校
浦戸第二小学校	

塩竈市産業環境部 浦戸振興課

日本私立学校振興・共済事業団

若 生 忠 雄	地学団体研究会仙台市部会員
小 川 進	宮城県立多賀城高等学校教諭
田 村 正 樹	七ヶ浜歴史資料館学芸委員
越 路 明 美	仙台市立岩切小学校教頭
津 田 安 廣	野々島自然塾
伊 藤 俊 彦	野々島自然塾
鈴 木 正 徳	野々島自然塾
長谷川 雅 淑	野々島自然塾
津 田 恵美子	野々島自然塾
鈴 木 虎 男	塩竈市浦戸野々島区長
遠 藤 勝	塩竈市浦戸野々島
佐 藤 吉 輝	情報のあんこ
鈴 木 一 誓	情報のあんこ
鈴 木 雅 博	株式会社くろしお代表取締役
千 葉 浩 介	東北重機工事株式会社代表取締役

資 料

平成 26 年度 子ども支援プロジェクト予算（案）

七ヶ浜町での活動

項 目	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年	合 計
謝金	120,000	100,000	100,000	320,000
旅費・交通費	625,000	625,000	625,000	1,875,000
印刷製本費	950,000	950,000	950,000	2,850,000
備品費（少額備品含）	1,065,000	850,000	850,000	2,765,000
活動費	1,484,400	1,484,400	1,484,400	4,453,200
合計	4,244,400	4,009,400	4,009,400	12,263,200

野々島のプロジェクト

項 目	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年	合 計
謝金	760,000	600,000	600,000	1,960,000
旅費・交通費	1,010,000	1,010,000	1,010,000	3,030,000
備品費	717,400	670,000	600,000	1,987,400
活動費	2,990,792	2,369,400	2,359,208	7,719,400
合計	5,478,192	4,649,400	4,569,208	14,696,800

学生企画事業

項 目	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年	合 計
旅費・交通費	40,000	40,000	40,000	120,000
活動費	900,000	900,000	900,000	2,700,000
予備費	100,000	60,000	60,000	220,000
合計	1,040,000	1,000,000	1,000,000	3,040,000

総合計

項 目	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年	合 計
総合計	10,762,592	9,658,800	9,578,608	30,000,000

平成 26 年度 子ども支援プロジェクト決算

七ヶ浜町での活動

項 目	平成 26 年度予算	平成 26 年度決算
謝金	120,000	44,548
旅費・交通費	625,000	437,180
印刷製本費	950,000	540,000
備品費（少額備品含）	1,065,000	603,374
活動費	1,484,400	1,041,528
合計	4,244,400	2,666,630

野々島のプロジェクト

項 目	平成 26 年度予算	平成 26 年度決算
謝金	760,000	97,710
旅費・交通費	1,010,000	400,760
備品費	717,400	1,261,824
活動費	2,990,792	1,155,467
合計	5,478,192	2,915,761

学生企画事業

項 目	平成 26 年度予算	平成 26 年度決算
旅費・交通費	40,000	280,508
活動費	900,000	675,509
予備費	100,000	72,566
合計	1,040,000	1,028,583

総合計

	平成 26 年度予算	平成 26 年度決算
総合計	10,762,592	6,610,974

東北福祉大学子ども支援プロジェクト基金規程

（目的）

第 1 条 この規定は、東北福祉大学子ども支援プロジェクト（以下支援プロジェクトとする）の資金面での円滑な業務遂行を図ることを目的とする。また、支援プロジェクトの活動面の円滑化については、平成 26 年 5 月 1 日施行の子ども支援プロジェクト推進委員会規程に従い進められる。

（位置付け、名称）

第 2 条 支援プロジェクトの活動資金は、株式会社ディスクガレージからの受配者指定寄付金を充てる。本学ではこの受配者指定寄付金を、東北福祉大学子ども支援プロジェクト基金（以下基金とする）として受け入れ、取崩して使用する。

（使途の範囲）

第 3 条 基金から支出する経費の範囲は、支援プロジェクトに直接必要な人件費・教育研究経費・施設設備とし、管理経費への支出は行わない。なお、当該基金により購入した施設設備は、学校法人の所有に属する。

（基金の管理金融機関、口座名義、貸借対照表上の取り扱い）

第 4 条 基金は七十七銀行八幡町支店に普通預金口座を作成して管理する。口座名義は東北福祉大学子ども支援プロジェクト基金とする。なお、当該口座は、流動資産の現金預金として取り扱う。

（基金の使用）

第 5 条 基金の使用に関する事務処理は、本学経理規程及び旅費規程等に従って行う。

附則 この規定は平成 27 年 1 月 20 日より施行する。

平成 26 年度 東北福祉大学 子ども支援プロジェクト活動報告書

編集・発行 東北福祉大学 子ども支援プロジェクト推進委員会

〒 981-8522 宮城県仙台市青葉区国見 1 丁目 8 番 1 号

事務局 東北福祉大学 社会貢献・地域連携センター 生涯学習支援室

TEL：022-380-1067

ホームページ：<http://www.tfu.ac.jp/index.html>